

ねあたりようがいあと
0580 根当要害跡 石岡市根当 現況：山林

地図 50

根当要害は、園部川とその支流の合流点の北側に位置し、南北方向に延びる舌状台地の先端に築城されている。標高は 25m であり、南側は標高 16m の低地となっている。その規模は、南北 120m、東西 120m の範囲に及び、主郭である曲輪 I は、長さ 60m、幅 60m の地形に沿った五角形を呈している。曲輪の周囲には土塁が残存しており、北、東および西側には、最大幅 15m、最大深 7m の堀が廻っている。

また、堀を隔てた北および東側にも曲輪 II・III が配置されている。

築城時期は不明であるが、大掾氏の一族、鶴町三河守の居城と伝承されている。天正 18 年(1590)、佐竹氏による侵攻によって落城したとされる。(本田)



根当要害跡縄張図 高橋宏和 2017.1.19
(『続茨』より転載)

とじょうあと
0582 外城跡 石岡市貝地 現況：山林、況泥地、宅地 別称：石岡城跡

地図 50

外城は、恋瀬川左岸に突出した標高 23m の台地上に所在しており、その規模は南北 400m、東西 350m の範囲に及んでいる。

主郭は、南北 200m、東西 240m を有する曲輪 I であると想定され、昭和 60 年の発掘調査では、溝および堀跡が検出されている。この遺構の廃絶時期は、それぞれ 12 世紀後半～13 世紀、16 世紀代である。東には曲輪 II、南に曲輪 III が配置され、かつては、堀によって区画されていたが、現在は耕地整地により、堀が埋められており、曲輪 I が 1m ほど高い段差となっている。曲輪 I の西側に内樹形状の地形、北東側には「錘撞堂跡」、曲輪 II の北側にある岡田稻荷、礼掛神社に裏手には土塁と堀の一部が残存している。北側の台地の基部は宅地化されているため、堀切の有無は不明である。

建保 2 年(1214)、馬場資幹は府中の地頭職を与えられ、この地に居館を構えて以来、大掾氏の拠点となつた。『税所文書』には、建武 5 年(1338)「目安 税所虎鬼丸申(幹治)軍忠事 右小田・志築凶徒等、去月廿六日、寄来符中石岡城之間、属于惣領大掾十郎入道淨永(高幹)手~」にあるように、大掾高幹の居城として「府中石岡城」の名が記されている。高幹の子、詮国が代になると、かつての常陸國衙の地に府中城を築城して本拠地としたため、石岡城は「外城」と呼ばれるようになった。外城の城主は、「南城高家錄」によれば、大掾氏の一族とされる札掛兵部之助とされ、天正 18 年(1590)の大掾氏滅亡とともに外城も廃城となつたとされる。(本田)



外城跡縄張図 余湖浩一 2004.10
(『改茨』より転載)

ふちゅうじょうあと
0581 府中城跡 石岡市總社 現況：宅地、公共施設地

地図 50

府中城は、恋瀬川および山王川により開析された石岡台地の南西端に所在する。標高 25m の台地には南北方向の小支谷が樹枝状に展開している。城郭は連郭式であり、3 つの曲輪と北側を取り囲む 3 つの出丸で構成される。城内の大部分が市街地化されており、全容を把握することは困難であるが、南北 480m、東西 800m の広範囲に及んでいる。東西方向の台地を堀切で区切ることで 3 つの曲輪が配置されている。先端部に位置する

主郭である曲輪 I は、南北 70m、東西 200m の長方形を呈する。南および西側には腰曲輪があり、曲輪 II との間には深さ 10m の堀切の一部が残存している。曲輪 II の東側に配置される曲輪 III は、南北 200m、東西 260m の規模を有する六角形を呈している。東縁辺に長さ 60m の土塁が残存しているが、明治 17 年作成の陸軍迅速測図によると、土塁とその外側に堀が全周していることが分かる。平成 10・11 年の発掘調査では、北および南東縁辺部において幅 11m 以上の堀跡が確認されている。また、曲輪 II に通じる虎口は南西側にあったようである。曲輪 III の東側には帶曲輪の存在が想定され、その南側には常陸國總社宮が配置される。曲輪 III の北側には箱ノ内出丸、曲輪 I から大規模な谷津を経て、磯部出丸、宮部出丸が配置されており、磯部出丸の北側には、谷津に沿って構築された長さ 35m の石川土塁が残存している。

手塚家所蔵とする繩張図『石岡市史上巻』によると、城域の北端に所在する長法寺から青木町～金丸町～中町～守木町～南端の平福寺(大掾氏菩提寺)までの東側には「ガラ岡」と記述された空堀と思われる遺構が廻っている。「ガラ岡」と城郭の間には、寺社のほか、家臣の屋敷、町人および職人の居住地である城下が所在し、街道も南北に通じていたものと思われる。本城全体は、南北 1.0 km、東西 1.5 km、周囲 4.3 km に及ぶ「惣構」の城郭であったと思われる。さらに城域の北東側を流れる山王川と南西側の恋瀬川は、天然の外堀の役割を果たしており、南東側には、外城が配置されるなど強固な防衛体制を構築している。また、境目の城としては、根当要害、東大橋要害、竹原城、小井戸要害、取手山館(玉里砦)、高野浜城、三村城などが所在している。

13 世紀初頭、府中の地頭職となった大掾氏は、石岡城に居館を構えたが、正平年間(1346-70)、大掾詮国によって府中城が築城されて以降、清幹までの 8 代にわたる大掾氏の本拠地となった。天正 13 年(1585)になると、大掾清幹は南進する江戸重通との対立を深め、8 月 7 日には府中城も戦火に見舞われたが、真壁氏の援軍もあり、9 月に和議を結んでいる。天正 16 年(1588)、正月には江戸氏との和議は破られて、4 月 25 日、出城である取手山館などは落城したが、5 月に再び和議を結び、府中城の落城は免れた。しかし、天正 18 年(1590)12 月 22 日、常陸統一を目指した佐竹義宣による仕置きにより、府中城は落城して大掾氏も滅亡した。佐竹氏の治世では松平信久によって府中の復興が進められたとされる。慶長 7 年(1602)、佐竹氏の秋田国替え後に常陸府中藩が立藩され、六郷氏、皆川氏、天領、川越藩飛地と入れ替わった。元禄 13 年(1700)には、水戸藩主徳川頼房の五男松平頼隆が府中に封じられて本城内に陣屋を置いて政務を担った。(本田)



府中城跡縄張図 高橋宏和 2020.8.20

こいどようがいあと
0584 小井戸要害跡 石岡市小井戸 現況:山林、畠地ほか 別称:弥陀ノ台遺跡 地図 50

小井戸要害は、園部川と沢目川が合流する南側に所在する標高 22m の台地平坦面、斜面部および標高 5m の低地に所在する。その規模は、南北 300m、東西 550m の範囲に及び、北側には、園部川を挟んで小河城出城の宮田館が位置している。周辺には、城館に関する地名「要害山」、「東堀」、「本堀」、「元堀」がある。

園部川右岸の低地には、要害山 1 号墳の墳丘を利用した城郭施設がある。後円部および前方部が曲輪となっており、くびれ部分が虎口状になっている。

後円部西側の周溝を利用した横堀の痕跡が確認できる。その横堀の西側にある「堀ノ内」という小字は、外堀と思われる遺構の存在が想起される。弥陀ノ台遺跡は「東堀」の西側隣接地に位置しており、平成 25 年の発掘調査では、斜面部に箱築研状の堅堀などが検出された。複数の堀により、3 か所の区画が確認できる。また、台地平坦面には方形に廻る土塁の一部が残存している。周辺にある小字や弥陀ノ台遺跡で検出された堀跡の存在から、要害山 1 号墳にある城郭施設を含めて小井戸要害であると考えられる。

築城者については、不明であるが、当時の勢力範囲からみれば、大掾氏の居城である府中城の東を守る出城の一つである。(本田)



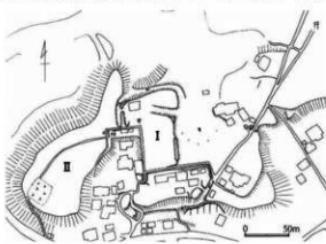
小井戸要害跡縄張図 高橋宏和 2017.1.25

(『続次』より転載)

こうのはまじょうあと
0585 高野浜城跡 石岡市東田中 現況:山林ほか 別称:田中城 東田中遺跡 地図 50

高野浜城は、山王川左岸に所在する標高 24m の台地上に所在する。南および西側は標高 4m の低地、北側は谷津に面している。その規模は南北 190m、東西 310m 以上の範囲に及ぶ。中央の曲輪 I は、昭和 50 年代までは、城郭施設が良好に残存していたが、現在は、方形に廻る堀の一部が頃在化しているのみである。また、曲輪 I の北西端には御城船荷社が鎮座している。南端から斜面部にかけては、宅地造成によって土地の改変が著しい。西側の曲輪 II は、長軸 180m の区画であるが、城郭施設は残存していない。

東側の隣接地に位置する東田中遺跡において実施された平成 25 年度の発掘調査では、本城の所縁のある五輪塔や宝篋印塔の部材 42 個とともに土師質土器小皿も出土している。落城後の 16 世紀末に埋納した遺構であると想定されている。築城者は伊野尾信利、対島守忠信と伝承されており、大掾氏の居城である府中城の南を守る出城の一つである。(本田)



高野浜城跡縄張図 高橋宏和 2014.3.8

三村城は、恋瀬川右岸に所在する標高 24m の台地上に占地している。南北方向の大規模な谷津に東西を挟まれ、台地には小支谷が樹枝状に開析されている。その規模は南北 650m、東西 570m の広範囲に及んでいる。

城郭施設は後世の改変が著しく、全体を窺いることはできないため、周辺に残されている小字や明治 17 年作成の陸軍迅速測図を手掛かりに縄張を復元することにする。字御城 曲輪 I が主郭であると思われるが、三村小学校校庭造成工事により大部分が削平されている。西縁辺に土塁の一部が残存するのみである。迅速測図によると、曲輪 I の南北には堀によって区画される曲輪 II・III(校舎部分)が配置されるようである。校舎建設に伴う調査で確



三村城跡縄張図 高橋宏和 2017.1.15 (『納茨』より転載・一部加筆)

認された幅 6.3m の堀跡からは、土師質土器小皿、古瀬戸平塊、青磁盤(龍泉窯産)などが出土している。曲輪 I の北側には、根古屋および根古屋下、南東側には諸士久保という小字名が残り、家臣団の居住地であると考えられる。字館 曲輪 IV は南北に細長い区画であり、中央に普門院が所在する。字大手・字古道 大手は城郭の北側に所在する。大手から南側に延びる道は曲輪 II と曲輪 IV の間にある切岸の下を通っており、大手道であると想定される。さらに普門院南側の字古道に通じている。字城構内 北側から入り込む小支谷に該当しており、城内の集落が形成されていたとも考えられる。字息栖 本城の西側には曲輪 V が配置されており、平成 18 年の発掘調査では南端部において、東西方向に延びる幅 6m、深さ 3.5m の薙研状を呈する堀跡が確認されており、16 世紀後半に廃絶されている。この堀跡は台地縁辺で北に向きて、土塁を伴って西縁辺に延びている痕跡が確認できる

三村城は、東側の台地上に所在する常春寺の開基である大掾氏の一族、大掾常春の居城とされているが、一次史料はなく、『南城高家錄』という軍記物には、「天正元年(1573)、大掾氏は、江戸・佐竹氏と手を組んだ園部氏と対立を深め、その隙をついて、小田氏治が攻め寄せて、三村城は落城し、常春も戦死した」との記述がある。しかし、この頃、小田氏治は佐竹氏との木田余城や土浦城を巡る攻防戦に苦慮しており、はたして、三村城まで軍を進められたのか疑問も残るところである。なお、常春寺には「萬隆院殿却外常春禪門」の位牌、常春の墓とされる五輪塔などが残されている。本城は城内に家臣団の居住域、集落および寺社などを取り込んだ府中城の南を守る出城の一つである。(本田)

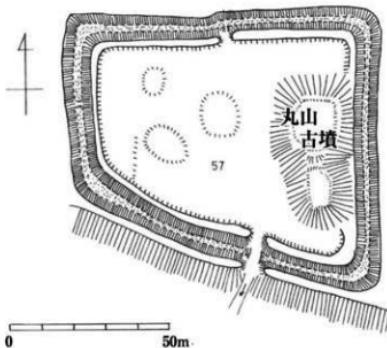
たかともこ る いあと
0589 高友古墳跡 石岡市柿岡 現況：山林 別称：高友城

地図 41

高友古墳跡は、恋瀬川左岸の標高約60mの台地上に位置する。幅5m、深さ4mの箱堀が、南北約50m、東西約100mの範囲を巡り、内部には全長55mの前方後方墳の丸山1号墳がある。この古墳は物見櫓的に使用された可能性がある。

堀の南東部に虎口があり、土壠・堀(土橋)・土塁を経て、内部に進入できる。内部は、比較的平坦な空間が広がり、建物跡の存在が想定される。

館主に関わる資料はなく、唯一「火炙りにされた神官」の伝説がある。高友古墳跡の東側に隣接して佐志能神社があるが、その神官がある時期に高友館の館主であったという。しかし、高友を含む地域の領主が、神官に対し高友館からの立ち退きを命じたが、従わず結局、捉えられ火炙りの刑にされたという話である。(千葉)



高友古墳跡縄張図 青木義一 2010.3.27 (『続茨』より転載)

まるかべ（さっかべ）じょうあと
0592 猿壁城跡 石岡市小山田 現況：山林

地図 41

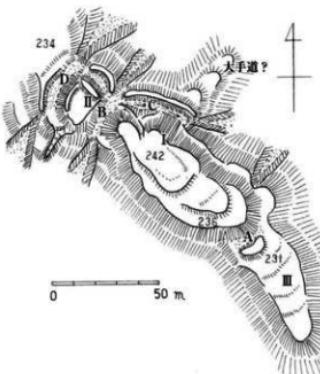
猿壁城は、恋瀬川に注ぐ沖田川の左岸の標高約242mの丘陵に位置する。西側の足尾山を除く三方は、高さ40mほどの絶壁に近い崖となっている。

丘陵の山頂部に平坦面があり、曲輪Iと考えられ、周囲には薬研堀となる二重堀が土塁と共に見られる。約20×60mの曲輪Iは、凹凸が著しく明確ではないが、三段の段差がみられる。

東側は、曲輪Iとの間に小規模な堀切を挟み、やはり尾根を利用した段差がみられる。曲輪Iの西側には、堀を挟み曲輪IIがある。

全体的に、構築が不明瞭な城跡であり、緊急時に詰める籠城的な施設と考えられる。

城主は、上曾氏と考えられているが、歴史的な内容は不明である。(千葉)



猿壁城跡縄張図 青木義一 2015.3.14

かきおかじょうあと
0590 柿岡城跡 石岡市柿岡 現況：山林、宅地、小学校

地図 49

柿岡城は、恋瀬川右岸の標高約25mの台地上に位置する。石岡市立柿岡小学校を中心に、周辺には、土塁や堀で区画された曲輪が残る。曲輪は、稻荷神社周辺が曲輪I、柿岡小学校グランドが曲輪II、小学校南側の畠地が曲輪III、善慶寺周辺が曲輪IVとされる。善慶寺の西側には外堀と想定される堀跡が所在している。一方で、曲輪IIIの南側に東西約20mの横堀が残存するが、以前は東に延びていたという。そして、台地東端に位置し、狼煙台とも想定される諏訪神社まで達していたとされる。全体的には東西約300m、南北約150mに及ぶ城館跡と捉えられる。

『新編常陸国誌』の「柿岡故城」によると「柿岡村館の地にあり、其地連山三方を囲み東方一線平地府中に通ず、址の周囲巨樹茂生す、面積大約三千坪、文永八年八田知家の八子時家始て此に居り小田氏と称する数世之を襲ぐ」とある。また、時家が柿岡を拠点とした際に、柿岡氏を名乗ったともいう。柿岡氏は、永禄中頃までの約400年、柿岡城を拠点としたとみられる。その後、柿岡城は佐竹義重より真壁義幹（氏幹の弟）に預けられ、対小田氏の拠点の一つとなつた。文禄4年（1595）、義幹が上大島城へ移されると、長倉城主であった長倉義興が柿岡へ移ってきた。長倉氏は、柿岡城内に善慶寺と八幡神社を移し菩提寺と氏神としている。しかし、長倉義興は転封の不満から佐竹氏に逆らい続け、毒殺されてしまう。そして、伊達政宗の家臣後、佐竹義宣家臣となった陸奥国宮城郡郡分城主の国分盛重が柿岡城主となるものの、慶長7年（1602）に佐竹氏の出羽転封に伴い出羽に移った。しばらくの間、柿岡地方は九州柳川藩立花氏の領地となるが、元和9年（1623）に稲葉正勝が柿岡藩1万石の藩主となり、柿岡城跡に陣屋が置かれた。寛永5年（1628）には稲葉氏が真岡藩4万石の領主となることで、柿岡藩は消滅し柿岡城跡に設けられた陣屋も廃止となつた。（千葉）



柿岡城跡縄張図 余湖浩一 2004.10 (『改茨』より転載)

片野城は、恋瀬川左岸の標高約30mの台地上に位置する。三方が低地で囲まれた場所で、石岡市指定文化財の範囲は約3haに及ぶ。この範囲内に12の曲輪が設けられ、水堀、箱堀、薬研堀が複雑に巡っている。

ほぼ中心部の小字「城ノ内」に曲輪Ⅰがあり、周囲を高さ2~3mの土塁及び深さ約5m、幅約10mの堀が巡る。曲輪Ⅰの南側に曲輪Ⅱがあり、土橋で連結している。七代天神社が鎮座する場所が、曲輪Ⅲとなり東西に広がりをみせる空間となる。曲輪Ⅲの南東部にあるのが、曲輪Ⅳである。ここは、内折形と考えられ、連郭式となる曲輪Ⅰ~Ⅲへ進入を防ぐための防御性を高めている。太田資正墓所がある場所が曲輪Ⅴとなる。片野城の曲輪の中で最も広い空間となるが、周囲は堀切・堅堀・横堀などの空堀や2mほどの土塁が巡り防御性を高めている。一方で、曲輪Ⅰの東側や北側には幅広の水堀が存在し、曲輪VI~IXが構築されている。北端部には馬出が設けられている。

片野城の歴史は、文永年間（1264-75）に小田氏一族の八田将監（一説には八代将監）が小田城の北面の砦として築いたと伝えられている。一方で、南北朝時代に片野彦三郎なる人物が城主となって、当地域の南北朝合戦に参加したとされる伝承があるが、明確ではない。江戸時代後期の農政学者である長島尉信の「小田事蹟」には、永禄年間のものと推定される家臣団の一覧「小田家ノ幕下ノ事」が収録されており、「片野 加太野伊豆 太田三楽斎カ為ニ片野ヲ追退ラル」の記載がある。この史料によると片野城は、永禄7年（1564）の佐竹氏と組んだ上杉謙信による小田城攻撃によって、片野城を含む北郡が佐竹氏の領地となったと考えられる。

永禄9年（1566）頃には、佐竹義重の客将となつた武藏国旧岩槻城主の太田資正へ片野城が与えられたという。永禄12年（1569）には手葉井山合戦があり、小田氏治が片野城攻撃のため出撃、迎え撃つ太田資正是、真壁氏幹や多賀谷重経の援軍を受け、これを打ち破った。太田資正是、天正19年（1591）に片野城で70歳の生涯を閉じた。その後、佐竹氏家臣である石塚城から来た石塚義辰が片野城主となり、城に隣接して菩提寺の曹洞宗寺院泰寧寺、祈祷寺の淨瑠璃光寺、七代天神社を移した。しかし、佐竹氏の国替えに石塚氏も従い、慶長7年（1602）に秋田に移る。慶長8年（1603）には、瀧川豊利が片野城に入り、片野藩が成立した。片野城は陣屋となり、二代正利が引き継ぐものの正利が病弱の上、子に恵まれなかつたことから片野藩は消滅、片野陣屋は廃止されていった。（千葉）



片野城跡縄張図 本間朋樹 2005.9.1

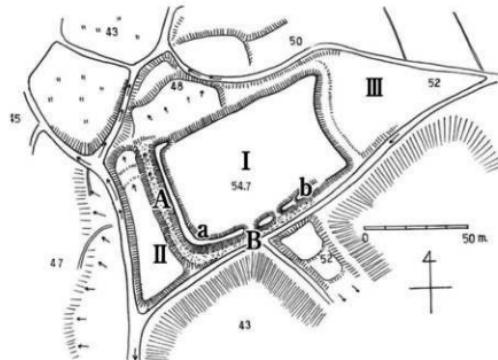
すわやまとりあと
0593 諏訪山砦跡 石岡市吉生 現況：山林

地図 49

諏訪山砦跡は、川又川の支流の小倉川左岸の標高約 50m の丘陵に位置する。

南北約 40m × 東西約 80m の曲輪 I があり、堀 A（幅約 7m、深さ約 4m）の西側に、曲輪 II がある。曲輪 I の南側には虎口を構成すると考えられる土塁 b が存在する。曲輪 I の東側の平坦部は、曲輪 III と考えられる。

諏訪山城は、小幡氏の本城とされる堀ノ内館の北西部に位置し、出城と考えられる。湯袋峠に面する場所に築造された諏訪山砦跡は、真壁式に対する防備と考えられるが、防御性はさほど高いものではないため、一時的な砦と想定される。（千葉）



諏訪山砦跡縄張図 青木義一 2010.3 (『続実』より転載)

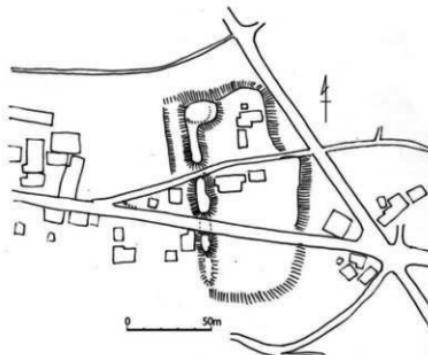
おばたほりのうちやかたあと
0594 小幡堀ノ内館跡 石岡市小幡 現況：畑、宅地

地図 49

小幡堀ノ内館は、川又川右岸の標高約 30m の台地上に位置する。

現在は、下宿公民館付近にのみ土塁や堀跡が見られるが、小字名「堀ノ内」が示すように小幡集落一帯が館跡と考えられ東西 500m もある壮大な規模をもっていたと考えられる。周辺には、支城とされる吉生砦、諏訪山砦、須金館、数俵城などがある。

小田氏 2 代知重の三男光重が、小幡を拠点とし、小幡氏を興したという。一方で、大掾詮幹の三男義幹が応永 24 年 (1417) に小幡城を築城し、小幡氏を名乗ったことに始まるという説もある。（千葉）



小幡堀ノ内館跡縄張図 青木義一 2010.4.3

よしとうとりであと
0595 吉生砦跡 石岡市吉生 現況：小学校 別称：吉生城、古久保砦

地図 49

吉生砦跡は、南に川又川、北に小倉川に挟まれた標高約48mの台地上に位置する。

現在、石岡市立吉生小学校の敷地となり、学校敷地の南東部の15aほどの平坦部に2つの曲輪が、幅約10m、深さ約5mの箱堀で囲まれている。

曲輪Iの西側には、1.5mほど段差を経て、東西約60m、南北約20mを測る、曲輪IIがある。曲輪IIの南側は、約30mの高低差があり、防護性を高めている。

吉生砦の東側には瀬戸井街道が通り、南に向れば小幡氏の堀ノ内館に至る。吉生砦は、堀ノ内館の北を防護する出城と考えられる。(千葉)



吉生砦跡縄張図 余湖浩一 2014.12 (『続茨』より転載)

じょうやまやかたあと
0598 二条山館跡 石岡市宇治会 現況：山林 別称：宇治会館

地図 41

二条山館跡は、恋瀬川左岸の標高約50mの台地上に位置する。この台地は、「毛無山」や「二条山」と呼ばれ、約60m×約50mの平坦部が曲輪Iとなる。曲輪Iの北側には、3重堀がみられ、内側の堀は深さ約1~2mであるが、最も外側の堀は、深さ約3mを測る。曲輪Iには、虎口f・g・hの3か所がある。虎口fは、土橋を経て、曲輪IIに至る。曲輪IIは馬出で、内升形虎口dを付属させている。また、曲輪IIには、東西及び南側に堅堀があり、横移動を阻止している。曲輪Iの北側には、堀Dで囲まれる整地されていない曲輪IIIがある。

『八郷町誌』には、根拠となる史料が不明であるが、二条山館は路川氏が館主とされている。路川氏は、佐竹氏に追われ隠退したとされるが、これが史実であるとするならば、佐竹氏の南進が強くなる永禄12年(1569)以降の廢城と推測される。(千葉)



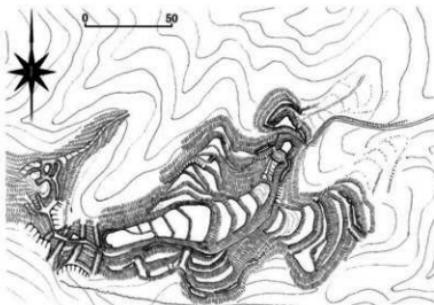
二条山館跡縄張図 岡田武志 2015.1.18 (『続茨』より転載)

ながみねとりであと
0601 長峰砦跡 石岡市小幡 現況：山林、畑 別称：手葉井山砦、二つ館 地図 49

長峰砦跡は、川又川に合流する長峰川を望む標高約 232m の丘陵に位置する。

丘陵の尾根沿いに堀と土塁で区切られた複数の曲輪が形成される。砦跡の東端部には、横堀があり、深さ約 2~5m、幅約 3~7m を測る。横堀の北側は、虎口状となり、砦内部は尾根を利用した段々の曲輪が幾重にも連なる。最も広い曲輪が頂部付近の曲輪 I で約 15m × 60m を測る。曲輪 I から 2 本の堅堀を通過すると高まりがあり、物見台とされる。

長峰砦跡は、つくば方面と小幡地区をつなぐ尾根道沿いにある。別称「手葉井山砦」とも呼ばれるところから永禄 12 年（1569）の手葉井山合戦との関係が指摘されている。長峰砦跡から西側の山を越えると小田氏本城の小田城となるため、小田城を東からの侵攻を防御する施設として、長峰砦跡は小幡氏の重要な砦であったと思われる。（千葉）



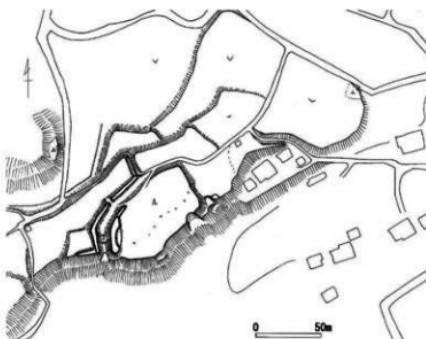
長峰砦跡縄張図 余湖浩一 2014.12 (『続茨』より転載)

あおやなぎようがいあと
0602 青柳要害跡 石岡市上青柳 現況：山林、畑 別称：青柳城 地図 49

青柳要害跡は、上青柳集落の中心部に位置し、字名「勇害」は要害の訛りと考えられる。

現在は、ほとんど遺構が確認できないが、以前は、堀や段差がある曲輪が存在したという。

立地から、小田氏家臣の小幡氏が整備した城館の一つと考えられる。青柳要害を西に進むと小田城方面となるため、長峰砦跡と共に小田城を守る東の砦と考えられる。（千葉）



青柳要害跡縄張図 高橋宏和 2020.1.5

ねこや（ねごや）やかたあと
0603 根古屋館跡 石岡市小山田 現況：山林、宅地

地図 41

猿壁城東側の山麓に位置し、上曾氏の本城「上曾城」が移されたのが「根古屋館」と考えられている。西から北側にかけて堀を設け、東西約100mの平坦地を造り、曲輪をしている。曲輪の北側には、土塁も見られる。

『小田軍記』にある「鯨岡城、小城なれども背後に大山あり」という記述は、猿壁城と根古屋館との関係、「鯨岡の城へ御移し参らせたまえ」上曾城から根古屋館へ移されたことを記したものと考えられる。

上曾氏は、『新編常陸国誌』「上曾氏」に「八田知重の四子、朝後小田三郎と称す。子朝時左衛門尉たり。上曾氏の祖」とあり、同誌「上曾故城」に「新治郡上曾村猿壁にあり、・・・小田朝後始て此に據る、因て氏とす」とあり、いずれも小田氏の一族として上曾氏が誕生したことを記すが、裏付ける資料はない。(千葉)



根古屋館跡縄張図 岡田武志 2022.3.4

おおますじょうあと
0606 大増城跡 石岡市大増 現況：山林、畑、墓地 別称：八幡平城跡

地図 41

大増城跡は、恋瀬川上流右岸の標高約100mの丘陵に位置する。通称「馬場道」を八幡神社へ向かうと段差をもつ地形が連続している。

曲輪Iは、面積約50aを測り、南西部に2mほどの段差を経て、一段高い土壇を形成している。土壇には、八幡神社が鎮座している。曲輪Iには、虎口がa、b、cの3か所あり、cは内折形虎口で土橋につながっている。堀Gは、途切れるが、本来はdまで続き、北側の防御を高めていたものと思われる。堀Gの南東部には曲輪IIがある。

大増城は、古代から使用されている板敷峠を抜ける街道沿いにある。ここに居城した城主は、小田氏臣の古尾谷氏とされる。古尾谷氏は、埼玉県川越市古谷本郷を発祥とする武将で、文安3年(1446)「白田文書」によると、この頃から大増地域と古尾谷氏が関わるようになったという。大増城跡に隣接して古尾谷忠岐守の祈願寺として開山された顯徳院がある。(千葉)



大増城跡縄張図 岡田武志 2015.1.24 (『統志』より転載)

のだやかたあと
0607 野田館跡 石岡市野田 現況：山林、公民館

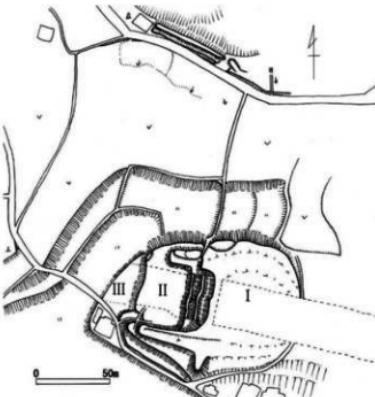
地図 41

野田館は、恋瀬川に合流する稻荷川左岸の標高約 50m の台地上に位置する。

下三郷公民館の東側に、堀と土塁が見られるが、全体像は不明となっている。

平成 24 年（2013）、野田館跡の南側の標高約 44m の台地上に中世の城館に伴うと考えられる土塁や堀と共に整地面が確認された。台地頂部が曲輪 I とされるが、削平化は緩やかであり、築城完成には至っていないようと思われる。曲輪 I の西側には、堀と土塁の比高差 2.5m を測る堀切を経て曲輪 II があり、さらに平坦面を経て西側に曲輪 III となる。

野田館の館主は、小松氏とされ、四代小松信光の時に小田・佐竹の合戦に参加したが、九代小松盛光の時に、館を瓦谷に移したことで野田館は廃止されたと伝えられる。（千葉）



野田館跡縄張図 高橋宏和 2013.4

かたおかやかたあと
0609 片岡館跡 石岡市片岡 現況：山林 別称：片岡城

地図 49

片岡館跡は、恋瀬川に合流する支流左岸の標高約 30m の台地上に位置する。

低地に突き出す台地上に位置し、周囲を土塁で囲む。a の土塁は、高さ約 3m を測る。A と B の堀は、幅約 10m、深さ約 6m となり、急こう配の堀底から土塁を見ると高低差を感じられる。北側は、帯曲輪を設けている。低地を望む南側以外は、堀も設け、防御性を高めている。C は、堀切を利用した道となっている。

『八郷町誌』では、館主を八代将監としているが、資料的なものは残されていない。（千葉）



片岡館跡縄張図 青木義一 2010.3.27 (『続茨』より転載)

やまときみるだてあと
0615 山崎古館跡 石岡市山崎 現況：山林

地図 50

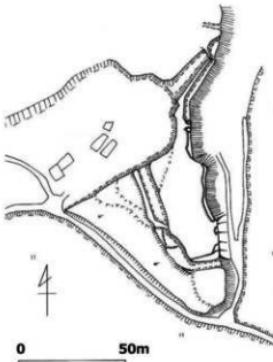
山崎古館は、東西には谷津を望み、南側が園部川の支流となる台地上に位置する。

遺構は、約 50m × 約 15m の曲輪があり、西側以外は、高さ最大で約 1m の土塁が取り囲む。

また、東側を除き幅約 3m の堀が巡っている。

館主については、資料も伝承もなく不明である。

小田氏が、勢力を小川城まで伸ばすルートとして八郷盆地から羽鳥館を通り小川城に至るルートが指摘されているが、山崎古館から北東の小規模な居館が想定された山崎塩海道遺跡と共にルート上の中継地となる城館であった可能性がある。(千葉)



山崎古館跡縄張図 高橋宏和

なるいやかたあと
0616 成井館跡 石岡市東成井 現況：畠

地図 42

成井館は、南側に園部川を望む台上地上に位置する。民家敷地となる主郭と思われる場所は、高さ最大約 2.5m の土塁が残る。主郭の周囲は、高さ約 3m の切岸となり、その周囲を幅約 7~10m の帯曲輪が巡っている。

館主については、資料も伝承もなく不明である。

成井館跡の西側には東成井山ノ神遺跡があり、方形堅穴状遺構、溝跡などが確認され、仏像や仏具の鋳型が出土している。当地域の人物とされる鋳物師の沙弥善性との関係が指摘されている。(千葉)



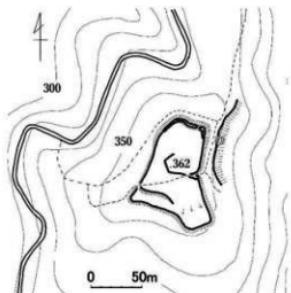
成井館跡縄張図 高橋宏和

あともじょうあと
0617 厚茂城跡 石岡市瓦谷と真家の境界付近 現況：山林

地図 41

厚茂城跡は、難台山から南へ向かう尾根道が東へ向きを変える頂き(南山展望台)から、約550m南側へ突き出した尾根の先端部に位置し、標高362mの三角点がある。尾根に沿って2本の道が通り、東側の道は約400mの直線道になっている。

形態は小型単郭で、曲輪の北側辺縁に沿って折れのある土塁と虎口が認められる。一方で、その他の方向は斜面に囲まれているためか、防御性はあまり厳しくない。



厚茂城跡縄張図 西山洋 2021.4.12

「難台山城の峰続きに馬乗馬場があった」という記述の場所を、これまでには厚茂砦跡と比定してきた(八郷町教育委員会生涯学習課2000)が、むしろ本城であったと解釈したい。同書では、厚茂砦の領主は難台山合戦の小田五郎か、泉城合戦の宍戸持里いすれかとしながらも、後者の泉城の食糧輸送基地として築いた皆説がより有力だとしている。この内容もそのまま本城の参考としたい。(西山)



厚茂城跡周辺図

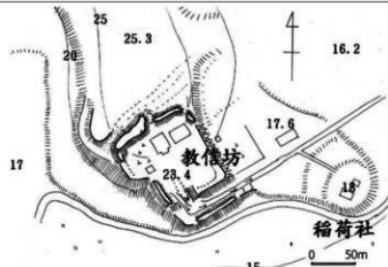
りゅうがいじょうあと
0618 立開城跡 小美玉市上吉影 現況：山林、畠地、寺社境内

地図 51

立開城は、巴川中流域の右岸に所在する標高23mの台地上および巴川が開析した谷津に面する低台地上に位置する。

突出する台地の南端に築城された単郭式の方形居館である。その規模は、東西90m、南北90mの範囲に及んでいる。北側には高さ2mほどの土塁が残存している。なお、現在、曲輪部分は教信寺の境内地となっており、後世の改変も著しい。土塁の外側には堀があり、北東側にて土塁が途切れており、虎口であった可能性がある。

本城の南東650mに所在する馬場坪遺跡では、L字状の堀跡が確認されている。また、近在する上吉影貴船神社には、立開城主である井坂修理が大旦那として奉納した大永6年(1526)の棟札がある。16世紀前半期、井坂修理は、江戸・園部氏の配下であったとされるが、天正年間には、井坂氏は芹沢氏に属し、佐竹氏によって滅亡されたとされる。(本田)



立開城跡縄張図 青木義一 2020.3.24

おがわじょうあと
0620 小河城跡 小美玉市小川 現況：宅地、公共施設地

別称：園部城、蘭部城、照明城

地図 50

小河城は、園部川左岸に所在する標高20mの台地上に占地し、東西を園部川が開析した北西方向の谷津に面している。低地との比高差は14mである。その規模は南北250m、東西300mの範囲に及ぶと想定されるが、これまでに本格的な発掘調査例はなく、元和8年(1622)に廃城となった後には、水戸藩御殿、運送方役所および小川稽医館などに利用されてきたことから、城郭施設については大部分が破壊されている。特に城郭の中心である南東側の曲輪Iは、明治6年に小川小学校敷地となり、昭和46年には、校庭拡張工事の際に2mほど削平されたため、その痕跡を見ることはできない。



小河城跡縄張図 余湖浩一 2004.10『改変』に加筆

現況および江戸時代後期の古図を参考にして、戦国時代末～江戸時代初期の縄張りを復元することにする。6つの曲輪、堀および堀切などで構成され、主郭である曲輪Iの外側には堀を経て、曲輪II・IIIが配されている。その外側には現在は道路となった堀切を経て、曲輪IV・Vがある。外周の曲輪VIは堀によって区画されている。城郭の外縁に園部氏の菩提寺である妙喜寺、能持院などの寺院が配されている。城郭の北側が大手、南側が搦手、西側には園部川があり、天然の外堀の役割を果たしており、その内側に城下町(大町・横町・田町)が形成される。周辺には、山野城、井之上城、宮田館、小塙陣屋などの出城がある。

築城者は、12世紀初頭、南郡惣地頭職下河辺政義の子、小河次郎政平とされる。南北朝期、小河益戸氏は鎌倉府と対立して没落した後、小河城には、小田氏の重臣、園部氏が入城するが、不明な点が多い。園部氏に関連する文献資料は、文龜2年(1502)、常陸國總社宮に寄進された三十六歌仙絵馬の裏書、年未詳「園部勝定書状」「鹿鳴神宮文書」がある。天文15年(1546)、園部氏は小田氏と離反して江戸氏に属するようになる(『新編常陸國誌』)。

天正13～14年(1585-86)、天正16年(1588)の2度にわたる府中合戦では、天正13年12月上旬、小河城は、園部川を挟んで対峙する玉里砦を修築した大掾清幹によって攻め込まれている。なお、天正13年12月18日、江戸重通は小河での五上与三左衛門尉の戦功に対して官途状を与えている(『水府志料』)。天正16年(1588)正月25日の「江戸重通書状」にも小河においても大掾氏との戦闘準備が進んでいることが見える(『秋田藩家蔵文書』)。天正16年(1588)4月25日、大掾氏と江戸・佐竹軍との取手山の戦いを経て、天正18年(1590)、常陸統一を目指した佐竹義宣による仕置きにより、大掾氏は滅亡した。その後、小河城は佐竹氏の急襲を受けて落城したとされている。

佐竹氏の治世では、文禄3年(1594)、茂木治良の居城となり、慶長7年(1602)、佐竹氏の秋田国替え後には、出羽角館より戸沢政盛が入城するが、わずか、4年で常陸松岡城に本拠を移すことになる。(本田)

なかねやまたてあと
0622 中根山館跡 小美玉市中延 現況：山林

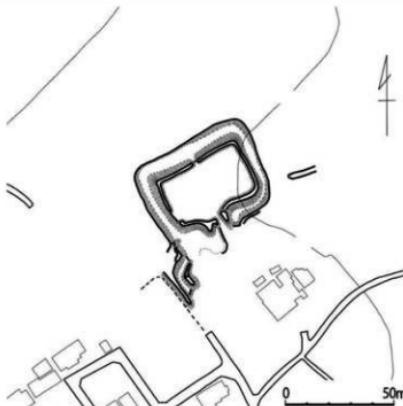
地図 50

中根山館は、園部川が樹枝状に開析した谷津の最深部に所在する標高20～25mの台地上に位置する。

単郭式の方形居館であり、曲輪は南北30m、東西40mの規模に及んでいる。曲輪の南東側の縁および南南西方向40mの地点には土塁が残存している。堀は北西側で途切れているが、曲輪に沿って巡っており、南南東側では土橋状になり、登坂して虎口に至ると思われる。堀の幅は7～9m、堀底から、曲輪との比高差は約3mである。

平成30年に実施された試掘調査において、堀外周部の斜面部には二重の溝が巡り、溝の間にはローム層を削り出した平坦面を造り出していることが確認されている。

館主は、中根太衛門との伝承が残されている。(本田)



中根山館跡縄張図 西山洋 2022.2.1

しもだなてあと
0623 下田館跡 小美玉市中延 現況 山林 別称：樹形山

地図 50

下田館は、鎌田川右岸に所在する標高24mの舌状台地の先端に築城された小規模な方形居館である。北側には鎌田川が開析した小支谷が所在し、低地との比高差は9mである。また、西側の隣接地には、八幡神社が鎮座している。

南北28m、東西32mの長方形を呈しており、幅5m、高さ2mの土塁が方形に廻っているが、堀の痕跡は確認できない。現況で土塁の北東、南東、南西側に切れ目があり、本来は南東側が虎口であると思われる。地元では樹形山と呼称されているが、館主など詳細は不明である。(本田)



下田館跡縄張図 西山洋 2022.2.1

たけはらじょうあと
0629 竹原城跡 小美玉市竹原 現況：山林、畠地ほか 別称：竹原要害、城山 地図50

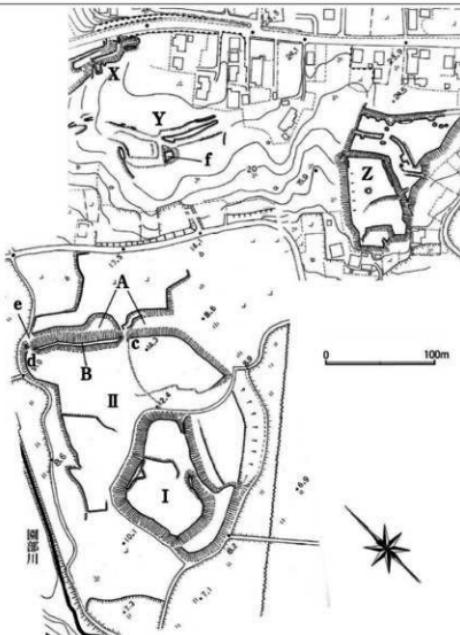
竹原城は、園部川左岸に所在し、南に張り出した標高23mの台地上および7mの低地に立地し、その規模は南北300m、東西300mの範囲に及んでいる。

台地の突端部に主郭(曲輪I)を配置し、北、東および西の三方を曲輪IIで包む梯郭式の城郭である。後背の台地との切り離すため、曲輪IIと台地の接続部分を大規模な堀Aと土塁Bを構築している。また、主郭から約300m北西には、後背の台地から迫る敵を食い止める陣地群とみられる3か所(X、Y、Z)の遺構が残存している。

本城の北1.0kmに弓削砦が所在し、北東1.5kmと2.5kmの地点には、竹原城に続く台地を断ち切るように堀切が構築されている。

『常陸名家譜』によると、竹原城は、永禄2年(1559)、府中城主大掾貞国が江戸氏の南進に備えるための支城として築き、弟の義国を城主に命じたとされている。一方で、『烟田旧記』にある「竹原ゆふかい(要害)せめ子とし」の記載と永正13年(1516)の「足利基頼書状」「真壁文書」との比較から、16世紀の早い段階には築城されていた可能性も指摘されている。(中根 2019)

天正13~14年(1585-86)にかけての府中合戦において竹原城は合戦の舞台となっている。『烟田旧記』には「六日、江戸殿小幡へ御馬出され、七日ニ竹原ノゆけの小屋打落シ、竹衆あまた打死」とあり、(天正14年8月)6日、江戸氏が府中城攻略のために、小幡城に出陣して大掾氏の竹原方と戦ったが、翌7日には弓削砦が攻略されて、竹原方に討ち死にするものが多くてた。その後、江戸氏は滑川砦を攻め、府中城にも侵攻したが、大掾氏は真壁氏の加勢もあり江戸氏を撃破した。天正18年(1590)、大掾氏の本城である府中城は、佐竹氏の総攻撃を受けて落城し、竹原城も一連の戦いで落城したと思われる。(本田)



竹原城跡縄張図 岡田武志 2016.1.11 (『統英』より転載)

みやたかてあと
0625 宮田館跡 小美玉市宮田 現況：山林、畠地、宅地

地図 50

宮田館は、園部川左岸に所在する標高22mの台地上に位置する。その規模は、南北350m、東西280mの範囲に及んでいる。堀跡などは南側に位置する舌状台地「字コヤノ山」に多く残されているが、北側の台地平坦面にも、土壌状の遺構が現存しております。平成25年の試掘調査では薬研状の堀跡が検出されている。また、弘治元年(1555)に創建された鹿島神社や天文12年(1543)の銘がある如来像が安置されてい

る光明院が城内に所在する。谷津を挟んだ南東側の台地上にも階郭式の縄張りをもつ遺構が確認されており、宮田館の出城もしくは、宮田館に対する付城である可能性がある。

「字コヤノ山」の舌状台地の先端部において、平成23年に実施された県道改良工事に伴う発掘調査では第1号曲輪、第1号堀跡(薬研堀)および土壌などが検出され、第1号曲輪には掘立柱建物が配置されている。第1号堀跡は台地の縁辺に沿って北西方向に延びるが、途中で東西方向に曲がり第1号曲輪を区画している。また、住宅の北側にも東西方向の土壌状の遺構が残存している。第1号堀跡は、出土遺物や堀の堆積状況から、16世紀前葉以前に開削され、16世紀前葉～後葉に改修されたことが分かっている。『小川町史上巻』によれば「天正18年(1590)、小川城落城後、幡谷城主の子孫が住み、宮田九郎兵と称した。その後、府中大掾氏系の者が住んだ。」とあるが、詳細は不明である。発掘調査の結果から推察すれば、小河城の落城以前は、園部氏が居城とした小河城の支城として、16世紀前葉までには築城されていたと思われる。(本田)

つるたじょうあと
0630 鶴田城跡 小美玉市鶴田 現況：畠地、宅地

地図 50

鶴田城は、園部川の支流である沢目川右岸に所在する標高28mの台地上に占地しており、東側には沢目川が開析した小支谷がある。二重の土壌と堀が廻る長方形の居館であるとされ、その規模は、南北225m、東西115mの範囲に及んでいる。戦後までは山林であったが、昭和30年代には部分的に開墾されて畠地となり、近年、本館の北側は残土置き場となっている。

周辺には、要害という地名を中心に弾正、古屋敷、陣場などがある。かつて、曲輪内の南西端には、主郭と想定される「天王山」と称される土壌状の遺構、北西端は、「狼火台」とされる円形の土盛遺構があった。方形区画

外の南東側には、「奥ノ院」と称する三方を土壌に囲まれる区画が所在したとされるが、すべて湮滅している。覚書と称する文書『美野里町史上巻』によると、城主は鶴田長門守とされるが、築城時期は不明である。(本田)



宮田館跡縄張図 五十嵐雄大 2017.1.1
(『続茨』より転載・一部加筆)



鶴田城跡縄張図 余湖浩一 2011.8 (『続茨』より転載)

0632 富士館跡 小美玉市竹原中郷 現況：山林、畠地、宅地 別称：富士平館 地図 50

富士館は、園部川左岸に所在する東西方向に延びる舌状台地の先端に築城されている。標高21m、低地との比高差は16mである。方形を呈する単郭構成であり、南北50m、東西50mの規模である曲輪Iは、近年まで畠地として利用されており、改変が大きい。かつては、曲輪の中央に五輪塔および塚が所在していたが、現在は埋没している。曲輪の北縁部にわずかに土壘の痕跡があるが、それ以外は削平されたと思われる。西側の土壘は曲輪に沿って、北東方向に延び、途中でくの字に曲がっており、土壘の南東側は半円形の平場が形成されている。北側の虎口は後世に開口されたものと思われる。

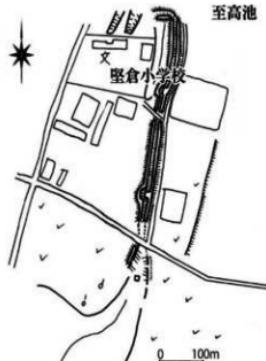
本館の北西約300mには、方形居館である高原城跡が所在しており、現在でも土壘の一部が残存している。その築城者は12世紀初頭の小河城主小河次郎政平の子、景政とされ、高原氏を名乗ったとされる。真偽は不明であるが、富士館は高原氏家臣の居館であると伝わる。(本田)



0634 片倉砦跡 小美玉市堅倉 現況：山林 別称：堅倉砦、片倉長堀 地図 50

片倉砦は、標高27mの台地上に所在する南北方向に構築された長堀である。北側は巴川、南側は園部川の支流、沢目川が開析した谷津の谷頭が所在していることから、この地が選地されたと想定される。現状で、高さ0.6~2mの土壘と深さ0.5mの堀が500mにわたって残存している。2か所に外側に張り出す「物見台」と思われる遺構が付設されている。

天正13年(1585)11月25日の発給と推定される「江戸通長・通澄置署写」には、(鳥羽田文書/『茨城県史料III』3)「其地之用心仕置、片倉之普請彼是ニ[]、」とある。これは、江戸氏が大塚氏への侵攻に備えて、江戸通長らが小幡城を守る大塚弥三郎らに小幡城と片倉砦の普請を命じた内容である。事の発端は、大塚氏と園部氏の領民の境界争いを契機に江戸氏と大塚氏の対立が深まったことにある。江戸氏が片倉砦を普請したことに対し、大塚氏は、小河城の園部氏に対抗するために取手山館(玉里砦)を修築している。なお、府中城への侵攻経路にあたる地点には、大塚氏が開削した堀切があり、本砦からは、南北に2.5kmほど離れている。(本田)



片倉砦跡縄張図 五十嵐雄大 2017.1.10 (『続茨』より転載)

はとりたてあと
0635 羽鳥館跡 小美玉市羽鳥 現況：山林、畠地、宅地

地図 50

羽鳥館は、園部川から 400mほど離れた内陸部に所在する北郭および南郭で構成される複郭式の方形居館である。標高 30mの台地上にあり、JR 常磐線羽鳥駅の南側に位置している。

本館の中央部は、常磐線敷設工事によって南北に貫かれ、昭和 11 年には大部分の堀および土塁は開墾により消失したとされる。昭和 40 年代になると、駅前を中心に市街地化が進んだが、昭和 60 年代までは南郭の堀および土塁の一部が残存していた（『美野里町史巻』）。

主郭である南郭は、南北 130m、東西 115m の長方形であるとされ、南東部には曲輪内を区画する土塁が残存している。北側には一回り小さい北郭が付設されている。北郭の東側において実施された平成 30 年の発掘調査では、南北方向に延びる幅 4.8m、深さ 1.6m の箱築研状を呈する堀跡が確認された。常滑産陶器、古瀬戸などの出土遺物から堀の存続時期は、16 世紀前半頃と思われる。その後の調査で北郭の東西方向の堀跡が確認されたことにより、北郭の規模が東西 70m、南北 80m であることが分かった。

『小田家風記』によると、天文 2 年(1533)と永禄 5 年(1562)にそれぞれ、石岡城主小田藏人正氏広の旗下の一人に「五千貫羽鳥館主羽鳥刑部」および「羽鳥館主所領五千貫、小田一門之将、石岡城役番頭小田刑部治直、通称羽鳥と号す…」とあることから、羽鳥館主は小田刑部治直と考えられる。（本田）

たかさきじょうあと
0636 高崎城跡 小美玉市高崎 現況：山林、畠地、宅地、公共施設地

別称：館山館、岡の内館、三河城、波塚館

地図 58

高崎城は、霞ヶ浦を臨む標高 24m の台地上に所在し、東西 350m、南北 300m の範囲に及んでいるが、現小美玉市生涯学習センター建設工事による改変が著しい。また、南西端には館山稻荷神社が鎮座している。

本城の中央部には、南北方向に展開する谷津によって分断されており、現在は道路となっているが、堀切である可能性がある。その堀切の西側が主郭であると想定され、西縁部に土塁が残存している。城域の北側には、斜面部を削り出した平場状の遺構や中世に形成されたヤマトシジミの貝塚も所在する。また、東側の曲輪には権現平古墳群が分布するが、南縁部にも土塁が現存している。

応安元年(1368)、大掾高幹の一族である鶴町三河守平照光が築城したとされ、平成 3 ~ 4 年の主郭部分の発掘調査では、16 世紀後半に廃絶された 3 条の方形に廻る堀跡および井戸跡などが確認されており、本城は大掾氏が滅亡の過程で落城したものと思われる。（本田）



0639 とりでやまたであと 小美玉市田木谷 現況：山林、水田、畠地、宅地、雑種地
別称：玉里砦、タマリ取出、玉里新城

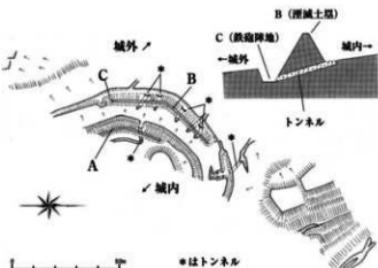
地図 50

取手山館は、園部川右岸に所在する標高10~20mの独立した台地上および斜面部に占地している。その規模は南北330m、東西450mの範囲に及び、その形状は山の字を呈している。後世の改変が大きく、土塁や堀などは現認できないが、主郭は、稻荷神社が鎮座する山の字状台地の東側であると想定される。その北西側には、平成24年に発掘調査が実施された1号郭、2号郭がある。

天文年間、大掾氏が小田氏の重臣の園部氏との抗争に備え、取手山館(玉里砦)を築城したとされるが、天文15年(1546)、園部氏は江戸氏に従属するようになった(『新編常陸国誌』)。天正13~14年(1585-86)にかけての大掾氏と江戸氏との間での争いである府中合戦でも玉里砦を修築して園部氏に対抗したとされる。天正13年12月上旬、大掾清幹は玉里砦に兵を送り、小河城を攻めたとされている(『水府志料』)。天正16年(1588)正月、大掾氏と江戸氏との和睦が破られたことにより、玉里砦は再修築される。3月1日、佐竹氏の加勢を得た江戸重通は玉里砦を取り囲み、玉里の郷村に火を放ったという。3月3日の「江戸重通書状写」によれば、「今般義重父子出陣、一昨朔月初に越される所、玉里新城と号する近き陣に及んで、郷村残すとこなく打ち散らし、府中宿町ばかりに押し詰められ候、玉城際へ今日なほなほ詰め寄せ、其口に陣を張り」とある(『佐竹文書』)。その際、佐竹軍は鉄砲衆、弓数百張で加勢した。4月25日には、江戸・佐竹軍の急襲を受け、玉里砦付近にて、戦死者200人を越す激戦の末、玉里砦は落城した。この合戦は取手山の戦いと称され、水戸市和光院過去帳には「天正十六年戊子四月廿五日 府中田マリ取出落城 二百余死打」である。

平成24年の発掘調査では、堀跡6条、曲輪2か所、通路跡8か所などが確認されている。1号郭を囲む2条の堀は、築城時においては、堀底の幅が狭い薬研堀として開削されたが、部分的に壁面を削った土砂で底部を埋めて箱堀状に改修している。埋め戻された部分には、堀に直交するように城内に至る通路が構築されている。この通路は、半地下の堑壕状で、土塁の下をくぐり、堀を横断するためのものと思われる。このような施設は、取手山の戦いで敵方に包囲される中、虎口に面する部分が侵攻を受けることから、城内外に兵を迅速に展開できる通路を廻らし、鉄砲や弓矢で応戦するために改修されたものと思われる。

堀跡などの遺構の切り合い関係や出土遺物から、文献等のとおり、天正年間に2回の改修をしている状況が確認された。堀跡などから大量の鉄砲玉が出土しており、激しい戦いの一端が明らかになっている。また、堀跡は人為的に埋め戻されていることからも、大掾氏滅亡後、玉里砦は、佐竹氏の手によって破城となったと思われる。(本田)



取手山館跡縄墨図(復元) 岡田武志(『続茨』より転載)

いいつかたてあと
0637 飯塚館跡 小美玉市上玉里 現況：山林、畠地、宅地、雑種地

地図 50

飯塚館は、園部川が開削した谷津から分岐する小支谷に挟まれた標高 24m の台地先端部と南東側の斜面を利用して築城されている。その規模は南北 180m 、東西 300m の範囲に及んでいる。

山上に構築された狭長な曲輪 I は、二重の土堀と堀に囲まれており、一段下には土堀と堀で区画された曲輪 II がある。この曲輪の整形が不十分であり、複数の建物を配置することができない構造であることから、主郭については標高約 13m に整地した曲輪 III であるとの指摘もある（茨城城郭研究会編 2017）。なお、曲輪 III における平成 19 年の発掘調査では 16 世紀頃の整地面が確認されている。

館主の飯塚氏は、常陸大掾平国香の四子兼任の曾孫忠恵の子孫であると伝承されている（『玉里地誌取調書』）。築城は平安時代末とされるが、現存している土堀などの城郭施設は、改修された天正期の遺構であると考えられる。本館は大掾氏の支城であったが、天正 16 年（1588）の取手山の戦いで落城したものと思われる。（本田）



飯塚館跡縄張図 余湖浩一 2004.9 (『改茨』より転載)

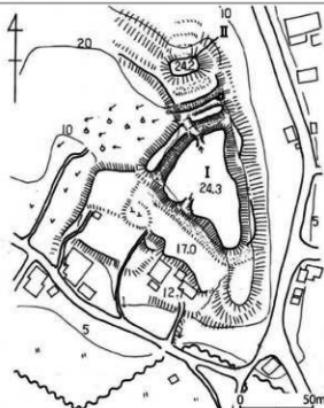
ようがいたてあと
0640 要害館跡 小美玉市下玉里 現況：山林、畠地、雑種地 別称：龍崖

地図 58

要害館は、園部川に面する標高 24m の南北方向に延びる舌状台地に所在しており、その規模は南北 170m 、東西 75m の範囲に及んでいる。

台地を東西方向に南から長さ 70m の土堀および堀切で分断することによって、2 つの曲輪で構成されている。主郭である南側の曲輪 I の規模は、長さ 80m 、幅 50m である。北側に虎口が開口されており、北側の曲輪 II に通じる。曲輪 II は、南北 10m 、東西 20m の規模であり、馬場との伝承もあるが、物見曲輪の可能性もある。

大掾氏の支城の一つであり、館主は久保田平内と伝えられ、天正 16 年（1588）の取手山の戦いの中で落城したとされる。（本田）



要害館跡縄張図 青木義一 2020.3.24

じょうのうちたてあと
0641 城之内館跡 小美玉市川中子 現況：山林、水田、畑地、宅地、雑種地 地図 58

城之内館は、園部川右岸の河口付近に形成された標高約2mの自然堤防上に所在する。堀と土塁で囲まれた方形居館であるが、現状は北側にその痕跡が見られるのみである。その規模は、南北200m、東西170mの範圍に及んでいる。なお、本館の北側に所在する妙見山古墳の北側隣接地には「三本鍬」状の溝が確認できる。

令和2年の発掘調査では、曲輪内を区画する東西方向に延びる幅約2mの堀跡が確認され、堀底から古瀬戸灰釉筒形香炉が出土している。この香炉の生産年代は15世紀中頃であるが、漆で難いで修復されており、堀が廃絶されるまで伝世したと思われる。

本館の南側は、霞ヶ浦の大きな入り江が形成されており、大枝の津が所在していた。この地は大様氏が支配する水上交通の拠点の一つであることから、本館は水辺の守りを担ったと考えられる。館主は不明であるが、天正16年(1588)の取手山の戦いの中で落城したとされる。(本田)



城之内館跡縄張図 西山洋 2021.7.19

はらやまたてあと
0642 原山館跡 小美玉市上玉里 現況：山林、水田、畑地、宅地、雑種地 地図 50

原山館は、園部川により樹枝状に開析された標高24mの台地上に所在しており、北側には円妙寺から府中に至る中世の街道、円妙寺街道が通っており、その街道沿いには十三塚(上玉里塚群)が所在している。

現況は宅地や畑地として利用されているため、残存する遺構は部分的である。東西を小支谷に挟まれた曲輪Iの規模は、南北70m、東西50mであり、北側に長さ35m程の土塁が残存している。北西側に開口している部分が虎口であると思われる。また、西側の小支谷の谷頭にコの字状を呈する土塁状の遺構が残存している。

大様氏の家臣である原美濃守の居館であるとされるが、天正16年(1588)の取手山の戦いの中で近隣の飯塚館とともに落城したとされる。(本田)



原山館跡縄張図 西山洋 2021.7.19

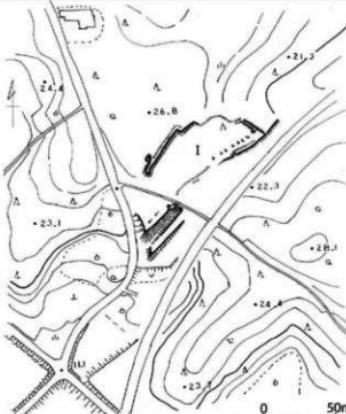
かきこつたてあと
0643 笠松館跡 小美玉市栗又四ヶ 現況：山林、雜種地 別称：四箇村館 地図 50

笠松館は、園部川が開析した大規模な谷津に面する標高 20～25m の台地上および傾斜地に所在する。本館の南東約 350m に位置する殿塚館と併せて四箇村館とも呼称される。

現存する城郭施設は、南斜面を整形して構築された幅 40m、長さ 75m の曲輪 I、小支谷の谷頭に所在する長さ 30m、幅 10m の堅堀がある。

笠松館の館主は不明であるが、近在する殿塚館主は、府中城主大掾清幹の近親、竹原兼信の家臣である栗又左近政清と伝承される。天正 18 年(1590)の佐竹氏による大掾氏への仕置きで殿塚館とともに落城したとされる。

(本田)



笠松館跡縄張図 岡田武志 2022.2.28

いっぽいたてあと
0652 一杯館跡 小美玉市中延 現況：山林、墓地 地図 50

一杯館は、園部川に突出する標高 20m の舌状台地に所在し、低地との比高差は 13m である。

周辺に所在する中根館および中根山館との関連性が指摘できる。幅の狭い台地を東西方向の堀切で分断することによって、3つの曲輪で構成されている。中央の曲輪 I が主郭であり、長さ 100m、幅 25m と狭長である。南西側の縁部には土塁が残存するが、その他には土壘状のわずかな高まりがある。主郭と北側の曲輪 III の間の堀切は幅 8m、深さ 1.5～3 m の規模であり、堀切の脇には二段の腰曲輪が存在する。また、主郭の南側に所在する曲輪 II は、物見曲輪であると思われる。

小字にて「一パイ館」の地名が残るが、城主等は不明である。(本田)



一杯館跡縄張図 斎藤徳之 2020.8.1

しきくらじょうあと
0653 宍倉城跡 かすみがうら市宍倉字本丸 現況：山林、水田、畠、宅地 地図 58

宍倉城跡は、菱木川とその支流に挟まれた東西にのびる標高約25mの台地上に位置する。

字本丸の曲輪Iは、約50m×約100mの区画で、周囲には土塁との比高差5mほどになる幅2mの堀が巡る。西側の一角には、約20m×約50mの曲輪IIがある。

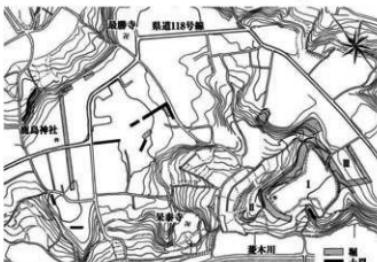
この曲輪IIの西側には字「カラメ」、その西側には「大手」がある。この地名の間の区域には、堀と土塁が一部残存するところがあり、本来はここが主郭となる可能性が高い。

平成19年(2007)には、城跡北部にある鹿島神社の北側の土塁周辺の発掘調査が行われ、当初ここに存在した薬研堀を埋め、新たに箱堀が掘りなおされた事実が判明した。また、薬研堀の堀底からは廃棄された石塔部材が発見され、この土塁と堀に面した曲輪にあった石塔が、破城の作法として廃棄されたものと考えられるものである。

宍倉城は、伝承によれば、永享年間(1429-41)頃に、野口遠江守が居城し始め、後に菅谷氏が城主となり、文亀年間(1501-04)には菅谷隱岐守貞次が城主であったという。永禄7年(1564)に作成された『小田氏治味方地利覧書』に「しきくら　すけのやむまとてう」とみられ、高野山清淨心院所蔵『常陸日月牌過去帳』の永禄11年(1568)にも「菅谷右馬丞」が記載されることから、この時期の城主と考えられる。その後、天正元年(1573)の『畠田旧記』には、「元亀四突トリ七大十　義重様御出陣故　同廿五しきくらへ押詰　八木せうにんとられ御同心」とあることから、佐竹義重の軍門に下ったと思われる。この時の落城の作法が前述の石塔廃棄とも考えられる。

文禄4年(1596)の『中務大輔當知行目録写』(佐竹義秀文書)には、志々倉・おかみ・大わた・かしは崎・あんぢき・いわつほ・さか・田ふせなどが佐竹一族の東義久の知行地となつた。この頃、宍倉城は佐竹家臣の大山田刑部が城主となったとされ、『常陸日月牌過去帳』にも大山田家が宍倉から供養を依頼している記録がある。

城内からは、16世紀と考えられる景德鎮の染付や瀬戸焼が確認される一方で、鉄絵志野や初期伊万里など17世紀前半の陶磁器が出土しており、慶長7年(1602)の佐竹氏の出羽秋田への国替えで宍倉城は廢城となつたと考えられるが、その後も陣屋等で利用された可能性も考えられる。(千葉)



宍倉城跡広域図



宍倉城跡縄張図 岡田武志 2006.2.3 (『改茨』より転載)

かみかるべやかたあと
0656 上軽部館跡 かすみがうら市上軽部 現況：山林、畠地

地図 58

上軽部館跡は、菱木川右岸の標高約 22m の台地上に位置し、2つの区域で構成されている

字「コブ屋敷」と称する菱木川を望む台地北端部には、平場があり、この平場から東側、最大 2m 下に腰曲輪が巡っている。

この「コブ屋敷」から南の所には別称「輕部前館跡」があり、道沿いに高さ約 2m、幅約 3m の土塁が約 20m、間を置いてほぼ同幅の土塁が約 70m みられている。

上軽部館跡は、北側の菱木川を挟み、宍倉城と対峙する位置にあり、関係がうかがわれる。(千葉)



上軽部館跡縄張図 高橋宏和

おおわだじょうあと
0658 大和田城跡 かすみがうら市大和田 現況：山林、畠地、宅地

地図 58

大和田城は、一の瀬川左岸の標高約 25m の台地上に位置する。旧霞ヶ浦町役場の敷地に、台地先端を区切る堀切があり、東西に曲輪を分けている。西側の曲輪は、北側に段差を設け、南側には腰曲輪を造る。これらの曲輪の北側には、深さ 5m に及ぶ堀と土塁が台地の地形に沿ってみられている。

さらに西側に広がる短冊形地割をよくとどめる大和田集落は、城館に伴う宿空間に由来するものと考えられる。集落の南側にも土塁や堀が明瞭に残されており、集落を含む一帯が城館と考えられる。

『中務大輔当知行目録写』には、「大わた」とみられることから、16世紀末には佐竹氏の支配になったと考えられる。それまでは、やはり、周辺地域と同様に小田氏と関連した領主の存在が想定される。昭和 31 年（1956）の出島村役場新築工事の際には、「抜穴」とみられる横穴が発見されたというが詳細は不明である。また、大和田城の東北に位置する和田台遺跡からは、12世紀から 16世紀にかけての陶磁器が採集されており、大和田城との関係が注目されている。（千葉）



大和田城跡縄張図 西山洋 2022.3.1

たぶせじょうあと
0659 田伏城跡 かすみがうら市田伏 現況：山林、畠地、墓地

地図 58

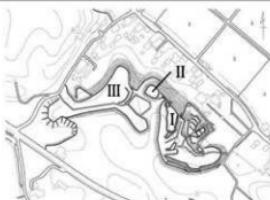
田伏城跡は、北側に霞ヶ浦を望む標高約25mの台地上に位置する。城跡に隣接して曹洞宗寺院の實傳寺があり、田伏城主の菩提寺とされている。

實傳寺の南側斜面部に段々に設けられた墓地を登っていくと頂部に、2つの曲輪が残されている。長軸約40mの曲輪Iと、堀切が想定される間を介して物見的な曲輪IIがある。ここから北東部に向けて道があり、堅堀と土橋に至る。土橋を渡ると比較的広い曲輪IIIとなる。

田伏氏は、『水戸領地理志』によると「新治郡田伏村ニアリ、館主ハ藤原姓ニテ、小田天庵家臣ト云、田伏柏崎藤原白鳥玉取三ツ木六村ヲ領セリト云」とみえ、小田氏家臣であったとされる。

また同記録によれば境内に「実傳道參大居士 應永三年丙子二月十五日」銘の古碑があったとされるが、現存していない。しかしながら、以前所在した可能性から、実傳道參大居士（田伏氏初代の次郎太夫治定の没後の法名とされる）が、1396年に供養された石碑と考えられる。

その他、『土浦城記』に、小田政治家臣の「田伏周防守 田伏城主」、『永慶群記』によれば永禄12年（1569）にあった手這坂の戦いで討死した武将の中に田臥（田伏）兵庫、『小田天庵記密書』には藤沢合戦に田伏大和、同小伝次、『小田屋形家風記』には田伏次郎大夫、同主殿とみえ、各種軍記物には数多く田伏氏の名が登場する。一方では、天正元年（1573）の君島川の合戦では、一番槍の功名を立てたことで田伏氏の名声は高まったという。（千葉）



田伏城跡縄張図 西山洋 2021.1.31

さかよいいやまやかあと
0660 坂寄居山館跡 かすみがうら市坂 現況：山林、墓地

地図 65

坂寄居山館跡は、北側に霞ヶ浦から入り込む谷津を望む標高約25mの台地上に位置する。

坂東方面の山中に所在する坂寄居山館は、明瞭な堀や土塁を残している。

台地頂部には、長軸約60mの長方形状の曲輪Iがあり、約2m下に曲輪Iを巡る幅約3mの腰曲輪がある。腰曲輪は、北側のみが2段となる。台地基部の南側にも腰曲輪がみられるが、横堀状とも言え、明確な構造は判断し難い。

坂寄居山館跡の館主は、『出島村史』によると、小田治久の家臣佐賀美濃守とされるが、否定的な論もあり定かではない。

霞ヶ浦から少し奥まった谷津に面する位置に設けられ、北に田伏城、南に要害館という同規模の城館があることから、穴倉城を守る連携した出城という印象がある。霞ヶ浦から上陸する水上行軍する兵を防御する効果がうかがい知れる。（千葉）



坂寄居山館跡縄張図 西山洋 2021.4.26

0667 平後館跡 かすみがうら市加茂 現況：山林

地図 58

平後館跡は、川尻川左岸の標高約 25m の台地上に位置する。内加茂集落の北西に南北方向の道路に沿い、土塁が存在する。

平成 23 年（2011）には、小面積ではあるが、堀と土塁が調査され、幅約 4.2m、深さ約 2.8m の薦研堀と上端部最大幅約 1.8m、下端部幅 7.2m、高さ約 1 m の土塁が確認されている。

付近には、「木戸口」や「木戸台」の小字名が残り、この地区が城館跡である可能性を高めている。

永享 7 年（1435）の『常陸国富裕仁等注文』には賀茂郷に富裕として「總四郎」なる人物名がみられ、加茂地区の有力者の存在を伝えている。一方で、小田氏系図には、八代目の小田孝朝の子に「孫四郎 加茂村住」とあり、やはり、加茂地区の有力者が記録されている。

平後館跡の南東部には、16世紀のものと考えられる六地蔵宝幢や鍛冶屋庵寺内の層塔などがある。さらに東側には、小田領常陸真言宗四大寺に数えられる五智山南円寺や室町～戦国期にかけての膨大な量の花崗岩石造物がみられる立木観音が所在し、平後館跡は当地域の有力者の城館である可能性が高い。（千葉）



平後館跡縄張図 西山洋 2021.11.15

0670 笠松城跡 かすみがうら市中佐谷 現況：畑地、宅地ほか 別称：佐谷城 地図 57

笠松城跡は、南側に天の川、東側に雪入川の合流地点となる標高約 25m の台地上に位置する。東に張り出す台地突端部が、曲輪 I となり、北側に部分的ではあるが高さ約 1 m の土塁が見られる。ほぼ連続して西側に曲輪 II があるが、土塁や堀などの遺構は、見られない。

笠松城は、正元 5 年（1259）に、佐谷郷の領主であった佐谷次郎左衛門尉実幹によって築かれたという。佐谷氏は、大掾氏の祖とされる馬場實幹の孫とされる。実幹の後は、朝幹、教幹と二代で滅び、笠松城も廢城になったという。

笠松城は、慶長 7 年（1602）に出羽国から志筑へ移った交代寄合本堂氏の陣屋となる。約 40 年本堂氏が居住したが、正保 2 年（1645）に志筑城跡に陣屋が移された。（千葉）



笠松城跡縄張図 西山洋 2021.4.26

はったやかたあと
0665 八田館跡 かすみがうら市牛渡 現況：山林

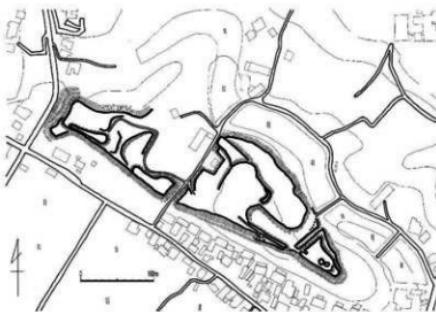
地図 65

八田館跡は、南側に霞ヶ浦を望む標高約20mの台地上に位置する。

東西の地形に沿って、土塁が所在するが、明確な曲輪は認められない。東部の最高所は、前方後円墳を改造したと思われる物見櫓的な場所も存在する。

八田館は、小田氏八代の孝朝が構えた城館と伝えられている。館の南側には、八田地蔵堂があり、14世紀のものとみられる観音菩薩懸仏が安置されている。館から東に行った宝昌寺には、小田孝朝が供養されたと伝えられる石造九重層塔（茨城県指定文化財 花崗岩製 高3.5m）がある。

当地区は、小田氏五代の宗知が、法名を「牛渡寺殿觀慶尊覚大居士」として牛渡寺を菩提寺としたことに始まる。牛渡は、古くから港が設けられた水陸交通の要衝であり、小田氏にとって水上防衛の拠点として重要視された場所であった。八田館は、城館として霞ヶ浦の水上交通を監視する役割を担っていたものと考えられる。（千葉）



八田館跡縄張図 西山洋 2021.11.15

とざきじょうあと
0666 戸崎城跡 かすみがうら市戸崎 現況：山林、水田、畑地、宅地

地図 65

戸崎城跡は、南に霞ヶ浦、東側に川尻川を望む、標高約25mの台地上に位置する。

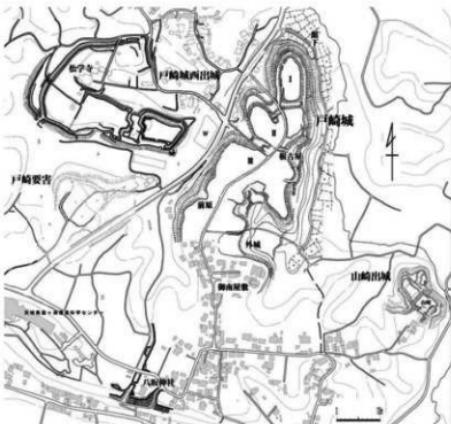
戸崎城・山崎出城（0679）・戸崎要害（0680）・戸崎城西出城（0681）からなる大型な城館跡である。

①戸崎城は、現在の戸崎集落全体となり、「本丸」、「二の丸」、「城中」、「丸外」、「外城」、「御南屋敷」、「館下」、「根古屋」など城に関わると思われる地名が複数みられる。

集落の中心には、道があり短冊形地割の宿形式の屋敷が連なる。これら屋敷の奥部には、土塁や堀がみられる場所があり、堅堀など横位の移動を防ぐ遺構も見られる。

北端部の台地先端が、曲輪Iである。約30m×100mの南北に細長く、高低差約5m下に腰曲輪が設けられ、曲輪Iを全周している。曲輪Iと曲輪IIの間には、幅約10mほどの堀があり堅堀も連続して存在する。曲輪IIと曲輪IIIの間には、食い違う堀がみられ、以前は馬出があった可能性もある。曲輪IIIは、戸崎城内で最も広い平坦な曲輪で、家臣団の宿空間と考えられる。

②山崎出城は、戸崎城の東南に位置し、二つの曲輪からなる。南側の曲輪が主郭と考えられ、約40m四方の方形館を呈する。深さ約4mの堀を経て、北側に曲輪IIがあり、周囲には腰曲輪が一段～二段にわたってみられる。①戸崎城の中城地区は防御性が弱いものであるため、山崎出城を構築することで防御性を高めることができる。家臣団の宿空間を守る要となるのが山崎出城であった。



戸崎城周辺図 戸崎城および山崎出城（本間朋樹 2005.9.11「改茨」より転載）、戸崎要害（高橋宏和）、戸崎城西出城（西山洋 2022.1.31）、八坂神社周辺遺構（西山洋 2023.1.9）

③戸崎要害は、①戸崎城の南西部に位置し、地名を流替（りゅうがい）という。台地の端部を利用して構築された戸崎要害の南半分には、幅約2～4mの腰曲輪が、最大2m下に存在する。また、南側台地基部には、東西の谷津につながる人工的に掘りこまれたと想定される地形がみられ、堀が想定される。戸崎要害も、①戸崎城の南西に設けることで防御性を高めている。

④戸崎城西出城は、①戸崎城の曲輪Ⅰの南西部に位置する東西方向の細長い台地を利用して構築されている。台地の東端部下には現在、池がみられ、古くは台地三方を囲むように低湿地が広がっていたものと思われる。曲輪Ⅰは、東西約80m、南北約40mの広さをもち、土塁や堀がみられている。曲輪Ⅱ（馬出）は、曲輪Ⅰの西側にあり、南北約10mの狭い空間である。しかし、西側に横矢張出が設置され、防御性を高めている。戸崎城西出城も山崎要害や戸崎要害と同様に、戸崎城の防御性を考えて構築された施設と想定される。

その他、①戸崎城一曲輪の西側には、曹洞宗の松学寺があり、周辺が松学寺遺跡となっている。松学寺遺跡内には、北側と西側に大規模な堀や土塁が残されており、戸崎城に関連する城館跡の可能性がある。

戸崎城は、永禄・天正年間に戸崎道閑斎俊直子・大膳亮俊が居城したとされ、戦国時代の小田氏と佐竹氏の抗争に、小田氏家臣の有力武将として活躍した。天正年間頃に小田城を奪った太田三楽斎父子は、小田氏の十五代氏治の勢力挽回の機を制するため、小田村と藤沢村の中間にある砦台で戦った。その際に戸崎大膳は、由良判官則綱以下七百騎と共に参陣したことが伝えられている。その後に行われた轄原・北条・真壁氏幹の小田氏攻撃の田土部合戦の際も戸崎氏は、菅谷・由良・行方・海上勢と共に迎え撃ち、擊退することに成功したという。小田氏の家臣として活躍する戸崎氏であったが、小田氏攻めをする佐竹義重は天正元年（1573）7月25日に宍倉城を降し、その勢いで8月2日には戸崎城も攻め落とした。文禄4年（1596）に戸崎城は、佐竹氏家臣の飯塚兵部少輔が管理することになったと伝えられる。（千葉）

志筑城跡は、恋瀬川右岸の標高約25mの台地突端部に位置する。

旧志筑小学校の敷地が東西約200m、南北約80mの曲輪I、道を隔てて南側に曲輪II、西側も道を隔てて曲輪IIIと想定されるが、明確な堀や土塁は残されておらず、想定に留まる。

志筑城の歴史は、下河辺氏（平将門を追討した藤原秀郷の子孫とされる下総国下河辺莊の領主）の初代行義の子政義が、源賴朝の叔父志田義広の乱の鎮压功績で常陸国南郡の地頭職になり、志筑郷及び大枝郷を本拠地としたことに始まる。

政義は、後に益戸氏を名乗るようになり、總社宮文書21（文保2年 1318）にあるように志筑・大枝郷は確かに益戸行助が支配していた。その後、頼助・虎法師丸（国行）と続き、南北朝内乱では南朝方に属した。延元3年・建武5年（1338）に北朝方に転じた府中石岡城（0581）を攻撃したのは「小田・志築」とみえ、志筑益戸氏がその後も志筑城に在ったとみられる（税所文書）。暦応4年、大掾淨永の軍勢が志筑城を攻落し、志筑益戸氏は降伏し、国行が北朝方に仕えている。

下って康暦2年（1380）、下野小山氏と宇都宮氏の衰原合戦の際、小山方で戦死した中に「志筑嫡子」とみえ、国行の子とみられる人物が戦死したが、その段階でも志筑城は益戸氏の所有と思われる。嘉慶元年（1387）の小田氏の乱に際し、犬懸上杉禪助は、難台山に向けて進軍する中で、志筑に陣を敷いており、城としての機能は活きていたとみられる（町田文書）。（千葉）

参考：中根正人「中世後期志筑益戸氏の系譜と代替わり」（『国史学』231、2020）



志筑城跡縹張図 青木義一 2015.1.17 (『続茨』より転載)

なかねちょうじゅやしきあと
0671 中根長者屋敷跡 かすみがうら市下田 現況:山林、畠地、寺社境内地 地図 49

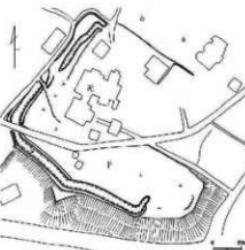
中根長者屋敷跡は、北に中根川、南に飯田川を望む標高約 25m の台地上に位置する。

現在の往西寺の場所は、中根長者屋敷跡と呼ばれている。往西寺を取り囲むように方形に巡る土塁及び幅約 4 m、深さ約 1 ~ 1.5 m の堀が見られ、東側は二重の土塁と堀となっている。西側は噴違いの土塁がみられ、この付近が虎口と考えられる。

中根長者屋敷跡の場所は、中根川と飯田川が合流するところに張り出す台地上となり、この立地が自然の要害となっている。ただ、東側に台地が連続することから、東側の防御を強固するために二重の土塁と堀が設置されたものと考えられる。また、周囲を巡る堀を「朝業堀」といい、一朝にして造られたことから名付けられたとされている。

中根長者なる人物は、中根与右衛門と伝えられている。中根与右衛門は、かなりの富豪であったとされ、佐竹方から出された稻吉与十郎宛の中根長者財産目録（『南城高家目録』所収）には、「一百姓道具 百五十人前、一馬式拾匹 牛三匹、一千石酒屋 壱軒、一板蔵三つ、一土蔵八つ、一金蔵壹つ、但し有金数知れず、一銭蔵壹つ、一鍔式拾筋、一刀三拾腰」と記されている。

さらに、野寺孫三郎なる人物が佐竹氏に隨身した当時、軍用金參千両を中根長者から徵用する使者役を買ってでたが、中根長者から嘲罵されたという伝説もある。（千葉）



中根長者屋敷跡縄張図 高橋宏和

ごんげんやまじょうあと
0673 権現山城跡 かすみがうら市上志筑 石岡市半田

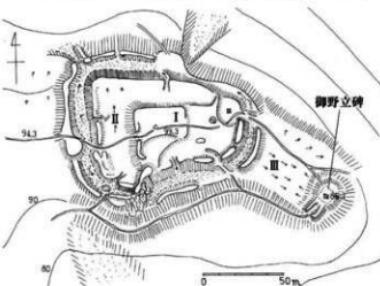
現況:山林 別称: 権現山要害 (砦)

地図 49

権現山城は、恋瀬川右岸の標高約 100m の権現山に位置する。頂部に築城された権現山城からは、極めて眺望が良く、遙か霞ヶ浦高浜入りまで望むことができる。

権現山城は、東西に長く、東端部の物見の位置に権現社と御野立碑、ここから約 30m 西に二重土塁と二重堀を設ける。この内側の東西約 80m、南北約 60m の長方形の空間が曲輪 I となる。この曲輪の東側に二重土塁と二重堀を経て、曲輪 II となる。

権現山城は、各種史料に登場する志筑城ではないかという説がある。しかし、低山といえども居住性に欠ける権現山城は、有事に詰める要害的要素が高い。二重の土塁や堀も戦国期にみられる構造のため、比較的長く使用されたと想定される。志筑地区的戦国期には、志筑といいう武将がいたとされることから、志筑氏の要害としても機能していたとも考えられる。（千葉）



権現山城跡縄張図 青木義一 2010.4.3 (『続茨』より転載)

にしつぼいせき
0675 西坪遺跡 かすみがうら市東野寺 現況：畠地、宅地

地図 50

西坪遺跡は、恋瀬川右岸の標高約22mの台地上に位置する。東に天の川と恋瀬川の合流地点、遙か高浜入方面を望む、眺望が開ける場所にある。

東端部に東西約40m、南北約50mの方形曲輪があり、土塁と堀が各所に設けられている。土塁基底部幅7m、高さ約1.5~4mを測る。方形曲輪から西へ館跡は展開し、複数の堅堀があり西からの防衛を意識している。

西坪遺跡の北側台地下には、天台宗の多聞山地福院吉祥寺が所在する。地福院には、平安時代後期の木造天部形立像（県指定文化財）、鎌倉時代の金銅仏多聞天立像（県指定文化財）が安置されている。

恋瀬川を挟み対岸には、石岡市外城遺跡（0582）がある。外城遺跡は、石岡城跡と考えられており、南北朝時代には、北朝方の大掾氏、南朝方の小田氏や益戸氏と攻防戦を広げたという。西坪遺跡の築城年代は不明であるが、立地から石岡城との位置関係を考慮すべきと思われる。（千葉）



西坪遺跡縄張図 西山洋 2021.11.15

ふるなでいせき
0676 古館遺跡 かすみがうら市西野寺 現況：山林 別称：古館

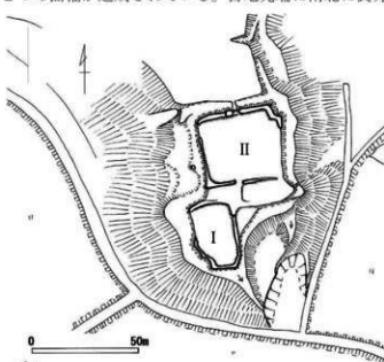
地図 58

古館遺跡は、南に中根川と天の川の合流地点を望む標高約26mの台地上に位置する。

東に谷津が入り南にせり出す台地には、2つの曲輪が造成されている。台地先端に南北に長方形の曲輪Ⅰ、その北側に東西約47m、南北約37mの方形郭となる曲輪Ⅱがある。各所に土塁や堀がみられ、土塁は最大基底部幅が7mを測る。二曲輪の北端中央には、虎口があり土橋へと続く。

『千代田村史』によると、「西野寺にある「古館」は孫三郎の拠ったとりで跡とも考えられる」と野寺孫三郎との関係を記している。中根川を上流に上れば、中根長者屋敷跡となる。伝承によれば佐竹氏に従った野寺氏が、軍用金三千両を中根氏に徵用する役を買って出たところ、中根氏に嘲罵され追い返されたという。

古館遺跡の東には、古代東海道を使用した鎌倉街道が通過している。（千葉）



古館遺跡縄張図 高橋宏和 2020.1.19

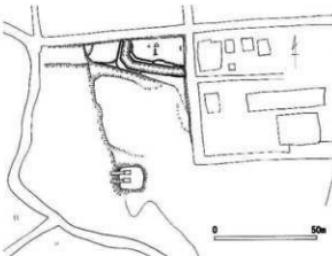
0677 がんじょうじあと 願成寺跡 かすみがうら市上志筑 現況：山林 別称：堀ノ内館、堀ノ内遺跡 地図 49

願成寺跡は、南側に中根川に繋がる谷津に面する標高約42mに位置する。

願成寺跡は、堀ノ内遺跡と重複し、遺跡内には、土塁と堀が部分的に残る。土塁は、基底部幅約5m、堀は、上端幅約6m、深さ約2mを測る。

以前は、遺跡の南西隅に五輪塔が雖然とみられ、西方谷津を隔てた山麓には「ゴボディショ」と呼ばれる場所があり石塔が乱立していたという。

『吾妻鏡』には、願成寺の僧が、建保6年（1218）に鎌倉幕府へ訴状を提出した記事がみられる。願成寺の寺領に検注使が入ることを停止するよう求めた内容で、鎌倉時代初期にはすでに願成寺が寺領をもつほどの寺院として存在していたことが分かる。一方で「閑居山縁起」なる資料には、志筑山懸持院願成寺は、「弘法大師の草創、乘海大師中興の靈場にして、古歌にも詠ずる處の志筑の森是なり」と記されている。（千葉）



願成寺跡縄張図 高橋宏和 2020.1.5

0678 がんじょうあと 後庵城跡 かすみがうら市上佐谷 現況：畠地ほか 別称：不動山遺跡 地図 57

後庵城は、北側に雪入川と天の川の合流地点を望み、東側は天王川が流れる標高約26mの台地上に位置する。鹿島神社周辺には、堀跡がみられるが、構成される曲輪は不明である。

雪入川と天の川の合流地点を望む対岸には、笠松城があり、関係をうかがわせている。

『千代田村史』には、「下稻吉と上稻吉の中間に後庵城址」というとりで跡があるが、あるいは与十郎の拠る所であったかも知れない」とあり、稻吉与十郎なる武将との関係を記載しているが、詳細は不明である。（千葉）



後庵城跡縄張図 高橋宏和 2020.1.5

いわたやかたあと
0683 岩田館跡 土浦市大岩田 現況：山林

地図 64

花室川左岸、霞ヶ浦に注ぐ河口付近を望む標高約 24~22m の台地上に位置し、範囲は東西約 110m、南北約 80m を測る。

台地上から複雑に貫入する谷部にかけて大岩田の集落が展開するが、台地上に平坦面が複数見られるほか、小規模な谷戸を占める宅地箇所に土壘状のせり出した高まりが確認できる。明確な堀や土壘の構築は見られない。

近世の戦記物に登場する、小田氏家臣である岩田彦六の館という。その他に特段、伝承等は伝えられていない。

(比毛)



岩田館跡縄張図 西山洋 2021.12.13

みなみふるやしきやかたあと
0684 南古屋敷館跡 土浦市小岩田東 現況：山林、畠地

地図 64

花室川左岸、南に小さく突き出た台地先端部に位置し、範囲は東西約 110m、南北約 140m（平坦面は約 60m × 80m）を測る。

台地基部の南から侵入する細長い平坦面の先に、L 字形の土壘が通路遮断のために構築されている。これ以外の平坦面には土壘などの構築は見られない。南東の低地からの登攀路には西側に腰曲輪状の平坦面が接し、北東に折れながら切通状の道が上がる。その西側には櫓台状の高まりが若干ながら観察できる。南側台地斜面は急激に落ちるが、腰曲輪状の平坦面が一部にめぐっている。

この館跡に関しては、築城者や伝承などは特に伝えられていない。同一台地上で東側に近接する神田遺跡では、14世紀から15世紀にかけての掘立柱建物群や礎石建物、15世紀から16世紀にかけての地下式坑・道などが発見され、中世の土器、陶磁器なども多数出土している。更に範囲を広げると、複数の遺跡からは地下式坑や井戸跡など中世遺構が多数調査され、小規模の地点貝塚なども発見されていることから、小岩田・大岩田地区は中世の花室川流域において、地域の拠点や集落などが営まれた地域であると思料される。(比毛)



南古屋敷館跡縄張図 西山洋 2021.12.13

いまいづみじょうあと
0686 今泉城跡 土浦市今泉 現況：山林、畠地、宅地、寺社境内地

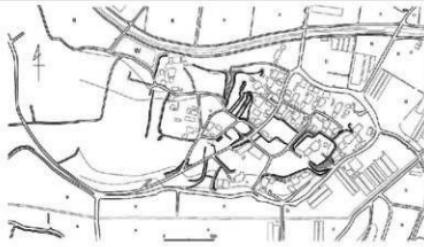
地図 57

城跡は、天の川と天王川に挟まれた標高約26mの半島状台地の先端に位置する。範囲は東西約400m南北約250mを測る。

台地末端部に位置する現在の法泉寺が主郭と推定され、寺の南西からの登口は折れを持ち、腰曲輪状の平坦面も確認できる。寺北側の道は切通状を呈し、台地基部との境である。

また、台地中央から北側斜面にかけては、民家の裏山に縱方向に大規模な堀と土塁が構築されている。台地西側には、今泉集落の境界ともなる幅40mを超える大規模な掘割が見られる。

城主は小田氏家臣今泉五郎左衛門と伝える。城が大規模であるわりに、その他詳細な情報は不詳である。天の川に近接した自然堤防上には兵伏塚と呼ばれる一角があり、今泉城主の墓と伝える16世紀代の石造五輪塔（市指定）が3基現存する。この他、城跡周辺の遺称地としては、「堀の内」「城下」「根小屋」「門口」「新堀」「みかど橋」がある。（比毛）



今泉城跡縄張図 西山洋 2022.3.1

てのじょうあと
0688 手野城跡 土浦市手野町 現況：山林、畠地

地図 57

霞ヶ浦を南に望み、中貫都市下水路の谷と常磐線を西に臨む標高約25mの台地端部に位置する。範囲は東西約70m南北約150mを測る。常磐線建設に伴い、台地西側と南側は削平を受けている。

木田余方向からかすみがうら市戸崎に通じる旧道の坂道を上って西側の舌状台地の斜面部に土塁と腰曲輪状の平坦面が見られる。

「新編常陸国誌」では鎌倉初期の八田知重の子知継（重継）が、鎌倉末期には小田知貞が手野に住むという。戦国時代には小田氏家臣中根氏の居城で、万右衛門主膳知矩、万大夫主税の名が伝わる。

手野城のある台地の東側には広範囲に台地が展開し、小字で宿前、宿後、海道、薬師などが伝わる。遺跡ではヤマトシジミ中心の中世の地点貝塚や、武藏国鎌倉街道沿いに見られるまいまいず井戸に類した井戸山遺跡、大量埋蔵鉄出土地、更に東方約2kmの手野新堀遺跡には直線状の土塁と堀の跡が残る。中世後半には、手野周辺は宿や街道をもつ枢要の地と目される。（比毛）



手野城跡縄張図 西山洋 2021.6.7

城跡は、霞ヶ浦に東流する桜川河口

部に形成された標高約2~3mの微高地に立地する。この周辺には桜川の支流が複数流入することから、自然河川を防御に利用した低地上の要害の地に当たる。

築城者の伝説は平将門だが、史料に基づくと若泉五郎右衛門（菅谷氏系図）・今泉五郎右衛門（土浦城記）の説がある。若泉氏は高氏被官で南北朝時に信太庄入部の可能性が指摘されるが、戦国期には小田氏有力家臣の菅谷氏居城として記録に現れる。戦国末期の小田頴が織豊期に結城領の飛び地となつたため、天正末・文禄から徳川支配が進み、水戸街道及び霞ヶ浦水運の交通の要衝と、江戸回り経済圏を支える常陸南部の政治・経済の拠点として、城下の整備が進められた。その結果、近世城郭の遺構は明瞭だが中世段階の姿は不明な点が多い。土浦の市街地形では東崎と中城の2集落が歴史的に古いと言われ、東崎は霞ヶ浦に面した河口部の集落、中城は土浦城東南側の旧水戸街道沿いの地域を指す。中城が中世土浦城城下集落の起源とも考えられるが、近世水戸街道の開通に伴う町場整備の影響もあり不明な点も残る。

現存する本丸及び二の丸の一部は、県史跡の文化財指定を受けており、土浦市教育委員会は土浦城址整備事業の一環として本丸門基礎・東櫓・西櫓・土塁、二の丸土塁などの学術調査を行うほか、外丸御殿などの行政調査も実施している。このうち本丸土塁復元目的の土塁発掘調査では、土塁構築土及び最下層の基礎から小田城跡類似のかわらけや内耳土鍋片などが出土した。このことから、本丸土塁は16世紀後半には存在し、戦国期の主郭が近世に引き継がれた可能性が推定されている。近世土浦城を描いた正保2年（1645）頃作成の最古の古絵図でも、本丸がほぼ方形を呈している点は上記と矛盾しない。なお、寛文（1661-73）から貞享年間（1684-88）にかけて土浦城は大改修を施し、現状に近い城郭に至る。

この他、櫓門基礎の発掘調査では最下層から鉄砲玉、瓦質捕鉢・青白磁梅瓶の破片が出土している。二の丸の工事立会調査や、外丸御殿と西郭（近世武家屋敷）の発掘調査でも戦国期の内耳土鍋やかわらけ片のはか、中国産青花、瀬戸美濃系灰釉丸皿・端反皿・天目茶碗、唐津などの陶磁器片の出土が確認されている。これらの点から現在の本丸・二の丸を中心として、その周辺に中世段階の土浦城が展開していたことは首肯される。（比毛）



土浦城跡復元図 西山洋 2022.7.21

きだまりじょうあと
0689 木田余城跡 土浦市木田余 現況：水田、畠地、宅地、雑種地

地図 57

霞ヶ浦北岸の標高約2mの微高地に位置する。現状での低地との比高差は0.5m程度である。城の範囲は東西約400m、南北約250mを測るが、昭和のJR常磐線電流基地設置と水田の圃場整備事業に伴いその大部分は湮滅する。

現在は、小字中条・北堀・南堀・横沼のほか、霞ヶ浦に延びる砂洲上の集落と常磐線の境にわずかに堀跡を残す。霞ヶ浦に近接し、周辺は深田であることから、当時は守り易く攻め難い地形であったことが伺われる。

小田氏重臣信太氏の居城であったが、永禄13年(1570)の信太氏の謀殺後は小田氏治の居城となる。佐竹氏との度重なる合戦で攻略され、天正6年(1578)には破壊されるなどと伝う。

江戸時代前期の土浦城主朽木種綱が城跡の湮滅を惜しみ、宝積寺を本丸跡に移した。明治期の迅速図には方形をした寺の境内が描かれており、戦国期には方形館を基本とした城館であった可能性が高い。線路西側の蓮田の中に信太八幡境内と言われる地があり、石造五輪塔3基の信太範宗の墓(市指定)が残る。(比毛)

おきじゅくほりのうちやかあと
0690 沖宿堀の内館跡 土浦市沖宿町 現況：畠地、宅地

地図 65

霞ヶ浦北岸低地の標高約3mの砂洲上の微高地上に位置する。東西約100m、南北約110mのほぼ方形の範囲の小字が堀の内で、東を除く3方に幅3~4mの堀らしき痕跡が田となって残る。霞ヶ浦までは直線距離で南に約300mを測り、周囲よりは約1m標高が高い。隣接地の小字は東側が宿堂、北から西にかけて一町田、南西が舟戸・浜、南側が戸張である。

沖宿周辺は、霞ヶ浦土浦入りの中でも古代は大津郷の一部として、中世は鹿島から筑波・土浦方面への舟運の要衝として重要な地であった。近代まで有力な漁港であり、かつ物資流通の中継点として栄えた。

近隣の海蔵寺が小田治朝の開基であり、台地上には小田治朝の墓所を伝えている。当館跡に関しても、小田孝朝の乱後に隠棲した小田治朝の館との伝承が伝えられるが、詳細は不詳である。

低地下に存在し、かつ霞ヶ浦に直接望む地形に残る「堀の内」地名である点が珍しく、現地もほぼ1町四方の土地を残す。中世における低地開発や拠点形成などを考える点でも重要な事例である。(比毛)



木田余城跡復元図 西山洋 2017.1.22

(『改茨』より転載)



沖宿堀の内館跡縄張図 西山洋 2022.3.14

しんめい やまかわやかたあと
0691 神明・山川館跡 土浦市常名 現況：雜種地

地図 57

この館跡は、桜川左岸の標高約27mの台地上に立地する。台地は川に向けて開口するT字状の谷に東面するため、わずかに舌状を呈する。

築城者や築造年代の伝承は全く無く、周辺部一帯の発掘調査で発見された方形単郭の館跡である。遺跡名は周知の遺跡の神明遺跡と山川古墳群にまたがって発見されたことによる。

調査結果から、南北110m東西109mの溝が巡り、区画中央に根石を持った掘立柱建物跡、その周囲には複数の掘立柱建物が配される。中央の建物群から離れた位置で、井戸と方形竪穴建物が1基ずつ発見される。溝の外側にも掘立柱建物や根石建物などの遺構が散見され、同時期のものと推定される。

出土陶磁器の年代から13世紀代の館で、建物の重複がほとんど無いことから短期間に存続したものと推定される。(比毛)



神明・山川館跡復元図 比毛君男 2022.12.14

みねだいじょうあと
0692 峯台城跡 土浦市上坂田 現況：山林

地図 57

城跡は桜川左岸の標高約29mの台地上縁辺部に立地する。範囲は東西100m南北60mを測る。台地の南側を堀と土塁で分断し、坂田塙台古墳群11号墳の墳丘を利用しながら小規模な城にしている。北側道路に面した側に段切があり、更に北側の台地端部にも眺望のよい平坦面があることから、台地を上の道路・谷津側を意識した縄張りに見える。土塁と堀が複数、複雑に交錯しており、平坦面の面積は少ない。平常時の生活を兼ねる城というよりも、非常時の砦としての色彩が強いと考えられる。

築城者や城についての伝承は全く伝えられていない。本城を始め、下坂田屋敷内城(0699)や高岡丸ノ内館跡(0700)など桜川左岸は右岸と比べて、同種の小規模な城の密度が高く、その多くが土塁の痕跡を残している。分布としては藤沢城の周囲に目立つことから、小田氏と佐竹氏の戦国末期の軍事的に緊張した時期に造営された可能性が想定される。(比毛)



峯台城跡縄張図 西山洋 2021.10.25

ふじさわじょうあと
0693 藤沢城跡 土浦市藤沢 現況：畠地、宅地、雑種地

地図 57

城跡は、桜川左岸の標高約29~30mの台地上にあり、東側に大きく樹枝状の支谷が、西側には小さな谷が入り込む。台地縁辺部も波状に抉れたような箇所が複数見られる。

東西800m、南北700mの規模をもち、城内の各所に土塁と堀を構築して繩張りを廻らせる。南端に主郭となる曲輪I（字「城ノ内」）を設け、物見台と思しき高まりが残る。また曲輪Iの北には曲輪IIを配するが、国道寄りの藤沢集落との境には大きな堀の跡が残る。曲輪Iの西側小字に播磨郭・田土部郭が伝わることから、曲輪Iの前面に臣家臣团武家屋敷が存在していたと推定される。

曲輪IIから西側の曲輪IIIにかけての小字は中城という。現在、南北に切通の道が存在するが、これは後世の開削である。更に東側の曲輪IVは池の台といい、城とは離れた台地で余り城の痕跡は明確ではない。台地東端の法華院には小田氏治が亡母を偲び作らせた人身大の木造地蔵菩薩像（市指定）が伝わることから、同時に藤沢城と何らかの関連があったと推定される。

藤沢城の特徴の一つとして、城の北側に展開した城下集落を囲繞する堀と土塁が直線状に残存する点があり、惣構の痕跡と指摘されている。この堀と土塁は、精泉寺裏から遍照寺近辺の民家敷地まで断続的に確認することができる。現在の藤沢集落は、東西の国道125号線旧道を基として南北に短冊状の区割りを残し、中央の十字路には喰違いの痕跡が伺われる。幕末の古絵図にも既に同様の街道と集落が描かれており、中世末以来の区割りが継続しているものと思料される。集落周辺の小字には後宿・本町がある。東西北西には遍照寺が位置し、この周辺の小字が上戸張ということから城下集落へ通じる大手口が存在したと推定されている。

一次史料には、小田氏治（天庵）が天正14年（1586）9月に入城した記事が現在最古で、天正12年（1584）年の佐竹氏との和睦（事実上の降伏）後に藤沢築城を許されたと考えられる。先行する城館施設の有無は不明だが、播磨郭の一角には鎌倉末期の元弘の変で流罪になった万里小路藤房の剃髪後の髪を埋めた髪塔塚（県指定）が残る。城は、天正18年（1590）年の小田氏没落に伴い廢城となったと想定される。

小田氏最後の居城として常陸南部の中世末期の政治史上の拠点であるほか、主郭の遺存状況が良好で、かつ城下集落の惣構の痕跡が残るなどの点で重要な城跡である。（比毛）



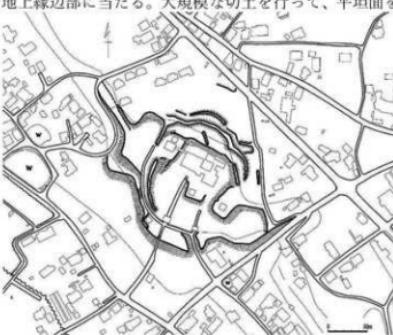
藤沢城跡縄張図 本間朋樹 2005.10.1 (『改茨』より転載)

0694 法雲寺城跡 土浦市高岡 現況:山林、寺院境内地

地図 57

法雲寺は、鎌倉末期に臨済僧復庵宗已により小田氏を壇越として創建された寺院である。『法雲寺文書』(県指定)によると、創建当初は林下だが、後に五山下の諸山に位置づけられた可能性がある。小田氏との縁が強く、小田14代政治・15代氏治の肖像画(県指定)、小田氏当主の供養塔である石造五輪塔や石造宝篋印塔(共に市指定)などを現在に伝える。

境内は、桜川左岸の標高32~27mの台地上縁辺部に当たる。大規模な切土を行って、平坦面を設けるほか、土塁状を呈する箇所が一部に認められる。また、境内北側の山林には二重に土塁と堀跡が認められ、東側に至るに従いその規模は小規模となる。土塁と堀についての伝えは無いが、地元では法雲寺から北の田宮集落に向けて非常時の抜け穴があるなどの伝承がある。戦国末期に上杉・佐竹勢による小田落城時の兵火によって一時法雲寺は焼亡した。焼亡後、近世に寺が復興するまでの間に藤沢城周辺の防衛施設として造営された可能性が想定されるが、寺院の境界としての意図も否定できない。(比毛)



法雲寺跡縄張図 西山洋 2021.10.25

0695 永井城跡 土浦市永井 現況:山林

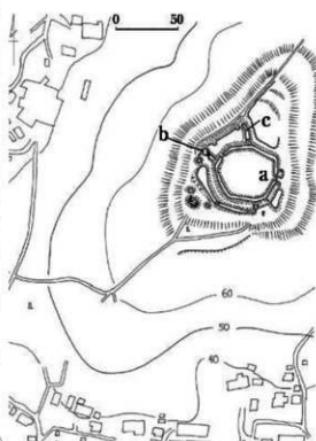
地図 57

天の川北岸の標高約70mの独立した丘陵の頂上に位置し、範囲は東西70m南北90mを測る。

ほぼ七角形状の主郭(最大幅約120m×緯約70m)を中心とし、土塁が巡る。東側の土塁が切れしており、虎口と考えられる。主郭の土塁の西と北は、角状に更に土塁が突き出した箇所がある。

主郭南側には土塁と堀が二重に巡り、南西には隣接して近世造立の永井大日塚群が3基ある。寛永3年(1626)造立の石造宝篋印塔(市指定)があることから、廢城後に城跡が信仰の場として利活用されたことが窺われる。

城主は、小田氏家臣前野修理といわれる。小田領北西の境界として大掾氏や佐竹氏に対する抑えとして營まれた城と考えられる。前野氏は近世以降山麓部に移動して住宅を構え、帰農後は名主職を勤めた。(比毛)



永井城跡縄張図 西山洋 2016.2.8 (『続茨』より転載)

かぶとやまじょうあと
0696 甲山城跡 土浦市大志戸 現況：山林

地図 57

城跡は、天の川北岸の標高約98mの独立した山塊の頂部に位置する。山塊全体の範囲は東西約250m、南北約250mを測る。

山頂の三十番神社の裏手に、東と南に堀と土塁で構築された主郭となる曲輪I（約30m×20m）が残る。神社境内も平坦面を形成しており、曲輪（曲輪II）であった可能性が高い。

神社近辺には、近世の大志戸堂山上塚が存在することから、廃城後に信仰の対象として城跡を利用したことが窺える。また、山の北西側裾には花崗岩製五輪塔の部材が散乱する箇所がある。

城主は、小田氏臣家で一門の小神野氏十代経憲と伝えられる。現在も小神野氏は、甲山西麓の日枝神社例大祭における流鏑馬神事（県指定）において、この地を納めていた領主・従羅天という役割を果たしている。（比毛）



甲山城跡縄張図 西山洋 2016.1.25（『続茨』より転載）

たとべじょうあと
0697 田土部城跡 土浦市田土部 現況：宅地

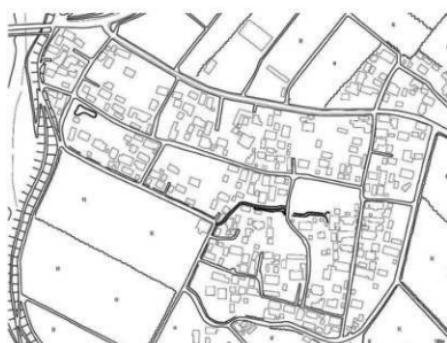
地図 57

城跡は、桜川に接した標高約7mの微高地に立地し、東西約500m、南北約300mを範囲とする。現在の田土部集落全体が城の範囲と重複しており、集落の中央部にあたる田土部公民館と東将寺の用地が主郭である。主郭北側を始め、範囲内の諸所に土塁と堀跡が部分的に確認することができる。なお、集落内北東部にある十字路は喧嘩い状に交差している。

城主については、鎌倉時代後半に小田氏重臣の信太左衛門尉忠貞（見性）が館を築いたといい、戦国期には小田氏一門の田土部政秀（小田政治次男）が城を整備したという。小田城や藤沢城内に田土部郭の地名が伝えられるところから、田土部氏は小田氏の重臣であったと考えられている。

田土部集落範囲内の小字には、「館山」「登城」「登城口」「宿」「上宿」「下宿」などがある。周辺の墓地には、戦国期から近世の五輪塔が多数見られ、城内周辺からは14世紀頃のかわらけや16世紀代の内耳鍋の破片が出土している。

（比毛）



田土部城跡縄張図 西山洋 2021.3.9

しもさかた やしきうちじょうあと
0699 下坂田屋敷内城跡 土浦市下坂田 現況：山林

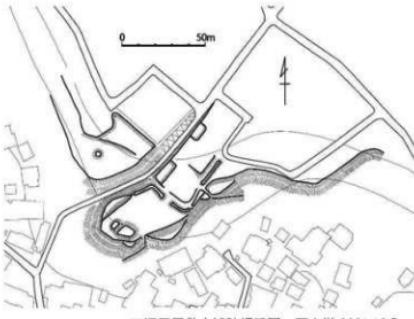
地図 57

城跡は、下坂田地区南西端で桜川左岸の標高約 26m の台地南側先端部に位置する。城の範囲は、東西約 90m 、南北約 100m を測る。

台地端部を主郭とし、北側の隣接区を副郭とする簡易な構造で規模も小さい。東側台地斜面には、腰郭状の幅狭い平坦面が數か所配される。

現存する土塁は下端で幅約 8m 、東側が低く残存高約 1m 、西側が高く残存高約 2m を測る。主郭・副郭間の虎口は、土塁中央に設けられる。主郭の端部には櫓台状の高まりが観察できる。

築城者や城に関する伝承は、伝えられていない。(比毛)



下坂田屋敷内城跡縄張図 西山洋 2021.12.5

たかおかまるのうちやかたあと
0700 高岡丸ノ内館跡 土浦市高岡 現況：宅地、雑種地

地図 57

館跡は、桜川左岸の標高約 7m の微高地上に位置する。桜川と台地までは約 1km 離れている。

旧土浦市立田土部小学校〔廃校〕の西側に、高さ約 2.2m 長さ約 100m の土塁が直線的に現在も残されている。北側の土塁の端部がわずかに鍵の手状に曲がることから、本来方形に囲繞していたと考えられる。範囲は東西約 150m 、南北約 150m と推定される。

また、現状の土塁には、土のほか砂利が多く含まれていることから、近在の土が構成土である可能性が高い。土塁の周辺からは、かわらけや古漬戸の破片が出土している。

土塁や堀が何によるものか、また築城者や城に関する伝承は全く伝えられていない。下坂田屋敷内城(0699)や峯台城跡(0692)など周囲の小規模な城と同様に藤沢城(0693)を囲むように分布することから、戦国末期に藤沢城の支城として整備された可能性が想定される。(比毛)



高岡丸ノ内館跡縄張図 西山洋 2021.3.9

わかもりじょうあと
0702 若森城跡 つくば市若森 現況：山林、畠地、宅地

地図 56

若森城跡は、桜川右岸の標高約27~28mの南北に延びる舌状台地上に立地する。桜川を挟んだ東側3kmには小田城跡が位置している。範囲は、南で台地が狭まる部分の堀切までと考えられ、規模は南北約370m、東西約230mである。台地の先端部分が主郭と思われる曲輪I、南に向かい住宅などがある曲輪II、最も大きな曲輪IIIとなる。曲輪Iの周辺部で最も堀跡が良く残り、小規模な土壘跡により曲輪II・III等が分けられる。

永禄12年(1569)5月、小田城をめぐる攻防戦において、「去十三氏治在城近辺若森地在陣」(『松野文書』)と、佐竹義重が若森に陣を敷いており、その際に若森城跡が使用された可能性がある。江戸時代には、堀田氏の陣屋として使用され、明治2年(1869)には陣屋跡に若森県庁が設置された。若森県庁は市指定史跡となっており、現在残る遺構も、一部は陣屋や県庁のものである可能性もある。(広瀬)



若森城跡縄張図 西山洋 2021.12.7

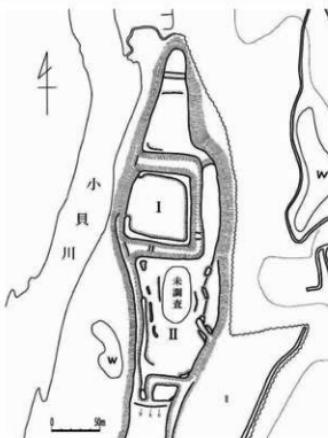
ながみねじょうあと
0703 長峰城跡 つくば市上郷 現況：山林、畠地

別称：河上塔之台城、田台峰宿館、上郷城、台豊田城

地図 56

長峰城跡は、小貝川左岸の標高約25~26mの南北に延びる舌状台地上に立地する。小貝川を挟んだ南南東1.5kmに豊田城跡が位置している。範囲は南で台地が狭くなる部分の堀切までと考えられ、規模は南北約400m、東西約150mである。中心付近に南北95m、東西75mの方形部分が主郭と思われる曲輪Iで、幅が最大25m程の堀跡と、最大高で3m程の土壘跡が巡る。堀の中には南東・南に浅い部分があり橋を懸けた痕跡と思われる。その周辺が曲輪IIであるが、南端の堀跡を除き、明確な城館の痕跡は確認できない。

多賀谷家種の頃に台豊田城主として豊田家臣の「飯富大膳」(『多賀谷家譜』)がいたとされている。また、『沼尻文書』には「豊田袋城」での戦いにおいて小田成治の感状があり、長峰城跡と関係する可能性がある。(広瀬)



長峰城跡縄張図 西山洋 2022.3.1

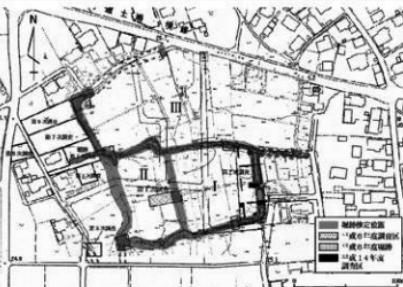
てごまるじょうあと
0704 手子生城跡 つくば市手子生 現況：畠地、住宅

地図 56

手子生城跡は、西谷田川とその支流に挟まれた標高 25m の舌状台地上に位置し、規模は南北約 320m、東西約 370m である。中心付近の 70m 四方の曲輪 I が主郭と思われ、西側が曲輪 II、北側が曲輪 III で、更に外側に曲輪や堀跡があったと考えられている。また、平成 6 年（1994）に基盤整備が行われ、現在は曲輪 I の東半のみ堀跡が残る。

平成 6 年（1994）、14 年（2002）などの発掘調査により、曲輪 I を囲む堀跡は幅約 7～9 m、土塁跡は基底幅約 5～6 m で、その他にも多くの堀跡や溝跡、土坑跡などが発見された。堀跡などの出土遺物は、一部高級な陶磁器を含む 13～17 世紀のもので、主要な時期は 16 世紀末～17 世紀であった。

小田氏に関係した城館であったが、多賀谷氏が元亀元年（1570）に豊田城、谷田部城を攻略したことから、その頃には多賀谷氏の影響下にあったと思われる。慶長 8 年（1603）～元禄 11 年（1698）に小田氏の重臣であつと旗本菅谷氏の陣屋となつた。（広瀬）



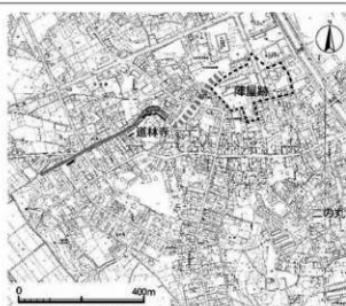
手子生城跡概略図 つくば市教育委員会

やたべじょうあと
0708 谷田部城跡 つくば市谷田部 現況：山林、畠地、宅地、雑種地

地図 63

谷田部城跡は、西谷田川と谷田川に挟まれた標高約 10～22m の台地上に立地する。現在は谷田部の市街地と重なるため、全体規模や遺構等ほとんど不明となっている。道林寺の裏が堀跡とされ、その約 300m 西側には部分的に土塁の痕跡が残る。堀跡が江戸時代の陣屋の裏の低地につながることから、この付近が城域の北端で、その南側には城館と関係する「二の丸」などの地名が残ることから、台地上が城館の中心であったと思われる。

谷田部城は、戦国時代末期に岡見氏と多賀谷氏の係争地の城館として歴史上に登場する。永禄 7 年（1564）には岡見弾正（治資）の城館であったが（『上杉文書』）、元亀元年（1570）に多賀谷氏により攻略される（『多賀谷家譜』）。天正 8 年（1580）に岡見・土岐氏の連合軍が一時取り返すものの（『多賀谷家譜』など）、再度多賀谷氏が取り戻すなど一進一退が続く。以後は、多賀谷氏優勢で天正 18 年（1590）小田原攻め後に廃城になったと思われる。元和 4 年（1618）に細川興元により城館の一画に陣屋が築かれた。（広瀬）



谷田部城跡跡張図 西山洋 2021.6.7 に加筆

0709 小野崎館跡 つくば市小野崎 現況：宅地、山林ほか 別称：御城

地图 63

小野崎館跡は、小野川の左岸で、谷津に挟まれた標高 22m の低位な舌状台地上に位置する。規模は現況で南北約 200m 、東西約 150m であるが、『小野崎砦址略図』(以下略図とする)によると更に大きく、宇宿を囲む堀も描かれており、集落全体で城館の状況を呈していたものと思われる。

主要部分（曲輪Ⅰ・Ⅱ）は、南北約150m、東西約110mで、堀跡が幅約8m、深さ約3mで全周しており、南東にある弁天池とつながっている。土塁跡は東・西や北側に部分的に遺存しております、基底幅5m、高さ1m程度である。この城館の範囲全体が単郭の方形館としては大きすぎる状況であり、略図では内部に更に方形の区画が描かれていることから、現況の東西溝aがそれと関係する可能性がある。東西溝aを北境として、現居宅付近に更に小さな方形の区画があったことが想定され、その部分を本来の曲輪Ⅰ、その外側を曲輪Ⅱと考えておきたい。更に西側や北側には堀跡と土塁跡の痕跡が更に連続しており、これらがかつて東や南側を開んでいた堀とつながる痕跡と考えられ、現方形館の南側を便宜的に曲輪Ⅲとしておく。

城主として荒井(新井)縫之介照信が在城していたとされる。小田氏の没落により布川城の豊島氏を頼りその家臣となるが、豊島氏が仕える北条氏の滅亡により、照信の一族である豊前は、小野崎館跡に戻り帰農したとされる(『利根川図志』など)。

現在もその子孫が暮らしている。(広瀬)



小野崎館跡縄張図 西山洋 2022.3.1



旧小野町特許略図「谷田部の歴史」より

金田城跡は、桜川の右岸、北から入る谷津に挟まれた標高 20~26m の台地上に位置する。規模は現況で南北約 250m、東西約 150m である。

主郭である曲輪は、南北約 150m、東西約 90m である。堀跡は幅約 20m、深さ約 10m で、南北と西側を区画しており、崖側である東側では腰曲輪状となるが、これは削平や埋め戻された痕跡で、本来は堀跡であったと思われる。土塁跡は基底幅 3~10m、高さ 1~3 m 程で、同じく 3 方向を区画して、南西端では櫓台状となっており、崖側である東側には認められない。北側の C 部分は独立しているが、城館の範囲からは明確ではなく、ここには前方後円墳の金田古墳が所在している。ほぼ単郭の城館となるが、周辺では他の曲輪の痕跡などは確認できない。

金田城跡から西北西 0.8km には、柴崎大堀遺跡(K065)が所在している。桜川と花室川の低地から入る谷津を結んで台地を堀で区切っているもので、その規模は発掘調査により、幅 7.9m ~ 16.4m、深さ 1.0m ~ 5.5m と大規模で、長さ約 330m が確認された。南北に通る道の遮断が目的と思われるが、金田城跡とは距離が離れていることから直接に金田城跡の外堀とは認めがたく、関係も明らかではない。

寛正 4 年(1463)の書状で、某嘉昌という人物が小田亀房丸(小田成治)に対して合戦をした「金田要害」(『日輪寺文書』)が、金田城跡とされている。また、明応 8 年(1499)には、小田成治が沼尻又次郎に「田中庄強清水郷金田城」の一部の権益を与えており(『沼尻文書』)、この頃には小田氏の城館となっていたと思われる。さらに、城主として沼尻又五郎が知られるが、16世紀後半の状況は不明である。(広瀬)



金田城跡縄張図 西山洋 2005.11.20



金田城跡と柴崎大堀遺跡位置図 つくば市教育委員会

うえのむろじょうあと
0714 上ノ室城跡 つくば市上ノ室 現況：宅地、畠地ほか 別称：土佐山城 地図 57

上ノ室城跡は、桜川右岸の標高 21~26m の台地上に位置する。範囲はあまり明確ではないが、南北約 450m、東西約 300m である。

曲輪Ⅰは、土佐山と呼ばれる城館北側の高所とされるが、明確な痕跡は確認できない。谷津を挟んだ南側、かつては、一乗院の東に堀跡が位置したとされており、その西側が曲輪Ⅱとなる。曲輪Ⅱの西側の斜面には、堀と土塁が何段かに連続する痕跡が残っている。その他は、集落内のため遺存状況は良くない。

上ノ室城跡の城主については、吉原備前守(越前守)、または、土佐山という名称から吉原土佐守とされるが、はっきりしない。また、低地を挟んだ北側には花室城跡が位置しており、一体として使用された可能性も考えられる。(広瀬)



上ノ室城跡縄張図 西山洋 2022.3.6

ふるくやかたと
0716 古来館跡 つくば市古来 現況：水田、畠地、宅地 地図 57

古来館跡は、桜川右岸の水田に囲まれた低位段丘上、標高約 7m に位置している。規模は、南北約 200m、東西約 100m である。館跡はかつて堀跡や土塁跡により区画され、内部は 3 つの空間に分かれていたとされるが、現状では確認できない。

部分的な確認調査により、堀への落込みや、中世の溝跡などを確認した。出土遺物は、中世では古漁戸・常滑などの陶器、かわらけ、土鍋などである。館跡の年代は 14 世紀~15 世紀頃が主体と思われ、一部 16 世紀代のものも含む。

城主については史料などが遺存せず、はっきりしないが、「古来」はかつて信太莊に属していたことが確認できる。この場所は、小字で「寺山」となっており、「寺田山トウケイジ」があったとの伝承もあることから、城館跡ではなく寺院跡であった可能性もある。(広瀬)



古来館跡縦略図 つくば市教育委員会

はなむろじょうあと
0715 花室城跡 つくば市花室 現況：山林、畠地、宅地

地図 57

花室城跡は、桜川の右岸の独立した台地上の南半部分、標高 24m に位置する。規模は東西約 450m、南北約 400m である。

昭和 45 年（1970）に県道研究学園線の工事により、城館の中心付近で発掘調査が行われ、主要な堀跡の配置などが明らかになっている。主郭である曲輪 I は、東西・南北約 60m の不整形で、東・西の堀跡が地割りなどに良好に遺存しており、主郭の南東隅には「太鼓櫓」（a）と呼ばれる塔状の高所がある。東の堀跡は部分的な発掘調査で上幅 10m、下幅 3m、深さ 5m の箱堀と判明し、16 世紀頃のかわらけや土鍋、捕鉢等が出土している。

曲輪 II を囲む堀跡は、八坂神社の裏に一部痕跡が残っており、更に曲輪 III を囲む堀跡は、覚王寺の裏で確認することができるなど、少なくとも三重以上の堀跡によって囲まれていたと思われる。北半の曲輪 III 内部は花室集落となっているため、詳細は不明であるが、その規模からは本来はいくつかに細分されていた可能性もある。また、低地を挟んだ南には上ノ室城跡が位置しており、これと一体的な利用がされていた可能性もある。

花室城跡は、天文年間（1532-55）に信田右衛門尉宗貞が居城としたとされるが定かではない。永禄 12 年（1569）の小田城落城後に、佐竹氏によって鹿島・玉造・手賀氏などが、花室城の守備を任せられたことが確認できる（『畠田旧記』）。その後、天正 18 年（1590）までには再度小田氏が取り戻したようで、豊臣秀吉の小田原攻めに際しては、海老ヶ島城（0525）の平塚刑部大夫の一族と思われる、平塚弾正忠が在城していた（『毛利文書』）。その後、北条氏滅亡後に廢城になったと思われる。
(広瀬)



花室城跡堀跡推定図 つくば市教育委員会

多気城跡は、桜川の左岸の独立した多氣山全体、標高 25~129m に位置し、規模は東西約 700m、南北約 800m の広大な山城跡である。

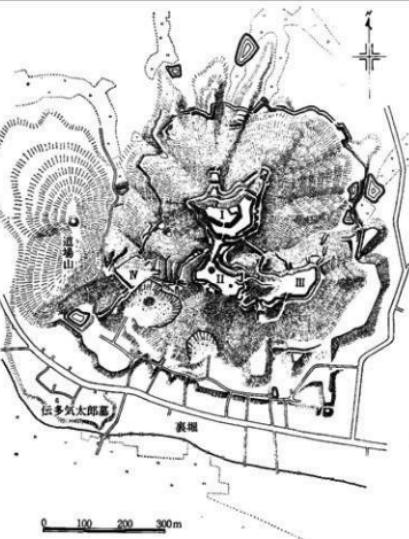
多気城跡では、山林管理施設の建設などを目的に、曲輪 I・II や、登山道路部分での発掘調査が行われている。

多氣山山頂部分に東西約 150m、南北約 100m の曲輪 I が、やや低い南側の尾根続に、東西約 100m、南北約 50m の曲輪 II が所在している。両者は幅約 7m の堀跡により、およそ二重に区画され、幅 10~20m の細長い曲輪で連絡している。長島尉信の著作『郁子園雑記』内に「絵図」が掲載されており、この細長い曲輪は「馬ノリバ」と呼ばれている。曲輪 II の虎口部分には、櫓台状の高まりがあるが、発掘調査により古墳の転用であることが判明している。

東側の尾根続に 30m 程下った部分に、東西約 100m、南北約 50m の曲輪 III があり、「絵図」では「サカヨリグルワ」とされる。曲輪 II から西に 60m 程下った部分には、東西約 90m、南北約 40m の曲輪 IV が所在している。

更に外側の山裾付近には、外郭の堀跡・土壘跡などが巡っている。城郭北側や西側では確認できるが、南・東側では宅地化や農地化が進んだため、明確には確認できないものの、大きな段差が切岸となり外郭線であった可能性がある。また、南の低地の水田面との境には裏堀と呼ばれる用水路があり、これが北条集落を含めた多気城跡の外郭線との指摘もある。

建久 4 年（1193）に八田知家が多氣義幹を陥れた、建久四年の政変に際して多氣義幹が立て籠もった「多氣山城」（『吾妻鏡』）が、この山であったと比定される。同時代の痕跡は確認できないが、南山裾には、12世紀代に建立された翼廊がある仏堂跡である、日向廃寺跡が位置している。多気城跡が現在の姿に整備されたのは、天正 7 年（1579）7 月 24 日に「北条嶽山再興」（『吉備雑書』）とあることから、天正 5 年（1577）の北条氏による筑波山放火などを受け、佐竹氏の手によって再整備されたと思われる。発掘調査により、大規模な堀跡や曲輪などが検出されたが、大規模に改修された 16 世紀後葉頃の遺物の出土や建物跡の確認はほとんどなく、生活感が希薄であった。このことから、戦闘用に大規模に改修されたものの、ほとんど使用されなかった可能性が考えられる。（広瀬）



多気城跡構造図（『筑波町史 上巻』より転載）

小田城跡は、筑波山地から続く宝篋山の南裾、桜川左岸の標高11~15mの低位段丘上に立地する。城郭部分が国指定史跡で、南北約550m、東西約450mである。外側には、城下町と結構構えの堀跡の痕跡が確認され、前山城跡などを含めると、東西約1.5km、南北約1.3kmである。つくば市では、史跡の保存整備事業に伴い、平成9~30年度に確認調査を実施し、平成28年に本丸跡とその周辺を小田城跡歴史ひろばとして整備し公開している。

小田城跡は、本丸跡（曲輪I）を中心にくつもの曲輪を取り囲む構造で、それぞれ曲輪I~Xとしている。それらを囲む堀跡の幅は、15~30mと規模が大きい。本丸跡は東西約135m、南北150mの長方形で、堀際に土塁跡がめぐり、北東と南東隅は櫓台状に一際高く突出している。本丸跡の北堀から南側は市街化調整区域で、城郭の痕跡が良く遺存しており、低い部分が堀で高い部分が曲輪の痕跡である。しかし、本来は更に細かく分割されていたことが発掘調査で分かっており、小規模な堀跡などは廃城後、早い段階で埋められたようである。曲輪IXは南北約100m、東西約90mの方形で周間に土塁の痕跡が残る。これは、方形館がいくつも存在していた頃の名残で、小字に「信田郭」の地名が残る。曲輪Xには「殿塔山」と通称される土塁跡もしくは古墳の痕跡が遺存する。

城跡北側は、市街化区域であることから遺存状態は悪いが、地割は明確に残っており、土塁や堀の痕跡も部分的には確認できる。土塁跡は、曲輪IVの北側で高さ4m程で、また江戸時代に陣屋がおかれた旧小田小学校の西側や、曲輪VIIの北東側でも良好に遺存している。堀跡も曲輪VIIの北から西側や、曲輪VIIIの北側などで部分的に遺存している。



小田城跡現況図 つくば市教育委員会



小田城跡復元図 つくば市教育委員会

城郭外の城下部分も集落のため遺存状態は悪いが、地名や『慶長小田城蹟図』、『小田古城跡地理図』などの絵図、地割りなどから、およその痕跡を確認できる。地名では町場に関係した「西町」「荒宿」「大町」「今宿」「見世屋」「台見世屋」などがある。前山城跡の山裾には「不動下」「諏訪下」「北斗」、宝篋山の山裾には、三村山極楽寺跡遺跡群に関わる「神宮」「尼寺入」「常願寺」などがある。これらの山裾は、寺社が位置する宗教に関連する場と推測される。

小田城主は大部分が小田氏であった。築城の時期は明らかではなく、小田氏が小田を本拠とするのは、初代の八田知家から、小田を名乗ることが確認できる4代時知から等諸説がある。鎌倉時代後半には鎌倉北条氏の進出により小田氏は所領を減少させ、鎌倉時代末期頃には守護職も完全に失った。暦応元年(1338)に7代治久は南朝方の重臣北畠親房を小田城に迎え、南朝方の関東での中心として戦うが、同4年(1341)に北朝軍の攻撃を受け降伏、北朝方に従った。8代孝朝は足利氏への忠誠から旧領の大半を回復し、関東では最大級の大名となった。またこの頃に小田氏は、関東で最も格式の高い名家を指す「八星形」(千葉・小山氏など)の一つに数えられた。

戦国時代には、13代治孝が弟頼家に殺害されるという一族の内紛を経て、14代政治は再び勢力を拡大させ江戸・大様・結城氏などと戦った。しかし、15代氏治の頃、16世紀中頃には北条氏と上杉・佐竹氏に挟まれ、小田城は何度も戦闘の舞台となった。弘治2年(1556)に北条氏の後援を得た結城氏により、永禄5年(1562)に北条氏に従った後は、同7年(1564)に上杉・佐竹氏により落城する。氏治は土浦へ逃れ専奪を繰り返すが、永禄12年(1569)の手塚坂の合戦後に小田城を奪われた以後は戻れなくなった。その後は、佐竹氏の城郭となり、梶原政景、小堀義成が在城、慶長7年(1602)の佐竹氏の秋田移封後は廃城となった。(広瀬)

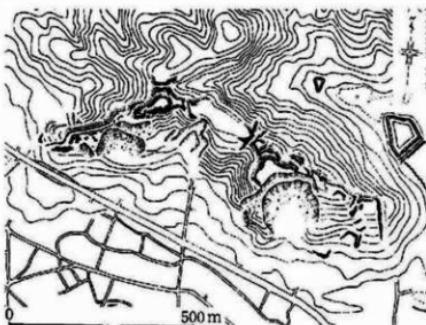
まえやまじょうあと 0722 前山城跡 つくば市小田前山 現況:山林 別称:舟ヶ城

地図 56

前山城跡は、桜川左岸で小田城跡北側にある前山、標高116mの最高所以以下に位置する。規模は、東西約1,000m、南北約250mである。石取によりかなり壊されており、遺存状況は良くない。

山頂付近には、いくつかの曲輪とそれを分ける堀切が確認できる。石取により曲輪の位置付けも明確ではないが、東側の大きな石取り付近に主郭があったと考えられている。また、小田城跡を囲む最外郭の堀跡と関係して、総構えとの一部となっていた可能性も指摘されている。

前山の崖面には、平安時代末期に刻まれた不動明王立像があり、当初は宗教施設の存在も想定される。永禄12年(1569)に、小田氏治が佐竹氏に攻められた際に「不動山」で戦っており(『歴代古案』)、当初は小田城跡の詰めの城として整備されたと思われる。(広瀬)



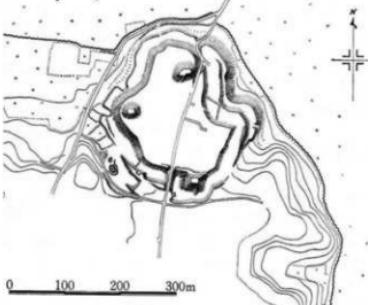
前山城跡縄張図(『筑波町史 上巻』より転載)

み もり じょうあと
0721 水守城跡 つくば市水守 現況：山林、畠地、宅地、公共施設他

地図 48

水守城跡は、桜川右岸の標高 27~29m の舌状台地の縁辺に位置する。範囲は東西・南北とも約 300m である。現在確認できる曲輪は 1 つで、南側の台地とは最大幅 30m もある大きな堀切りで区画しており、この堀切の外側には、城館の痕跡は現況では確認できない。その他 3 方向には現況では堀跡を確認できないが、腰曲輪や切岸で区画する。南側の虎口跡と思われる道路の東には櫓台跡が位置している。内部の土盛りは古墳で、櫓台跡も古墳の転用の可能性が指摘されている。内部は東西・南北約 200m と広いことから、更に細分されていた可能性もある。

水守城跡は、「将門記」に登場する「水漏營所」との関係も指摘されるが、その痕跡は確認できない。部分的な発掘調査からは、14·15 世紀頃のかわらけが城館外も含めて多数出土し、堀跡も検出されていることから、現況で確認できる城館以前は、更に城域が広かった可能性がある。(広瀬)



水守城跡縹張図(筑波町史 上巻より転載)

さ じょうあと
0734 佐城跡 つくば市佐 現況：山林、畠地、宅地

地図 56

佐城跡は、桜川右岸の舌状台地の先端、標高 25~28m に位置する。桜川を挟んだ東南東 2.7km に小田城跡が位置している。規模は、東西・南北約 100m で、ほぼ単郭の城館である。

曲輪 I は、東西約 50m、南北約 60m の不整形で、南側の台地が連続する部分にのみ、低い土累跡が遺存している。堀跡は明確ではないが、南側には低い段があることから堀跡の痕跡と推測され、広い部分では約 15m ある。西側に谷津が入っており、その付近まで城館の一部であった可能性もある。

佐城跡は、永禄 12 年(1569)の佐竹氏による小田城攻めに際して、1 月 21 日に「佐村へ移陣」(『歴代古案』)、「号三村地ニ被御陣取」(『上杉文書』)とあり、佐村に陣が敷かれており、その陣として佐城跡が利用された可能性がある。(広瀬)



佐城跡縹張図 西山洋 2021.4.6

こいづみやかたあと
0723 小泉館跡 つくば市小泉 現況：水田、畠地、宅地

地図 48

小泉館跡は、桜川左岸の標高 14 m、周辺の水田との比高 1~2 m の微高地上に位置し、規模は東西約 200 m、南北約 300 m で、微高地全体が城館であったと思われる。小泉館跡では、昭和 63 年（1988）年に圃場整備により、平成 5 年（1993）に県道改良工事により発掘調査が行われている。

中心の曲輪 I は、東西 94 m、南北 116 m で、幅 7~10 m、深さ 1 m の堀跡が巡る。曲輪 I 内部からは発掘調査により礎盤石を使用した、桁行 14.6 m 以上、梁行約 9 m で、南側に幅 4.2 m、長さ 6.6 m の中門廊がある大型の掘立柱建物跡が検出されている。曲輪 II は、東西 155 m、南北 200 m で、幅 7~11 m、深さ 1~2 m の堀跡が巡る。南側の堀跡が二重となるのは、更に外側の曲輪 III を囲む堀跡が、南のみ検出されたことによる。曲輪 III は、東に配置された馬出状の曲輪で東西 20 m、南北 60 m と小規模である。曲輪 IV は、曲輪 II の北側の曲輪で、東西 150 m、南北 80 m で、北端には土壘状の高まりが一部遺存している。

小泉館跡では、青磁や白磁、古瀬戸、常滑等の陶磁器、多量の手づくり・ロクロ成形のかわらけ、土鍋・擂鉢等の土器類が出土しており、およそ 13~15 世紀に機能したと思われる。16 世紀中心の大窯の製品や、青花がほとんど出土していないのが特徴的である。

小泉館跡の城主は、小田氏の一族の北条（小泉）氏であったと思われる。北条氏は小田氏 4 代時知の子息「道知」から分家しているが、系図上では何回か北条氏の存在が見られるところから、数回に分かれて養子が入ったと思われる。また、室町時代頃には、度々小田本家の次ぎに「常陸ノ北条駿河守」（『結城戦場記』）と登場しており、本家に次ぐ存在となっていたと考えられる。12 代成治の子息、頼家（五郎）も養子として北条（小泉）家に入ったと思われ、明応 4 年（1495 年）には「小田治孝舎弟五郎ニ討ル」（『和光院和漢合運』）と、頼家が兄治孝を討つており、その場所が「小泉郷」（『等覚寺善照寺 兩氏俗姓系図』）で、舞台は小泉館跡であったと思われる。その後の資料では頼家の本拠地が土浦城（0687）となっていることから、この事件をきっかけにして程なくして廃城になったと思われる。（広瀬）



小泉館跡堀跡復元図 つくば市教育委員会

くりさきじょうあと しゅうへんじょうかんぐん つくば市吉沼 現況:山林、畠地ほか

地図 56

栗崎城跡、吉沼大坪館跡(0727)、館宿城跡(0725)、吉沼大祥寺城跡(0728)、吉沼笠根城跡(0729)は、小貝川の左岸の標高24~26mの台地縁辺や舌状台地に位置しており、近接した中小城館であるため、まとめて紹介する。いずれもが、吉沼集落内に位置しているため、全貌は明らかではない。

栗崎城跡は、正福寺境内に堀跡や土塁跡などが遺存しており、明確な範囲で東西・南北約100mである。台地の続く南側にそれ以外の遮断施設は確認できず、単郭であった可能性がある。土塁跡aは、高さ2~3m、幅10~15mで、西側半分を囲むが、東側半分は遺存していない。西や北の土塁跡外側の傾斜地には堀跡・土塁跡・堀跡と連続して築かれている。また、南側で土塁跡が屈曲し、部分的な発掘調査でも堀跡と土塁跡が複雑に入ることが確認されたことから、この部分が虎口跡と推測される。

吉沼大坪館跡は、金蔵院境内に位置するが、南側の遮断施設も不明瞭で範囲ははっきりしない。ただし、北側斜面に、堀跡の痕跡が遺存しており、部分的な発掘調査では、二重に巡る堀跡と通路跡等を確認した。谷津を挟んで300m程に栗崎城跡が位置しており、一連の城館であった可能性がある。

館宿城跡は、北側の堀切で区画された舌状台地がほぼ城館の範囲で、南北約400m、東西150mとなる。部分的に遺存する堀跡は幅10m程あり、全周していたと思われる。更に、最下段の水田面付近にも堀跡の遺存が推測される。南側には現道で壊されているが、噴出變成になっており、虎口の存在が想定できる。館宿城跡は南北で2つに分かれており、南側が城館の中心部と思われる。

吉沼大祥寺城跡は、大祥寺付近を中心としたと思われるが、範囲が明確ではない。北寄りに堀跡の痕跡が確認されており、部分的な発掘調査で、幅5.5mの東西方向の堀跡と、北側に平行する下幅5.2mの土塁跡を確認している。

吉沼笠根城跡は、南側の台地統きから明確な遮断施設が確認できず、範囲も不明瞭である。北端部では部分的に堀跡などが確認できる。これらの3城跡は、土橋状の道で連結しており、館宿城の南側半分を中心とした一連の城館であったと思われる。

『多賀谷家譜』の家種の記事に「殺吉沼主原外記子弥五郎取城」とあり、年代は明確ではないが、15世紀の後半頃に、吉沼を奪ったことが記載されている。この城がどれにあたるかははっきりしないが、天文12年(1543)に正福寺が多賀谷政経により現在地に再建されたとの伝承を考慮するならば、落城したのが栗崎城跡の一例で、新たに築かれたのが館宿城跡の一群であろうか。(広瀬)



栗崎城跡と周辺城館群 西山洋

(『続茨』より転載)



栗崎城跡縄張図

西山洋 2015.12.28 (『続茨』より転載)

まえきやかたあと
0739 前木館跡 つくば市沼崎 現況：山林、畠地、宅地

地図 56

前木館跡は、谷田川の右岸、標高 23~26m の台地上に位置している。圃場整備などにより城館の痕跡はほとんど確認できないが、『豊里の歴史』掲載の「縄張り見取図」や圃場整備前の地割りなどから、およその堀跡や曲輪跡の配置が確認でき、一部 a 部分に堀跡が遺存している。地名では、「古ヤシキ」「矢土」「西矢土」「丸ノ内」付近が主要部分であると考えられる。「縄張り見取図」では、「古ヤシキ」部分を「本丸」としているが、細長いことから、更に曲輪が細分されていた可能性もある。

部分的な発掘調査も実施しており、幅 5m の堀跡や地下式坑、溝跡などが確認されている。時期は 15 世紀後半~江戸時代で、城館と関連するものであろう。「縄張り見取図」では「刀鍛冶屋敷」とされた部分にあたる。城主ははっきりしないが、「縄張り見取図」には「聖林寺 開基 沼崎備前守宗幹 天文八年」とあり、関係する可能性がある。城館としてはあまり明確ではなく、堀跡や溝跡で区画された、戦国時代の土豪屋敷を中心とした集落であった可能性もある。(広瀬)



前木館跡推定図 つくば市教育委員会

しづきやかたわかみやかたあと
0744 柴崎片岡上館跡 つくば市柴崎 現況：畠地、宅地

地図 56

柴崎片岡上館跡は、花室川左岸の標高 23~26m の台地上に位置し、南北約 100m、東西約 70m の不正方形の曲輪 I をを中心に、周辺にも堀跡や土塁跡が確認される。

平成 13 年(2001)・19 年(2007)の曲輪(郭) I 部分の発掘調査で、幅 5~17m、深さ約 2m の堀跡や、基底幅約 5m、高さ約 2m の土塁跡、一時期古い堀跡や江戸時代の池跡なども発見された。周辺の土塁跡や堀跡は、それぞれを不規則に囲んでおり、中心の屋敷と集落が一体化したものと思われる。調査区の出土遺物は、戦国時代~江戸時代の土器・陶磁器などで、戦国時代から引き続き使用されたことが分かる。中心部分は、江戸時代に名主を努めていた片岡家の屋敷で、「片岡岩淵左衛門秀貞館」とされ、戦国時代の土豪層が、江戸時代の名主へ連続していることが、城館の面からも明らかとなる事例である。(広瀬)



柴崎片岡上館跡平面図 (『柴崎片岡上館跡』より転載)

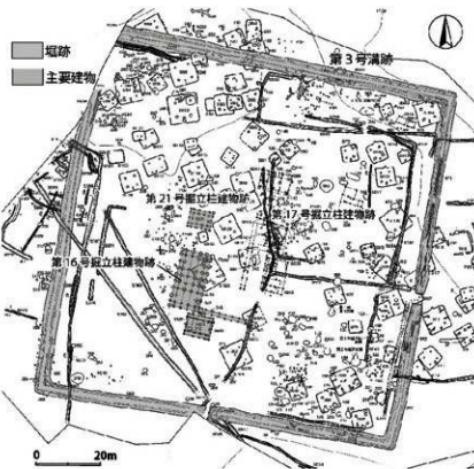
島名前野東遺跡の城館跡は、標高 12~19m の台地上に位置し、東西・南北約 114m のほぼ方形である。堀跡の外には、同時代の遺構は確認されていない。島名前野東遺跡は、TX の沿線開発のために、平成 15~17 年（2003-05）に発掘調査が行われ、城館のはぼ全てを調査している。

城館は、幅 3.5~5.5m、深さ 1.0~1.7m の堀跡（第 3 号溝跡）によって一辺 114m の方形に区画されている。出入口は、東に掘り残した土橋が、南に盛土で構築した土橋が、西に木橋が位置している。全ての橋が同時に存在したかは明確ではないが、建物跡が 2 時期とされ、それに対応したものと考えられている。

建物跡は、複数確認されているが、その数は少なく、ほぼ中心付近に集中している。第 16 号掘立柱建物跡と軸を合わせた建物跡と、第 17 号掘立柱建物跡と軸を合わせた建物跡の 2 時期が想定されている。ただし、第 17 号掘立柱建物跡の一群は、柱穴の有無が不明瞭なものや、軸が合わない部分もあり、あまり明確ではない。第 16 号掘立柱建物跡は、桁行 18.0m、梁行 9.2m で、面積 165 m² の大型のもので、中門廊の様な長い廊下が付属し、礎盤石も使用した、格が高い建物跡である。また、北に隣接する第 21 号掘立柱建物跡は、桁行 7.2m、梁行 5.5m で、四面に庇がある建物跡で、向きを合わせて位置しており、仏堂であった可能性が考えられる。その他の同時代の遺構は少なく、発掘調査では確認できない利用がされていた空間であったと思われる。

出土遺物は、ほぼ同様な形状の手づくね成形のかわらけが多数、溝跡などから出土している。陶磁器では、青磁の蓮弁文碗や、口禿げの白磁皿、常滑片口鉢や甕片などから、13 世紀後葉～14 世紀前葉頃と考えられている。

この城館跡は、田中荘内に位置しており、田中荘は小田氏の一族である田中氏の莊園であった。田中氏は、弘安 8 年（1285）に安達泰盛が失脚した霜月騒動に連坐して失脚し、田中荘も失ったと考えられている。この城館は突然現れ、短期間で使用されなくなったことから、田中氏の後に新しく田中荘に入部した勢力により築かれた城館である可能性が指摘されている。（広瀬）



島名前野東遺跡城館跡平面図
（『島名前野東遺跡』第 281 集より一部加筆し転載）

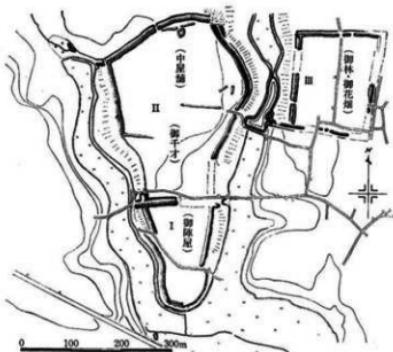
てらぐじょうあと
0746 寺具城跡 つくば市寺具 現況：山林、畠地、宅地 別称：本田陣屋

地図 48

寺具城跡は、小貝川と桜川に挟まれた樹枝状に開析する谷津に面した、標高 29m の台地上で、曲輪 I・II は舌状台地上に、曲輪 III は谷津を挟んだ東側に位置している。曲輪 I・II は、東西約 300m、南北約 600m、曲輪 III は、東西約 150m、南北約 200m である。

部分的に確認調査を実施しており、曲輪 I の西側で幅 5.8m の堀跡と基底幅 7.8m の土塁跡を、同じく北側で幅 7m の堀跡と基底幅 7m の土塁跡を、曲輪 II の北側では、幅 9m の堀跡と、基底幅 9m の二重の土塁跡を調査した。曲輪 III は南端で、幅約 4m の堀跡と、基底幅約 7m の土塁跡を確認した。出土遺物は、戦国時代から近世のものが、極少量出土している。

松下重綱が元和元年（1615）年に陣屋を構えていることから、戦国時代の城館と近世の陣屋としての使用があり、両城館で様々な可能性が想定される。（広瀬）



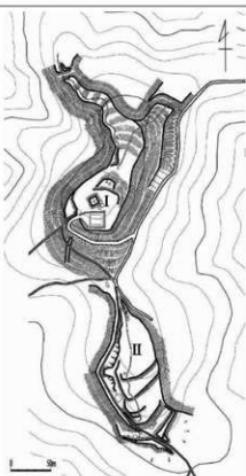
寺具城跡縄張図（『筑波史 上巻』より転載）

ほうきょうさんじょうあと
0751 宝篋山城跡 つくば市小田 現況：山林

地図 49

宝篋山城跡は、桜川左岸の標高 461m の宝篋山山頂付近、小田城跡から北東約 1km の背後に位置している。また、山麓には三村山極楽寺跡が位置することから、山頂には鎌倉時代中頃の宝篋印塔があり、このことから宝篋山と呼ばれている。規模は南北約 450m、東西約 150m である。曲輪 I は、宝篋印塔が位置する場所で、宝篋山山頂付近である。尾根が続く北東・北西・南の 3か所にはそれぞれ堀切がある。南側は緩やかに傾斜する曲輪のような平坦面があり、これを曲輪 II としており、簡単に造成したものであろうか。

南北朝の争乱時に、「馳向小田宝篋峯、致合戦追落御敵」（『集古文書二十四』）とあることから、北朝方の高師冬の軍勢が攻め寄せ陣を敷いたことがわかる。また、小田城を見下ろす位置にあることから、小田城の攻防戦には重要な場所で、南の堀切の規模などからも、戦国時代にも使用されたと思われる。（広瀬）



宝篋山城跡縄張図 西山洋 2022.2.7

わからぐりみじょうあと
0754 若栗御城跡 つくば市若栗 現況:山林、畠地 別称:御城

地図 63

若栗御城跡は、谷田川の左岸、標高約24mの舌状台地の先端部分に位置している。南北約300m、東西約200mの規模である。曲輪はI～IIIの3つに分かれており、曲輪Iの南端には稻荷社が位置している。曲輪IとIIの間に幅10m程の堀跡が残り、部分には櫓台跡のような高まりも確認できる。曲輪II・IIIには土塁跡の痕跡が部分的に残るが、明確な堀跡は確認できない。bの部分では土塁が食い違っており、虎口跡と思われる。

曲輪IIIの北東の最外郭で部分的に確認調査を行っている。土塁跡であるcの東側で、幅7～10mの南北方向の堀跡と、cに接続する南北方向の幅7m、存高0.5mの土塁跡を確認した。土塁跡cの北側には更に曲輪があり、本来は曲輪IIIの外側(北東側)にも堀跡があったと思われる。

この城跡は、江戸時代の軍記物などでは、栗林下總守義長が居城としたとされているが、城主などを示す明確な史料は確認できない。(広瀬)



若栗御城跡縄張図 西山洋 2016.11.28
(『続茨』より転載)

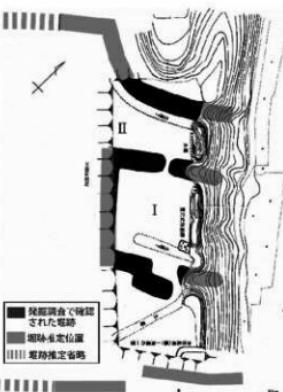
はつきさきじょうあと
0756 泊崎城跡 つくば市泊崎 現況:宅地

地図 70

泊崎城跡は、牛久沼に突き出した標高13～14mの台上地上に位置している。かつて良好に城館の痕跡が遺存していたが、住宅地造成によりほぼ埋没している。

昭和54年(1979)の発掘調査成果と航空写真によるところ、城跡は、舌状台地の先端部ではなく、600mほど北西側にその痕跡を見ることができる。遺存していた規模で南北約210m、東西約150m、50m四方程の曲輪Iを中心とし、その周りを曲輪IIが囲んでいる。発掘調査によると、曲輪Iを囲む堀跡は幅9m、深さ6mで、曲輪IIは幅7m、深さ5mのいずれも薬研堀であった。曲輪IIは、南東部分に堀跡の喰違いが、北西部に堀跡の大きな折れが確認されることから、その部分が南北それぞれの虎口跡であったと想定される。

天正期の多賀谷氏と岡見氏の攻防に際して、天正15年(1587)に多賀谷氏が牛久城近くまで迫るときに「地号八崎地多賀谷取立候」(『岡見文書』)とあり、岡見氏方の牛久城を臨む地に、新たに築城されたことが分る貴重な事例である。(広瀬)

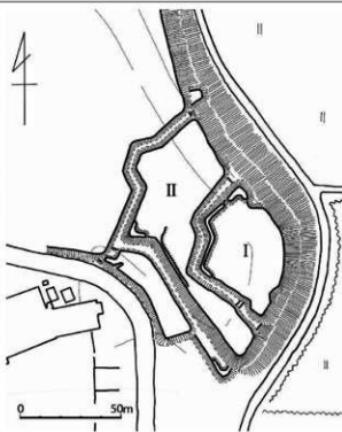


泊崎城跡復元図(『泊崎城址』を一部改変)

しもいわきふるだてじょうあと
0759 下岩崎古館城跡 つくば市下岩崎 現況：山林、畠地 別称：古館 地図 70

下岩崎古館城跡は、牛久沼に面した舌状台地の先端、標高 20m の台地上に位置している。規模は南北約 150m、東西約 100m である。曲輪は 2 つに分かれており、曲輪 I は、東側の牛久沼側で 50m 四方程の不整形で、曲輪 II は曲輪 I の南北、西側を囲む様に位置し、幅 7 ~ 8 m の堀跡がそれぞれを巡っている。堀跡には何か所か張出しを設けており、曲輪 I の南端には、櫓台状のものもあるなど、防御が強化されており、戦国時代でも新しい状況がうかがわれる。

この城館の存在を語る明確な文献史料は存在していないが、天正期の多賀谷氏と岡見氏の抗争に際して使用されたと想定される。『多賀谷家譜』に出てくる「岩崎城」がどの城かは明確ではないが、泊崎城（0756）が「岩崎東南」とされていることから、本城が岩崎城であった可能性もある。（広瀬）



下岩崎古館城跡縄張図 西山洋 2022.3.6

にちりんじょうあと
0760 日輪寺城跡 つくば市金田 現況：山林、畠地、寺社境内地 地図 57

日輪寺城跡は、桜川右岸の低位の段丘上、標高 7m に位置する。日輪寺境内の周囲を、高さ約 2m の土塁跡が東西約 70m、南北約 80m で巡っている。かつては、二重に堀跡が巡っていたとされるが、現状では確認できない。これらの土塁跡や堀跡の痕跡が、寺院としてのものか、城館としてのものかは、明確ではない。

日輪寺は、かつて小田に創建され、その後、現在地に移転したとされる。現在でも小田氏との関係が分る、多くの中世文書を伝えている。（広瀬）



日輪寺城跡縄張図 西山洋 2021.4.6

やたべおおほりいせき
K064 谷田部大堀遺跡 つくば市谷田部 現況：山林ほか

地図 63

谷田部大堀遺跡は、谷田川と西谷田川に挟まれた標高 20~23m の台地上に位置する。両河川から入り込んだ支谷を結んだもので、長さ約 400m が確認されている。道を挟んだ南北側でも部分的に遺存していたが、国道 354 号バイパスによって破壊されている。付近に要害の地名があるが、関連は不明である。

堀跡は、幅 5m、深さ 1m 程度で、南北両側に土塁跡が遺存している。谷田部郷土資料館展示の谷田部城の絵図（製作年代不詳）にも描かれているものである。絵図では、谷田部城の南北にあり、南は境田付近に同様の堀跡が描かれているが、そちらは現況では確認できない。（広瀬）



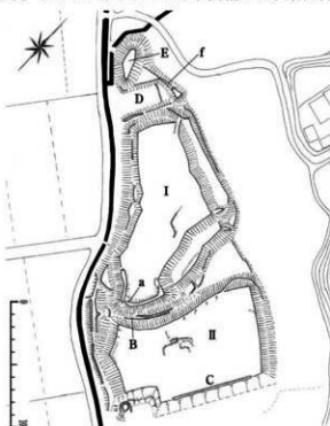
谷田部大堀遺跡縄張図 西山洋 2021.4.19

さんじょういんじょうあと
0763 三條院城跡 つくばみらい市板橋 現況：山林、畠地、宅地

地図 70

三條院城跡は、小貝川の左岸で谷津に挟まれた、標高 20m の独立した台地上に位置している。規模は東西約 300m、南北約 150m である。曲輪は大きく 2 つに分かれており、曲輪 I は、東西約 150m、南北約 80m と細長く、南北の B・D 部分で幅 20~30m と大規模な堀跡で区画している。また、地続きとなる南側は、高さ 3m 以上と大きな土塁跡で更に遮断している。北東側の腰曲輪やその下段には、地割りから堀跡を巡らせていた可能性がある。曲輪 II は東西約 80m、南北約 120m で東端は削平されている。西端の E 部分には、浅間神社が位置しており、小曲輪となっている。

城主については、室町時代から戦国時代頃に、中山三條郷という公家が京都から下り、この地の領主となって構えた城と言われている。『多賀谷家譜』には、天正 15 年（1587）の多賀谷氏の足高城攻めに際し、「到大田郷、構対城於金田」、「三陣者備金田為遊軍」とあり、金田の城が本城のこととて、この頃に築城ないしは改修された可能性がある。いずれにしろ堀跡の規模からは、多賀谷氏と岡見氏の抗争中に改修されていることは確實であろう。（広瀬）



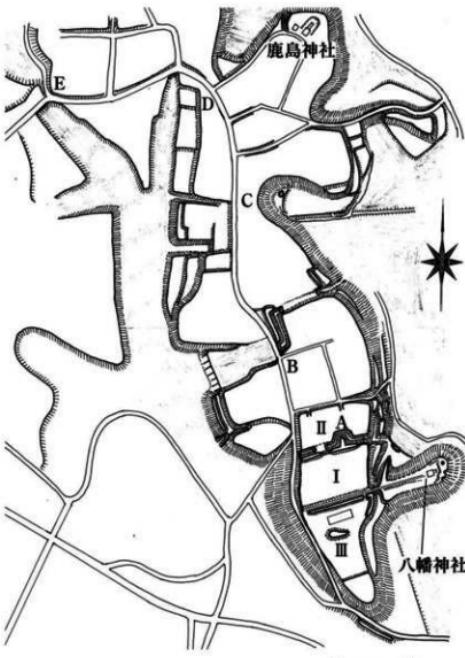
三條院城跡縄張図 岡田武志 2016.1.5
(『続茨』より転載)

足高城跡は、小貝川と牛久沼に挟まれた標高20mの舌状台地上に位置する。Cの部分にもかつて堀が遺存していたとされており、この堀跡までとすれば、規模は、南北約550m、東西約400m程である。

曲輪I付近が主郭と推測され、八幡神社との間には、明確な堀跡が見られる。また曲輪Iの南側には土壘の痕跡と思われる土盛りが部分的に遺存しており、ここまでが曲輪Iであろう。B付近には屈曲した堀跡が明確に遺存しており、この付近までが曲輪IIであろうか。

城主については、天正8年(1580)には「尾上中務少輔」(『多賀谷家譜』)とあり、岡見宗治である。岡見宗治の子孫は、後に紀州徳川藩に仕えたことにより、足高岡見氏に関する史料が残されている。

天正14年(1586)には、多賀谷重経が小張城を落城させ、板橋城(0764)と足高城



足高城跡概念図 2004.10 余湖浩一

を攻めている。足高城は落城寸前となるが、北条氏からの援軍として布川城主の豊島氏や、小金城主の高木氏などの派遣により持ちこたえたとされる(『多賀谷家譜』)。その後、天正15年(1587)には、再度、多賀谷重経によって、板橋城・岩崎城が落城させられ、足高城も落城、城主岡見宗治は、牛久城に逃げ延びている。

また、史料には「攻足高入三丸」(『多賀谷家譜』)とあることから、すくなくとも、3つの区画にわかれ、最外郭が三之丸だったと思われる。また、城攻めの様子として、天正14年(1586)には、本丸を目指す多賀谷軍が、本丸南西の間道から崖を登って攻め込む様子や、天正15年(1587)には、足高城の西側にあった「破綱川堤」、水をたたえて援軍を断つ様子が描かれている(『多賀谷家譜』)。後に作成された家譜ではあるが、足高城攻めがかなりの激戦であったことを物語っていよう。(広瀬)

いたばしょじょうあと
0764 板橋城跡 つくばみらい市板橋 現況:畠地、宅地

地図 70

板橋城跡は、小貝川の左岸、谷津に挟まれた標高 21m の舌状台地上に位置する。現況で遺存状態が悪く、城館の状況は明確には確認できないが、『重要遺跡調査報告書 II』によると、南北約 180m、東西約 170m で、およそ、3 つの曲輪に分かれていたようである。台地の先端部に本丸、西側に二の丸、その外側が三の丸とされているが、宅地化が進み現況では確認できない。

城主については、天正 8 年（1580）には「月岡玄蕃」（『多賀谷家譜』）であったことが分かる。板橋城は、天正 14 年（1586）に多賀谷重經に攻められ持ちこえるものの、天正 15 年（1587）にも再度攻められて、同氏に降伏し開城している。（広瀬）



板橋城跡略測図（『重要遺跡調査報告書 II』より転載）縮尺不明

おひぞりじょうあと
0765 小張城跡 つくばみらい市小張 現況:山林、畠地、宅地、公共施設他

地図 70

小張城跡は、小貝川の左岸、標高 18m の台地上に位置する。現況で遺存状態が悪く、範囲も明確ではないが、北に入る a の谷津と東側の b の堀跡で区画され、南端の小張小学校も含めた部分が最大での城館の範囲と考えられ、南北約 600m、東西約 450m である。

内部は、どこが中心かもはつきりせず、南端の小張小学校、微地形で最も高く地割りが方形にまとまる c 付近であったとの説がある。町道 1560 号線整備に際した発掘調査で、幅 4 m の堀跡や、15~18 世紀の遺物が出土している。

城主については、天正 8 年（1580）には「只越全久」（『多賀谷家譜』）であったことが分かる。天正 14 年（1580）には、多賀谷重經が只越全久を殺して小張城を落城させている。慶長 8 年（1603）には松下重綱、その後幕府代官の伊奈忠治、石川秉政が、天和 2 年（1682）まで、小張に拠点を置くが、小張城を使用したかは明らかではない。（広瀬）



小張城跡縦張図 西山洋 2021.6.21

0766 筒戸城跡 つくばみらい市筒戸 現況：山林、畠地、宅地、畠地

地図 69

筒戸城跡は、小貝川右岸の谷津に挟まれた、標高17mの舌状台地上に位置する。現況で遺存状態が悪く曲輪Iのみ城館として認識できるが、かつては、曲輪IIを区画する堀跡も遺存していたようで、範囲は東西・南北約450mである。

曲輪Iの北西を画する土壘跡a・bは良く遺存しており、その外側には堀跡の存在が想定される。また、北東を画する土壘跡cと、現況は道となる堀跡も良く遺存する。曲輪Iは平坦ではなく、台地先端へ緩やかに傾斜しており、低地との比高は2m程と低い。曲輪IIの区画は明確ではないようである。

城主は、相馬小三郎親胤（『多賀谷家譜』）で、天正17年（1589）に多賀谷重経に攻められ、南東2kmの距離にある守谷城からの援軍により、何とか堪え忍ぶことができたようである。本城は、守谷城の相馬氏の支城であったと思われる。（広瀬）



筒戸城跡縹張図 西山洋 2021.6.21

0767 守谷城跡 もりやじょうあと 守谷市本町 現況：山林、畠地

地図 70

城は、小貝川に向け樹枝状に開析する谷に面した台地上で、南西から北東にのびる台地を堀と土塁によって区切られる。周囲は沼沢地または湿地と想定され、往時は舟運による交通が可能であったと考えられる。

遺存するのは、台地基部の標高約21mの曲輪Ⅲ、続いて標高約25mで面積が最大の曲輪Ⅱ、更に先の標高約13mの曲輪Ⅰ、先端部の標高約17mの妙見曲輪の4か所で現在公園化されている。市街地化した曲輪Ⅲ以西の台地基部にも更に曲輪は存在し、城内跡跡の名称で数度の発掘調査が行われた。この城内地区と曲輪Ⅲ以北を城山地区とに分類し、前者を後北条氏支配下以後の兵の駐屯地とする説もある。城主に関しては、平将門の築城伝説もあるが、確実なのは鎌倉以来相馬御厨を支配した下総相馬氏で、後北条氏の支配下となる。天正18年(1590)以後、徳川領の城として沼尾氏、酒井氏が城主となり、天和元年(1681)廃城となる。公園内の堀と土塁の遺存状態は良好で、戦国期下総国北部を代表する城郭である。(比毛)



守谷城跡縄張図 岡田武志 2006.1.16
（『結城』上巻軸）

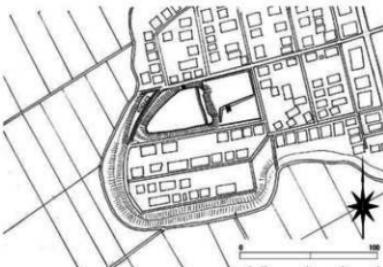
こうややかたあと
0768 高野館跡 守谷市けやき台 現況:宅地 別称:今城、今城遺跡 地図 69

城は利根川に面し、現在の高野集落のある微高地を望む台地上で、標高約20mを測る。往時は舟運で利根川に出ることが可能であったと考えられる。現在、台地端部が公園化する以外はその大部分が宅地化している。公園内には一部に土壙状の高まりが見られるが、城に伴うものかは確認できない。一部、発掘調査も行われている。

宅地化以前は、この地には舌状台地を堀で区切った3か所の曲輪が存在していた。城の範囲は非常に大規模なもので、約500×300mの東から西に延びる台地全体が範囲であったと推定される。

工夫のない堀のあり方から南北朝期に南朝方として存在した城との説もあるが、史料で確認されるのは戦国期鰐川図書助宛の「足利高基感状」で、内容は「高野要害」での戦功を賞するものである。

現在、城域のほとんどが宅地化した中で、公園化された一部に昔を偲ばせる城跡である。(比毛)



高野館跡縄張図 本間朋樹 2016.11.23 (『続茨』より転載)

おおののかじょうあと
0770 大鹿城跡 取手市白山 現況:公共施設地 地図 77

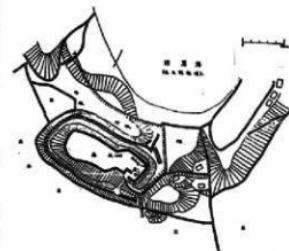
大鹿城跡は、南側に利根川を望む三方を谷津に囲まれた標高約22mの舌状台地に位置する。

城跡は、調査が行われず競輪場や宅地開発が行われたため詳細は不明である。しかし、昭和47年(1972)に現地踏査した記録があり、それを引用する。「(本丸は) 東南から北西へ向かって突き出た台地上に築かれ、長軸線もその地形に対応する。長軸で約95m、短軸で約27.5mから約24m、長軸線上の中央で土壙がずれを生じているものの、ほぼ長円形をなしている。郭内は平らで周囲を土壙がめぐり、東南部分に虎口を設けている。土壙は郭内で比高約2.5mから約1.5mほどであり、虎口近辺が高い。虎口前面には平坦部が設けられており、その南側は急傾斜して堀に連続する。堀は、東側および北側に明瞭に残っており、北側の堀は北西に向かって緩傾斜をなし、西側の堀跡に連続する。堀は東側で幅約7.5m、深さ約1.9m、北側で幅約6.5mから5.6m、深さ約2mの規模をなす」とある。

平成6年(1994)には、二曲輪の一部が調査され、堀(上端幅約7m、深さ約2m)、地下式坑3基が確認されている。

大鹿城跡は、直接的な資料がない。参考資料としては『利根川図志』と『相馬伝説集』がある。いずれも城主は、大鹿左衛門とするが、この人物の詳細は不明である。

(千葉)



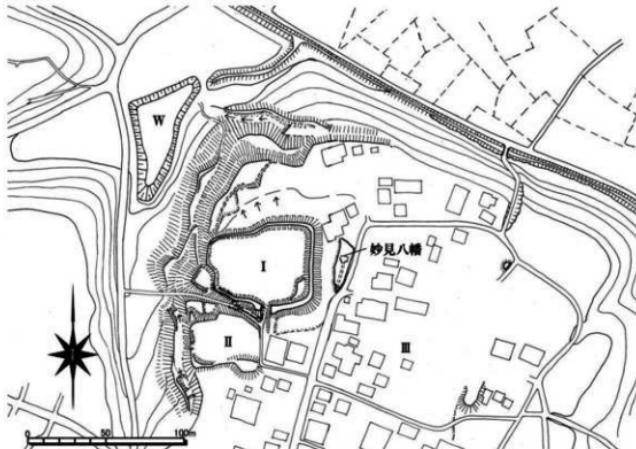
大鹿城跡縄張図
(発掘調査報告書より転載)

下高井城跡は、北側に小貝川を望む標高約11~21mの舌状台地に位置する。

下高井城は、南北方向に3つの曲輪があり、中央の曲輪が曲輪Iとなる。曲輪Iは、南北約65m、東西約45mの方形を呈し、四方は土塁で囲まれている。土塁の東南部は櫓台となっている。南と西に虎口があり、西虎口は通路状遺構を経て曲輪IIへ、南虎口は幅約8.5mの堀を介して、曲輪IIIへ接続している。曲輪IIは、土塁等の遺構は消滅しているが、東側から北側にかけて、曲輪Iから続く土塁や堀が巡っていたものと想定される。曲輪IIIは、西と南に土塁と堀が認められる。この土塁遺構の東端部には櫓台が設けられている。さらに、曲輪IIIの北西斜面部には平場が築かれており、井戸跡が確認されている。

平成2年度には、城跡公園の整備に伴い、曲輪Iから曲輪IIIにかけてトレンチ調査が行われた。曲輪Iは、近現代の耕作のためにほとんどの遺構が失われており、一部で掘立柱建物跡、建物状遺構、地下式坑などが確認されるに留まった。曲輪IIでは明確な遺構ではなく、曲輪IIIでは堅穴状遺構や土坑などが確認されたが、遺構の性格は明らかになっていない。遺物は、16世紀前半から第3四半期のものが中心とされ、15世紀前半のものが散在してみられている。

下高井城は、「北相馬郡誌」、「日本城郭体系」によると伝承として「長治年間(1104-06)に信太小次郎重国が信太郡に移り築城し、相馬氏を名乗ったのが始まりだ」と言われている。その後、天正年間(1573-92)まで子孫が跡を継ぎ、相馬氏から高井氏に名を変えてこの高井地方を治めていたが、高井胤永が北条氏に味方したため豊臣氏に滅ぼされた。しかし三男の胤正の子孫が横瀬伊勢守保広と名乗って江戸時代の前まで高井城に居城していたが、徳川氏の世になり廣瀬氏と改め帰農した」と記されている。だが、高井城の直接的史料はなく、伝承を裏付けることはできない。(千葉)



下高井城跡縄張図 本間朋樹 2003.6.18 (『改茨』より転載)

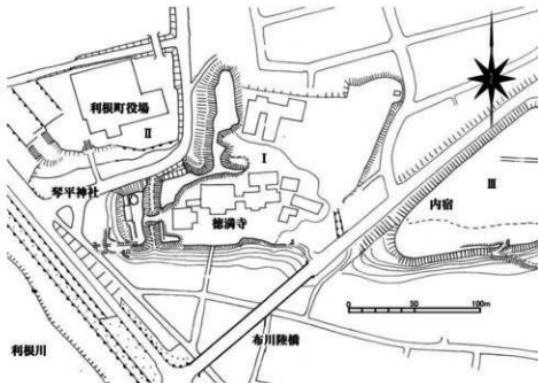
布川城跡は、利根川の左岸、標高 17m の独立した台地上に位置する。徳満寺が位置する曲輪 I 付近を除き、現況で遺存状態が悪く、城館の範囲が明確ではない。利根町役場付近や、その北東側に連続する台地も、最終期には城館の範囲であったと想定される。図で曲輪 III としている台地とは、かつて谷津により区切られていたようだ。

曲輪 III 全体を加えると、あまりに広大になり、全てが城館の範囲であったとは考えがたい。

曲輪 I の西側と北側の現在の道路は、一部で曲輪を削平しているものの、およそ堀跡と考えられ、その内側に高さ約 3 ~ 4 m の大規模な土壘跡を巡らせている。琴平神社の位置する部分は、曲輪 I と幅 20m 程の堀跡で区画して一部を土橋でつなげており、その規模からも馬出であったと思われる。曲輪 I は、徳満寺の裏で、低い土壘跡が遺存しており、少なくとも 2 つに区画されていたと思われる。

関東八州諸城覧書に「ふ川之城 十島 百五十キ」(『毛利家文書』)とあることから、豊島氏の城館であったと思われる。豊島氏は、武藏豊島氏の流れであると思われるが、その来歴がはっきりしておらず、鎌倉公方の奉公衆であった、または千葉氏臣であったとされる。15世紀末～16世紀初頭には、布川を本拠としていたようで、明応2年(1493)相馬郡布佐(布川の対岸)での合戦で「豊島次郎左エ門」(『本土寺過去帳』)の戦死が確認できる。その後永禄3年(1560)に豊島頼継が「頼継寺」に土地を寄進したとされているが(『利根川図誌』)、同時代の史料が存在せず、明らかではない。天正14年(1586)に城主は「豊島三河守〔下総国布川城主〕」(『多賀谷家譜』)とされ、これは天正6年(1587)の豊島貞継過書に見える「豊島貞継」とされる。豊島氏は、天正前半頃からは北条氏の配下として、牛久城の在番等の北条氏の軍事動員に従うが、天正18年(1590)の豊臣秀吉の小田原攻めに際して、開城したと思われる。

その後布川城は、徳川氏の家臣であった松平信一の在城の後、関ヶ原の合戦後の慶長6年(1601)松平氏の土浦へ転出後に廃城になったとされ、廃城後の曲輪 I に徳満寺が移転したとされている。(広瀬)

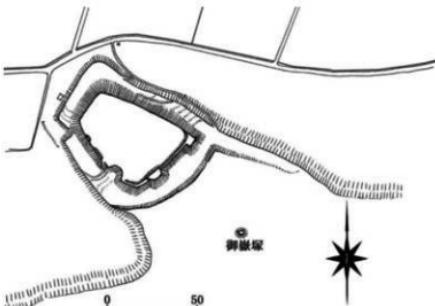


布川城跡縄張図 本間朋樹 2004.4.18 (『改次』より転載)

いわいじょうあと
0773 岩井城跡 利根町立木 現況：山林、畠地、宅地 別称：文間城 地図 78

岩井城跡は、谷津に挟まれた標高 20mの舌状台地上の先端部に位置する。範囲は東西約 80m、南北約 70mの単郭で、台地の連続部を幅 10~15m程の堀跡で区切ると共に、北西斜面部分には 2段に堀跡を巡らせている。台地連続部分は高さ 2 ~ 3 m の土塁跡があり、2か所櫓台状に張り出させており、その間の土塁跡が低いことから、その部分が虎口跡と思われる。50m程南東には、御嶽塚と呼ばれる高さ 3 m 程の塚があり、航空写真などではこれと連続する地割りも確認できることから、もう一段階、堀・土塁跡を巡らせていた可能性がある。

本城館に関する史料は残っていないが、形状からも戦国時代のものと推測され、布川城跡を本拠とした豊島氏と関係した城館の可能性がある。（広瀬）



岩井城跡縄張図 余湖浩一 2016.10 『続茨』より転載

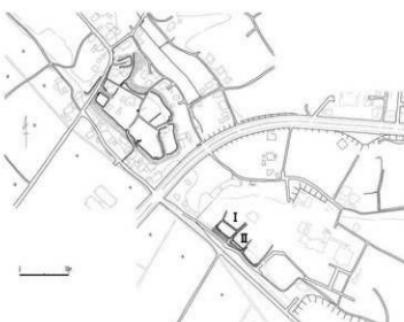
わかしばじょうあと
0778 若柴城跡 龍ケ崎市若柴町 現況：山林 地図 71

若柴城跡は、南側に低地を望む標高約 19mの台地上に位置する。

曲輪Ⅰが、一辺 20~25mの台形状を呈し、南辺には、低い土塁状の痕跡がある。その 2 m 下には腰曲輪がみられる。曲輪Ⅰの東側から北側にかけては、幅約 2 m、深さ堀約 1 m の堀が巡る。東側の堀には土橋があり、曲輪Ⅱへと続く。曲輪Ⅱは東西約 25m、南北約 50m の方形を呈する。

曲輪Ⅰの西側にも平坦部が広がるが、詳細は不明である。この部分の南西の台地際に沿って高さ約 2 m の土塁が残されている。

若柴城は、戦国時代に岡見頼忠入道伝喜の隠居所であったと伝えられているが、詳細は不明である。（千葉）



若柴城跡縄張図 西山洋 2021.12.30

りゅうがさきじょうあと
0777 龍ヶ崎城跡 龍ヶ崎市田町 現況：公共施設地ほか 別称：龍が峰城 地図 78

龍ヶ崎市域内の筑波稻敷台地の南端、小貝川に臨み南に向けて広がる低地や微高地上に、現在の中心市街地が形成されている。市街地北東の台地寄りに一つの独立台地が形成され、茨城県立竜ヶ崎第二高等学校があるこの地が龍ヶ崎城の跡である。城は、本来学校のある台地から東側の御嶽神社まで東西方向に一連の台地が続いている。この台地全体が城の範囲であったが、昭和50年代以前の宅地開発によって中間の台地は完全に失われ、低地と同じ標高まで削平されている。昭和30年代作成の都市計画図を見ると、この台地南側の削平が開始されて宅地が進出しているが、北側には堀や土塁の表現が残されている。大幅に現状を失ったこの城を復元するため、『龍ヶ崎市史別編II 龍ヶ崎の中世城館』の成果に依拠したい。

同書によれば、城の曲輪構造は東西に御嶽神社のある台地東端の曲輪1、中央の曲輪2（消失）、竜ヶ崎二高のある面積が最大の曲輪3が軸をそろえて直線状に配置されるものである。昭和30年代の都市計画図では、曲輪1の敷地は本來南西側に敷地がより広範囲に広がっていたが現在は削平で失われている。曲輪からの眺望が良いため、望楼の役割を果たしていたと想定されている。神社の創建年代は不明である。更に堀に区切られ、土橋を介した西側には曲輪2が存在していた。推定で東西約80m×南北約100mの方形に近い平面形で、高さは御嶽神社付近より約1m低い。東側には土塁が無く、西側に向けて大規模な土塁を構築しており、城の中でも核的な曲輪であったと想定される。曲輪3は東西約250m×南北200m程で、北側には更に東西約100m×南北70m程の緩斜面が続き、土塁や空堀で仕切られた別の曲輪と想定されている。現在、竜ヶ崎二高に登る南側の坂を富士見坂と呼ぶが、これも城への進入路の一つである。古絵図などによると、城のある台地の東・北・西側の据には水堀が巡っており、低地部分にも更に曲輪が存在していた。城下には西側に根町、南には田町・横町と続くと更に東西方向に現在の駅前通りに接続する。これらの町場は龍ヶ崎城の機能した時期から存在していたと考えられる。

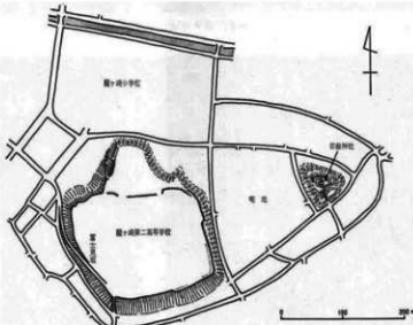
城主については、一次資料が無く不詳である。室町期の文献に龍崎氏の存在があり、城が築かれた可能性があるが、明確なのは江戸崎土岐氏が戦国後半に活動を活発化するのに伴い、当主土岐治英の二子胤倫が龍ヶ崎城

に封じられて以後である。天正

18年(1590)の土岐氏滅亡後、
土岐領は佐竹氏傘下の芦名義
広の領地となるため、この時期
に龍ヶ崎城も手が加えられた
可能性がある。

近世に入ると、龍ヶ崎城は廢
城となり、市域は仙台藩領の飛
び地(1万石)となって城の北
側にあたる現在の龍ヶ崎市立
龍ヶ崎小学校の地に陣屋が置
かれた。

(比毛)



龍ヶ崎城跡縹張図（『龍ヶ崎市史別編II 龍ヶ崎の中世城館』より転載）

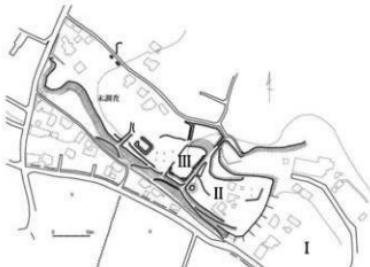
0779 駒馬城跡 龍ヶ崎市駒馬町 現況：山林、畠地 別称：駒馬沼田城、河内郡駒馬楯 地図 71

駒馬城跡は、南側に低地を望む標高約 20m の台地上に位置する。

東西に細長い台地の東端部に曲輪 I があり、西に向けて、曲輪 II 、曲輪 III と構成されている。

古地図によると、曲輪 I は 50m 四方を超えるものであったようであるが、現在台地先端部は、失われている。曲輪 I 東南部には櫓台と想定される高まりがあり、周囲は曲輪 I より低くなることから、この櫓台は曲輪 II と位置付けられている。ここには現在「駒馬城の碑」石碑が建てられている。曲輪 II の西側には堀を介して曲輪 III がある。曲輪 III は、東西 25m 、南北 40m の長方形を呈し、北部にわずかな土壘状の高まり、南部には腰曲輪がある。その他、南西部には堅堀状の虎口も存在する。曲輪 III の西側は、普賢院跡や八幡社などの宗教施設が所在した。

駒馬城は、康永 3 年・興国 5 年（1344）に南朝方の春日頼国が立て築いた「駒馬沼田城」に比定されており、県指定史跡となっている。しかし、駒馬城は、暦応 4 年・興国 2 年（1341）秋の北朝方の攻勢により、南朝方が「河内郡駒馬楯」を引退したと記す資料があり、そして康永 3 年には北朝方の宍戸朝里により攻略されたようである。県指定史跡「駒馬城」と文献資料にみる「駒馬城」についての検証は、今後の課題といえる。（千葉）

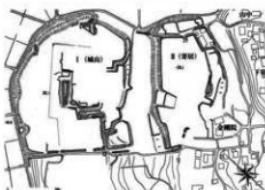


駒馬城跡縄張図 西山洋 2022.2.21

0781 貝原塚城跡 龍ヶ崎市貝原塚町 現況：山林、畠地 別称：高井城 地図 71

貝原塚城跡は、三方を低地に望む、標高約 26m の舌状台地に位置する。

舌状台地先端部から南へ約 250m に台地を横切る道があり、堀と考えられている。この南の堀の東端部から北東に長さ約 50m 、幅約 5・6m の堀がみられ、途中で堅堀に接する。この堀は、約 50m で北西に折れ、北側にも並行して堀が存在するために二重堀となる。二重堀の間には上幅約 2m 、長さ約 30m の土壘があり、北西端部が約 6m 、長さ約 12m を測る櫓台となっている。この二重堀の南が曲輪 I 、北が曲輪 II となり、間の土壘や櫓台からは両方の曲輪が一望できる高低差がある。二重堀の間の櫓台には、北側の曲輪 II へつながる木橋が存在した形跡がある。曲輪 II の二重堀に面した位置に土壘がみられ、一部は櫓台となっている。一方で、曲輪 II の北東部の台地先端には、櫓台と共に幅約 8m の通路を兼ねた堅堀が見られる。この堅堀から南東約 50m の位置に枡形や腰曲輪がある。また、城跡の南東部には街道と町場が形成されている。貝原塚城跡の城主についての詳細は不明であるが、小田氏直や土岐氏の家臣諸岡長門とする説がある。（千葉）



貝原塚城跡縄張図 岡田武志 2006.1.30
〔改次〕より転載

やしろじょうあと
0780 屋代城跡 龍ヶ崎市城ノ内五丁目 現況:宅地、公共施設地 別称:八代城 地図71

屋代城跡は、三方を低地に望む標高約25mの台地上に位置する。

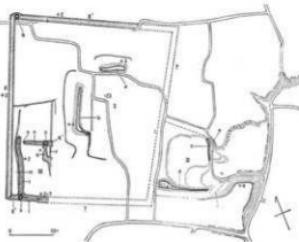
屋代城は、竜ヶ崎ニュータウン造成工事に先立ち昭和58年(1983)から発掘調査が行われ、城跡の構造が明らかにされてきた。長さ210m、上幅6m、堀底幅1.5m、深さ2mの箱堀が西側で確認され、北側や南側で同規模の堀の一部がみられたことから、長さ200m前後の堀で囲まれた方形館と想定されている。

この堀で囲まれた内部に、曲輪Iと曲輪IIIが確認されている。曲輪Iは、長さ約30m、高さ約3mの土塁、長さ約50m、高さ約4mの土塁、土塁の外側には堀跡と思われる窪地が存在し、一辺50~80mの方形曲輪と考えられる。屋代城の中心的な曲輪と想定されるが、建物等の遺構は皆無であった。

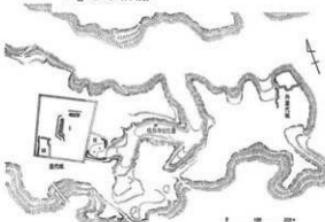
曲輪IIIは、曲輪Iの南西にあり、土塁はみられないが、発掘調査によって堀で囲まれる空間が確認された。南は方形館の堀となるが、箱堀から薬研堀に拡張されており、そこから直交して規模を縮小させ西の堀となる。西の堀は70mほどで途切れ、約3mの土橋を経て、直交して北の堀となる。北の堀は、約25mで障子堀となり、ここから東に薬研堀で囲まれた長方形の空間が構成される。この空間は、出升形や横矢をかけるための張り出し、あるいは櫓台とも考えられている。曲輪IIIは、屋代城の南西部の防衛を強固にするための施設と想定される。

曲輪IIは、屋代城の東側にある谷につながる位置にあり、複数の沢も確認されている。この沢を囲むように、曲輪IIの東と南に土塁が構築されている。南の土塁は、約50mで、沿う形で堅堀がみられる。土塁の西端は櫓台となる。東の土塁は約30mが現存するが、南の土塁とつながり、沢全体を取り囲む構造であったと思われる。曲輪IIは、緩やかな傾斜で城内へ向かう場所を遮断する目的で構築されたと思われるが、台地上ではなく沢という緩斜面に構築されている点に特徴がある。この意図の解明は、今後の課題といえる。

屋代城から東へ約800mで台地は終わる。この台地先端には、外八代城が築城された。外八代城は、築城された位置から屋代城との関係が考えられており、①本城と支城、②当主と隠居或いは嫡子と庶子、③先行城と後繼城、④一方を攻略するための足掛かりの城などの推測が提示されている。(千葉)



屋代城跡縄張図 藤本正行(『龍ヶ崎市史別編II』より転載)



屋代城跡及び外八代城跡の位置図 藤本正行(『龍ヶ崎市史別編II』より転載)

0782 いだみじょうあと 龍ヶ崎市泉町 現況：山林、宅地

別称：根小屋城、東条城、本郷カラメ遺跡

地図 71

泉城跡は、北側に小野川を望む標高約 11m の台地上に位置する。

舌状台地の突端に個人宅を囲むように土塁があり、曲輪 I と曲輪 II を分けている。曲輪 II の南には堀跡と想定される道を挟み、曲輪 III となる。曲輪 III の南部には、高さ約 2 m、上幅約 2 m を最大とする土塁があり、この土塁から南西の場所にも低い土塁や浅い堀が部分的に見られる。

泉城は、東条氏の居城と伝えられ、16世紀中頃に東条重定は土岐氏に所属して小田氏治と交戦して討死したとされる。それにより、泉城は廃城になったという。泉城から見て谷津を挟み東の舌状台地には、宝泉寺城がある。泉城と宝泉寺城は位置的に関連がある城館跡と考えられ、土岐氏の管理の下に、小野川中流域の拠点として存在していたものと思われる。(千葉)



泉城跡縦張図 西山洋 2021.12.30

0783 ながみねじょうあと 長峰城跡 龍ヶ崎市白羽三丁目 現況：山林、公共施設地

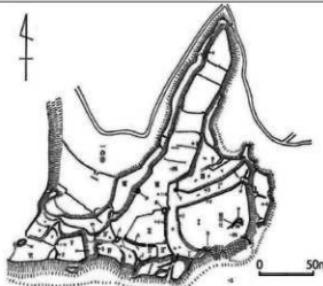
地図 71

長峰城は、小野川により開析された船敷台地の南縁に所在する。北側から小支谷が展開しており、「宿一ノ谷」、「宿ニノ谷」の小字がある。その東側に所在する標高 25m の台地にある「竜ヶ井」周辺が城郭部分に該当すると想定され、その規模は南北 230m、東西 250m の範囲に及んでいる。現在は西部分が住宅地、東部分が長峰東公園として整備されており、平成 8・12 年に発掘調査が実施されている。

調査では、7つの曲輪、2つの腰曲輪、5条の堀跡、3条の土塁、3か所の土橋跡などが確認されている。主郭である南東側の曲輪 I は、南北 50m、東西 70m の長方形を呈し、北および西側

には堀が廻っている。南、北東側に虎口があり、南側の土橋を経て曲輪 II に至る。主郭の北側は曲輪 III があり、一段上ったところある狹長な曲輪 VII は舌状台地を利用して構築され、東西には帯曲輪がある。南西端には、堅堀によって区画される連結する小規模の曲輪 IV・V・VI が配置されている。

築城時期は、常滑産陶器などの出土遺物から 15~16 世紀であるとされ、城主については、屋代氏もしくは、大永 3 年(1523)の屋代合戦で勝利を手にした土岐原氏の家臣であると思われる。近世文書の「師岡家文書」には、土岐氏家臣「長峯民部 長峯村ニ住ス」との記録がある。(本田)



長峰城跡縦張図 藤本正行（『龍ヶ崎市史別編 II』より転載）

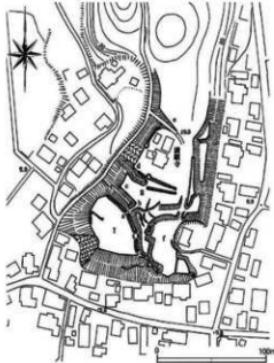
0784 登城山館跡 龍ヶ崎市半田町 現況：山林 別称：登城山城、半田城

地図 71

登城山館は、小野川により開析された稲敷台地の南縁にある突出する舌状台地に所在する。標高は 25m であり、低地を挟んだ南西 600m には長峰城が所在する。館内の北域には、建武 4 年(1337)に創建と伝承される満願寺がある。

主郭は南西側に位置する長軸で 60m の楕円形を呈する曲輪 I であると想定できる。その北東縁には、高さ 2m の土塁が残存している。その外側には、幅 8m、深さ 3m の堀が開削され、北東側の虎口 a は、土橋 b を経て曲輪 II に至る。堀は南東方向に延びて曲輪 I の南側で腰曲輪に繋がっている。曲輪 I の東側の 2 段下った場所には、腰曲輪 f が配置されている。

築城者は不明であるが、近世文書には、半田村には半田九郎左衛門などの土岐氏家臣が居住していたとの記録もあり、16 世紀代の勢力範囲から想定すれば、土岐氏家臣の居館であると思われる。(本田)



登城山館跡縄張図 岡田武志 2006.1.20
(『改茨』より転載)

0786 大日山館跡 龍ヶ崎市塗戸町 現況：山林

地図 71

大日山館は、小野川により開析された稲敷台地の南縁に所在する単郭式の居館である。東側には南北方向の谷津に面し、標高は 24m である。本館の南西側に「大日様」が祀られており、本館の名称の由来となっている。

曲輪の西側は、長さ 60m、幅 10m、深さ 4 m に及ぶ堀切を開削することにより、台地との分断を図っている。曲輪の規模は南北 90m、東西 50m であり、縁辺部には幅 4 m ほどの土塁が構築されていたと想定され、西側で比較的良好に残存している。「大日様」付近が本館の虎口であったと想定され、土橋や樹形状の地形が確認されている。また、曲輪を取り巻くように 2 段以上の帶曲輪が、もしくは腰曲輪が構築されている。

築城者は不明であるが、16 世紀代の勢力範囲から想定すれば、本館は土岐氏領内であったことから、土岐氏家臣の居館であると思われる。(本田)



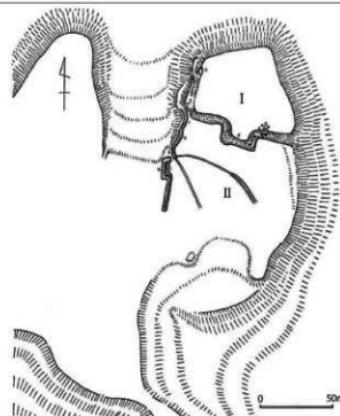
大日山館跡縄張図 余湖浩一 2016.10
(『続茨』より転載)

そとやしろじょうあと
0788 外八代城跡 龍ヶ崎市城ノ内五丁目 現況：宅地ほか 別称：外八代遺跡 地図 71

外八代城は、小野川により開析された稻敷台地の南縁に所在する複郭式の居館である。西側には南北方向の谷津に面しており、標高は24mである。その規模は南北170m、東西100mの範囲に及んでいる。本城の東約1.3kmに長峰城(0783)、西約0.5kmには屋代城(0780)が所在する。

曲輪I・IIの一部には現龍ヶ崎市立城ノ内小学校が建設されたため、土地の改変が著しい。かつては、横矢掛りの機能をもつ横堀があったとされる。曲輪IIの一部は残存しており、西側に堀などの城館施設の痕跡がある。

15世紀後半、屋代氏が八代城の支城として築城し、大永3年(1523)、八代合戦の頃に防御を固めるための改修した痕跡が出土した遺物から読み取ることができる。(本田)



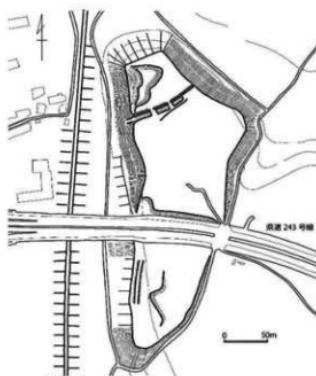
外八代城跡縄張図 藤本正行 (『龍ヶ崎市史別編』IIより転載)

0796 屏風ヶ崎城跡 龍ヶ崎市庄兵衛新田 現況：山林、畠地 地図 71

屏風ヶ崎城は、牛久沼東岸の標高25mの台地上に所在している。その規模は、南北450m、東西140mの範囲に及んでいるが、北西側の舌状台地先端部は、JR常磐線敷設により削平されており、東西方向には県道243号線が貫いている。県道より北側は、縄張図を作成した際には、東西方向の土塁および堀が残存していたが、現在は碎石敷の資材置き場となっている。

『岡見集覧』にある古絵図の写には、牛久城とその周辺の城の配置が記されている。絵図の「今屏風ヶ崎と云ふ」の記載から、この地が比定できる。

本城は、北側の遠山城(0803)、南側の八幡台城(0791)とともに北西700mに所在する岡見氏の居城である牛久城を防衛する城館群であると想定される。(本田)



屏風ヶ崎城跡縄張図 西山洋 2021.5.27

うしくじょうあと
0797 牛久城跡 牛久市城中町 現況：山林、宅地、荒蕪地

地図 71

牛久沼に東面し、突出する標高約 15m の台地端部に立地する。台地は東西二又に分かれ城は東側台地端部に位置する。西側台地南端には衛門曲輪が、北端には近世以後牛久藩陣屋が置かれた。

城は舌状台地の基部に大手門（字「戸張出口」）を設け、以南を堀と土塁で台地を区切る。字は「谷田部宿」「城中町」を経て「中城」「木戸口」に至るが、南端の字「城山」の最南端曲輪 I が中心と考えられる。曲輪 I の北側には曲輪 II、北西に曲輪 III を配置するほか、東側低地の字を「根小屋」と称する。根小屋周囲から大手門に至る広範囲に堀を巡らせ、大手内部に町場を配する点は戦国末期に造営された本格的な惣構を推定させる。

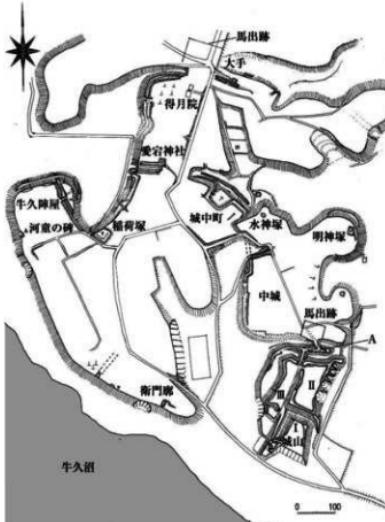
永禄 9 (1566) 年『上杉家文書』の「小田氏治味方地利覚書」に「岡見山城守」の城として記載があり、天文年間後半(1550 年前後)の佐竹氏の南進を契機に築造されたと考えられている。佐竹氏と結ぶ多賀谷氏の南進が激しさを増し、元亀元年 (1570) 有力支城の谷田部城の開城後、岡見氏は後北条氏と結んだ。その結果、後北条氏は牛久城の防衛のために北下總周辺の領主層〔小金城主高城氏 (松戸市)、布川城主豊島氏 (利根町)、矢作城主国分氏 (佐原市)、坂田城主井田氏 (横芝光町) など〕を、輪番制の在番衆 (牛久番) として送り込み、防備を固めた。

天正 18 年(1590) の豊臣勢力の関東進出後は、岡見氏は没落し牛久城は開城したと思われる。その後、上野金山城主の由良国繁が城主になるが、元和 9 年(1623) の改易後に牛久城は廃城になる。天領後に寛永 5 年 (1628) 山口氏が陣屋を築いた。

城の中城に位置する明神遺跡では、平成 25 年 (2013) に発掘調査が行われた。調査では、15 世紀後半を始めとし、16 世紀前半から 17 世紀初頭をピークとする遺物が多数出土する。台地を縦横に区切る薬研堀と多数の柱穴・土坑が密集する状態が確認され、掘立柱建物 18 棟や地下式坑 9 基などが検出された。調査区は城山の曲輪 I ~ III の北側前面の曲輪であるが、茶白・天目などの茶道具や青花・青磁・白磁などの中国産の陶磁器も出土する。他方では、火葬遺構や石塔など葬送に関する遺物や遺構が見られる一方、日常生活に関する内耳土鍋やすり鉢などの煮炊具・調理具や食用に供した貝が多数出土する点が特徴といえる。

大手門周辺部が、市史跡「牛久城大手門跡」に指定されている。集落を含めた惣構を形成し、土塁や堀を大規模に築城した遺存状況の良い城である点、文献により後北条氏の境目の城であったことが明確であるなど、県南部を代表する戦国城郭といえる。(比毛)

牛久城跡縄張図 余湖浩一 2004.9
(『改変』より転載)



とうりんじじょうあと
0798 東林寺城跡 牛久市新地町 現況：山林、畠地

地図 70

城は、牛久城の西隣という極めて近接した位置にあり、稲荷川と牛久沼に挟まれた標高約20mの舌状台地上に立地する。台地下は、往時は牛久沼に囲繞され沼沢地か湿地であったと思われる。南北に延びる台地を区切る形で東西に堀を複数配置し、区切られた内部を曲輪にしている。

台地最南端に曲輪Iがあるが、後世の削平によってその大部分は失われている。堀を境に曲輪IIがあり、字をミショウという。曲輪IIと曲輪IIIの間は西側からの堀が台地中程まで延び、境界部には馬出の跡が観察される。その北の曲輪IIIが最大の面積をもち、現在南側に東林寺がある。曲輪IIIの北に堀と土塁を挟んで曲輪IVがあり、曲輪IIIには堀の中程には横矢を意識した馬出状の突出がみられ、曲輪IVにはそれに対応する凹みがみられる。この突出に東側に虎口と馬出跡が残る。曲輪IVの北側にも直線的で最も東側で折れをもつ堀が見られる。

城主は、『上杉家文書』における永禄9年(1566)の「小田氏治味方地利覚書」には、近藤治部(木原城主近藤氏の一族か?)とあるが、天正10年代(1582-91)の「岡見氏本知行等覚書写」では牛久城主の岡見氏の持城となっている。また、永禄7年(1564)2月9日には近在の小茎東林寺に「河田長親制札」が出され

ており、小田城の攻撃時に上杉軍が東林寺近辺を陣所としていた可能性が高い。天正年間の後半には牛久城に後北条氏によって下総国北部の諸領主層が在番衆として派遣されたが、東林寺城もこの牛久城と密接な一体性を持っていましたようである。東林寺城の構造は、在番衆井田氏の居城坂田城(横芝光町)に類似し、在番衆は東林寺城を利用したとの説もある。

城の周辺には、「大堀」「身上」の小字が残る。曲輪3にある東林寺には、総高170cmを超える16世紀代と思しき花崗岩製石造五輪塔2基(市指定)がある。

曲輪の規模が大きく、堀も地点により深さ10m以上を測るなど、牛久城と一緒に後北条氏方の境目の城として戦国後期に本格的に營まれた城である。(比毛)



東林寺城跡縄張図 余湖浩一 2004.9 (『改変』より転載)

城は、小野川左岸で標高約20mを測る、北東から南西に続く台地上に立地する。この台地に川に向けて開口する樹枝状の支谷が3か所で大きく入り込んだ結果、2km程の範囲に各々が舌状台地を呈し、それらに城郭遺構が点在している。これらを総称して岡見城として報告する。城の周辺には「城山」「城山下」などの小字も残る。

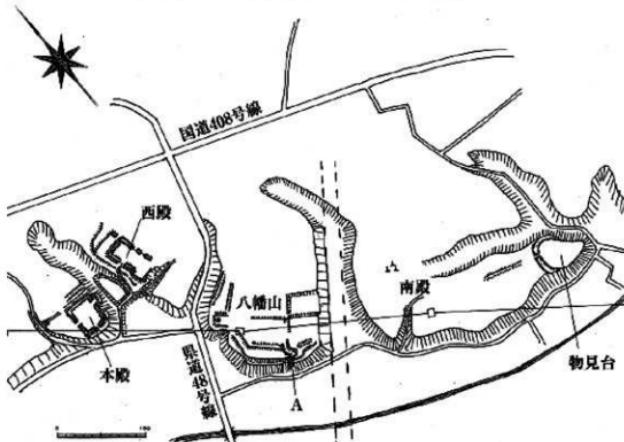
最も西には本殿とよばれる約70×80mの方形短郭の館跡と、谷を挟んで西殿という約60×80mの長方形の館跡が残る。これらを岡見氏初期の館跡とする説がある。

更に東には2つの支谷に挟まれた八幡山と呼ばれる地区がある。台地斜面には切り通しの虎口や腰曲輪を確認できるが、上方の平坦面にはあまり遺構が確認できない。

最も東側には、南殿という台地東南端部に堀で区画された一画がある。直径80m程の平坦面で自然地形に余り手を加えていない実情から東南方向に対する物見台との説がある。

天保年間の古絵図によると、上記の本殿、西殿、南殿には古城に関する記述があるが、八幡山には触れられていない。

岡見城のある河内郡岡見郷は、小田氏一族の岡見氏発祥の地とされる。岡見氏の初期は具体的な史料が乏しく不明な点も多いが、15世紀以降信太莊を喪失した小田氏が、境界を固めるために領土の南西に一門を配属した可能性が想定される。岡見氏が初期の居城として方形館を基本とした岡見城に拠り、戦国期に更に西方に進出して牛久城を居城としたと仮定すると、小規模な単郭から台地を大きく区切る堀と土塁を多用した本格的な城郭への変化は城館史と比べても矛盾はない。15~16世紀の常陸の戦国史に活動が確認される岡見氏の実情を伝える城として、岡見城跡はその本貫地に営まれた根拠地として重要な意味を持っている。(比毛)



岡見城跡縄張図 余湖浩一 2004.9 (『続茨』より転載)

城は、小野川左岸の岡見城と同一台地を南西に約2km下り、小坂町の旧集落と小高団地の中間やや団地寄りの標高約17mの台地端部に位置する。北側には北西から南東にかけて、旧鎌倉街道が現在も道を伝えており、交通の要衝の地に面した地に当たる。

小坂城以東や南方には下小池城や久野城、泉城など江戸崎土岐氏に関わる城が点在しているが、この城の主は『小田家風記』に「岡見備中守」の名が記されていることから岡見氏の一族で、岡見領の東の境界に位置する城と考えられる。

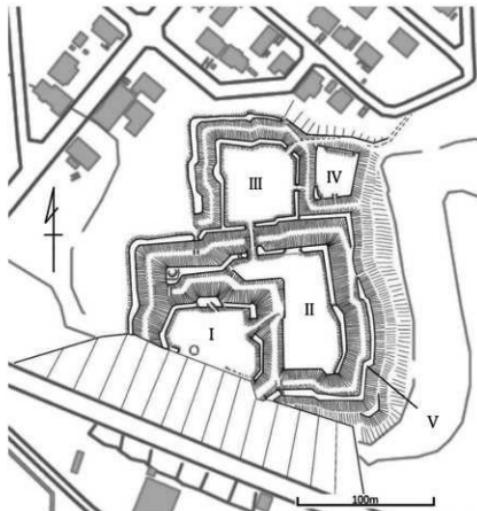
曲輪の構造は、台地端部の曲輪Iを主郭とし、その北東に鍵の手状の曲輪II、更にその北側に大型の馬出状の曲輪III、曲輪IIIの東側に小型の補助的な曲輪IVを配する。曲輪IIの南東側には、鍵の手状に腰曲輪が配され曲輪Vと認められる。小規模ながら防御性に特化して複雑に造営されていることから、岡見氏にとって牛久城に次ぐ重要な拠点の一つであったと想定される。

昭和54年(1979)に曲輪Iの南側約3分の1を削る県道(現国道408号線)工事に伴い、発掘調査が行われた。グリッドとトレンチを設定したこの調査では、在地土器ではかわらけ、内耳鉢、鉢鉢、瀬戸美濃系と思しき皿(写真より判別)、常滑、鉄片(槍先?)、炭化米などが出土した。遺物のほとんどは本丸グリッドからの出土で15世紀後半から16世紀と考えられる。

平成20年(2008)には、城跡全体の詳細な微地形情報と計測する三次元測量調査や確認調査が行われた。

調査の結果、(1)曲輪Iにて堀廻転用の土器や焼土遺構が確認できたことから、小規模ながらも鍛冶施設を有し、何らかの金属製品を製作していたこと、(2)2回の建替えを想定させる柱穴が検出されたが火災などの痕跡は見られなかったことから、小坂城は短期ではなく一定期間機能していたことなどが明らかにされた。

現在、城跡は平成18年(2006)に市史跡の指定を受け、公園化されている。土塁や堀の遺存状態は良好で、緑と共に市民の憩いの場として整備されている。(比毛)



小坂城跡縦張図 本間朋樹 2014.11.02

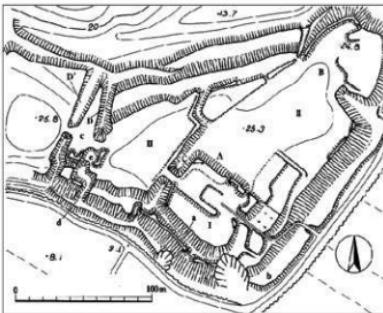
くのじょうあと
0800 久野城跡 牛久市久野町 現況：山林 別称：上久野城跡

地図 71

城は、乙戸川の左岸の標高約24～25mの台地上、牛久大仏の南側に位置する。乙戸川に向けて開口する樹枝状の支谷が台地北側まで回り込み、舌状台地を呈する間に土塁や堀が曲輪を区切る形で配置される。

城の構成は、台地南端に曲輪Iを配し、東北側に曲輪II、南西に曲輪IIIを置く。曲輪I～IIIの台地斜面には腰曲輪や横堀が配置され、旧状を伝える。曲輪IIIの西側には二重の堀を配置し、馬出状の虎口を呈しているが、後世の改変の説もある。この部分の南側台地斜面には急坂で堅堀状の道が低地から続き、樹形を経て大きく東に屈曲して曲輪IIIに至る。

この城は、江戸崎城(0834)を本拠とする土岐氏が、有力支城である木原城(0829)と龍ヶ崎城(0777)の中繼拠点として築いたものと言われる。久野観音寺に残る永禄2年(1559)と天正5年(1577)の棟札に、久野郷領主として土岐越前守の名が記される。同氏は土岐氏の分流で、乙戸川流域の下久野城・福田城・下小池城などと共に土岐領の西側の防備を担ったと考えられている。(比毛)



久野城跡縄張図 西山洋 2004.4.06 (『改仄』より転載)

かつらじょうあと
0802 桂城跡 牛久市桂町 現況：山林

地図 71

城跡は、桂川左岸の台地上南端部に立地し、桂町と下吉原集落のほぼ中間、圈央道阿見東IC南側の位置に当たる。

標高約25～20mの台地端部から斜面にかけて、南北に2か所の曲輪状の平坦面が確認される。北側には土塁が北東面に確認され、西端にも堅堀や腰曲輪状の痕跡が見られる。南側は台地南側に腰曲輪や堅堀状の痕跡が見られるほか、平坦面上に櫓台状の高まりがある。東端に切通しの現道があり、ここから台地上に上る道筋には土塁状の高まりが確認される。

桂城は、土岐氏の有力支城木原城(0829)と龍ヶ崎城(0777)を結ぶ街道のほぼ中間に位置し、桂川の渡河点にもあたる。立地や構造などから、恒常的な地域支配の城ではなく、街道の確保と渡河点の監視のためにつくられた城と考えられる。(比毛)



桂城跡縄張図 西山洋 2021.12.12

とおやまじょうあと
0803 遠山城跡 牛久市遠山町 現況：畠地

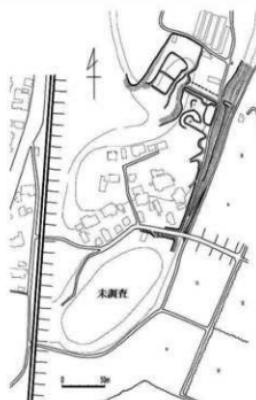
地図 71

城跡は、牛久城（0797）と根古屋川を介して西側の標高約20mの舌状台地端部に位置する。台地東側には牛久沼に向けて開口する大きな樹枝状の支谷が広がる。

現在、JR常磐線の線路東側遠山集落の北側頂部に方形の平坦面があり、この下部に腰曲輪状の平坦面が付属する。同じ台地斜面に沿って南北に古道が走り、この古道沿いにも腰曲輪や堅堀状の遺構が見られる。

遠山城には築城者や築造年代の伝承はないが、街道防備や在地支配のために機能していたと考えられており、牛久城よりも古い時代の城跡との説もある。城周辺には「東城台」の小字が残るほか、城の北東には街道閉塞を目的としたと考えられる土塁が3か所程度遺存している。

遠山城以南の牛久沼に東西する台地上には、遠山城と同様に支谷に囲まれた舌状台地端部を利用した、小規模な城跡の存在（龍ヶ崎市屏風ヶ崎城・八幡台城）が指摘されており、往時は牛久沼を囲む形で岡見氏方の城砦が点在していたと考えられている。（比毛）



遠山城跡縄張図 西山洋 2021.12.20

かんのんじいこう
K069 観音寺遺構 牛久市久野町 現況：寺院境内地

地図 71

観音寺遺構は、観音寺境内に残る土塁などの防御施設を対象とする。乙戸川左岸の台地上、現在久野町の中根集落の北側標高約23mの台地上に立地する。

観音寺は紫陽花の寺として知られ、嘉祥2年（1226）創建の天台宗寺院である。本堂・仁王門が建築、本尊木造11面觀音菩薩坐像が彫刻として、茨城県文化財に指定されている。記録によるところ本堂は大永5年（1525）に現在の姿に再建され、天正5年（1577）と慶長12年（1612）に修復、宝永3～4年（1706-07）に大修理と仁王門建立を行った。仁王門は本堂改修時の古材が再利用されている。

現在、観音寺北側と牛久市斎場との間に直線的に土塁が残されている。また境内東側の民地境の道沿いにも断続的に土塁が確認される。観音寺には土岐氏再興時の棟札が残されるなど、江戸崎土岐氏との結びつきが強いほか、久野城跡（0800）や下久野城（0805）にも程近いため戦国期におけるこれら城館の整備と一連の中で造営されたものと考えられる。（比毛）



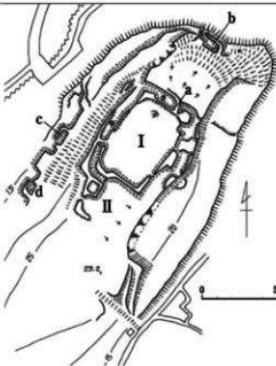
観音寺遺構縄張図 西山洋 2022.1.23

たてのこしやかたあと
0807 立の越館跡 阿見町阿見 現況：山林 別称：真木後館 地図 64

立の越古墳群のある丘陵の付け根付近に、立の越旧館と呼ばれる中世城館跡があるが、その谷津を挟んだ西側の舌状台地先端部に本城館は立地する。

曲輪 I が主郭と思われる。緩斜面の突端部と曲輪 I の間を土橋 a のある堀切で隔て、曲輪 I と II は連郭式になっている。曲輪 II は一段低く、羽成監物屋敷跡と伝承されるが、近世に西光寺があつたため遺構の残りは悪い。北端部に深くて大きな 10 m 四方の入り江状構造 b がある。曲輪 II の西側下の構造 c・d と類似のものと思われる。周囲の水田の高さに近いのでかつては水が入っていたことが考えられる。船隠しのようではあるが、近代の戦争遺跡、農業用施設の可能性もある。なお、2016 年現在、d は土砂で埋められている。

江戸崎土岐氏の西側の境目の砦で、戦国末期のものと考えられている。規模は大きくなないので大室城の出城的役目をしていたものと思われる。(西山)



立の越館跡縄張図 西山洋 2014.1.14 (『続茨』より転載)

おおむろじょうあと
0809 大室城跡 阿見町大室 現況：宅地 地図 64

大室城は稲敷台地の北西部、霞ヶ浦を臨む台地線に築かれた、東西約 350m、南北約 200m の連郭式城郭であったと考えられる。現在は全域が宅地で、その造成時の大規模工事により、台地は削平され堀・谷津は埋められ、遺構はほぼ隠滅して辺縁部にわずかな痕跡を残すのみである。

造成に先立つ発掘調査により、以下のことが判明している。本郭と二ノ郭は最大幅 12m、地表面からの深さ約 5 m の大型の薬研堀で区画され、北側の城壁は現状よりも 10m 高い比高 20m を超える急角度の切岸で、全長に渡って長い帯郭を備え、特に西側の本郭の下は二段構えとなっていた(下段 a のみ残る)。東側から南側にかけて大きな谷が入り込み天然の堀となり、北東側の虎口 b の内側には傾斜地に三段構えの土壘を配置する珍しい構造の小郭が設けられていた。遺物では 15~16 世紀とみられる陶器片、内耳鍋、押し型文様が施された手あぶり等の土師質土器、雁又の鐵、鉛製の鉄砲玉等が出土している。

築城時期や城主は不明だが、戦国時代終盤には土岐氏の勢力圏にあり、小田原北条氏側の対佐竹氏の境目の城として機能していたのであろう。城としての最終形は江戸崎土岐氏によって構築されたか、あるいは土岐氏滅亡後にこの地を治めた蘆名氏(あるいは佐竹氏)により整備されたとも考えられる。(西山)



大室城跡縄張図 西山洋 2021.6.28

しまづじょうあと
0812 島津城跡 阿見町島津 現況：山林、畠地

地図 65

島津城跡は、霞ヶ浦南岸の東西に細長い舌状台地上に構築されている。台地先端部となる東側は、阿見飛行場（現在は太陽光発電所）、西側の基部は大規模な住宅地となっているため、全体の縄張りプランの把握はほとんど不可能である。しかし、御城と呼ばれる本郭跡の周辺には遺構が



島津城跡縄張図 西山洋 2014.1.20
(『続茨』より転載)

明瞭に残っている。

現在、御城は畠となり一画に稻荷社が祀られている。北西端の隅櫓 a は北と西の堀底を監視する絶好の位置にあるが、それ以外の土塁は崩されたと思われる。御城の北側から西側には横矢が掛かった幅 10 m ほどの横堀 b が巡り、さらながら小幡城（茨城県）の小型版といった印象である。南側の横堀 c は幅 15 m ほどあり、土塁の西端は一段と高く、南側からの侵入路を監視している。

築城時期は、信太庄で小田勢力が優勢であった永正期で、その後、戦国末期に小田氏が衰退し、江戸崎土岐氏の支配に代わったと推測されている（阿見町史編さん委員会 1983）。また、地元の伝承によれば、小田方島津軍と土岐方木原軍とが清明川畔で合戦をした際、土岐方龍ヶ崎軍に軍兵の留守を突かれて落城したとされる（美浦村教育委員会 1981）。（西山）

じょうじょうじょうあと
0814 上条城跡 阿見町上条 現況：山林、宅地

地図 64

清明川の右岸、標高約 20m の舌状台地北東端に構築され、対岸の東側約 2 km には墻城が存在する。

北西側の万蔵院裏の竹林に大型の土塁と堀が残存している他は遺構の残りに乏しく、全体構造を復元するのは難しい。万蔵院の北東側約 100m に土塁に囲まれた規模の小さい詰の曲輪といわれる曲輪 A がある。本城はその東側の現在山林になっている B と思われる。万蔵院は裏鬼門にあたり、妙行寺が鬼門にある。妙行寺裏の台地縁にも土塁が残る。本城の南西側約 560m に、



上条城跡縄張図 西山洋 2022.2.21

台地基部を切断・監視する上条外堀いが構築されている。2003 年に一部を確認したが 2022 年現在の状況は不明である。

城主と言われる大越氏は、山内上杉氏の家臣で、土岐氏、白田氏等と同じ頃信太庄へ赴任してきた（「白田文書」）。築城は永正期で、天文・永禄期に下総へ逃れた時期があったが、天正 13 年に帰住した（「大越家家譜」）。その後は、江戸崎土岐氏の家臣としてこの地を守り、江戸崎城の開城と同時期に廃城となり、土着・帰農したものと思われる。（西山）

君原公民館の北側、清明川の流れが南東から北へ大きく向きを変える左岸の標高約25mの台地上に位置している。城は大きく南と北の2つの区画に分けられ、それぞれ異なるプランで構築されている様に見える。ここでは、便宜的に南城と北城と呼ぶことにする。

○南城：清明川を臨む台地辺縁部で、南から北方向を一望できる場所に占地され、3つの曲輪が南北方向に連郭式に配置されている。北側に出丸的な曲輪III、中央にたての地名が残る大型の主郭I、その南側にも曲輪IIがあるが後世宅地となつたため元の形は不明瞭である。主郭西側の突き出した部分aの周囲には敵を伴った横堀bが備わるが、南側の土塁は崩されている。対角の北東角には約10m四方で高さ約1mほどの櫓台を思わせる土壇cがある。また、主郭周囲は厳しい切岸が取り巻いている。東側から「たて」を斜めに通過し西側へ横断する切通しdは近年に付けられた道で、これを除けば主要部分の残りは良好である。

○北城：奇異な構造で、堀城を異形の城たらしめている。一見稜堡かと見紛う様な屈曲を持った大型の土塁と空堀が二重三重になっているのが特徴であるが、曲輪らしい空間はわずかしかない。城というよりも、台地縁に空堀を幾重にもめぐらせた防護という印象である。北側は台地続きのため台地基部の防護を目的として、北城の西方約600mに長堀、北西約1.2kmに内堀と呼ばれる堀切・土塁が構築されていた。

○総構え：南城と北城の東端および北城の西端には谷戸部を締め切るための土塁の残れe・fがあることと、北東側に「かど」地名、谷戸部には本郷の地名があり、総構えの趣が感じられる。

小田氏が支配する時代には、南東側の江戸崎土岐氏を監視する目的で南城が整備され、その後小田氏が衰退し代わって土岐氏が支配する時代になると、対小田氏、さらにその後の対多賀谷氏・佐竹氏を意識した北側監視のために北城を増設したものと思われる。記録や文献がないため詳細



は不明であるが、「たて」地名は、もとは在地士豪の居館であったものが、小田氏支配の時代とその後の土岐氏支配の時代を経る中で、改修・拡張を重ねてきたことを示唆する。一方で、単なる地域防衛の城郭としてだけでなく、いずれの時代においても水陸交通の要衝であったことから、街道監視と閉塞を目的とした地域権力の拠点の一つであったと推測される。

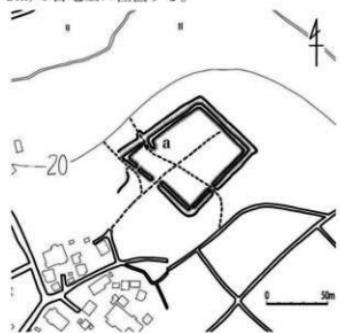
最後は、天正18年(1590)の土岐滅亡により廃城になったのであろう。地元の館野氏本家の墓碑には「元堀の士俗名館野但馬」と銘が刻まれており、堀城に関係のある一族かもしれない。なお、北城の北西側約300mの字東観の地は、八田知重と笠間時朝の関係を示唆する胎内銘文を内蔵する阿弥陀如来像が安置される蔵福寺の古地である。(西山)

堀城跡攝図 岡田武志 2022.1.24 (阿見町教育委員会より提供)

かみながやかたあと
0816 上長館跡 阿見町上長 現況:山林

地図 64

上長館跡は、上長公会堂の北東約 160m、乙戸川とその支流桂川に挟まれた標高約 25m(比高約 5m)の台地上に位置する。



上長館跡縦張図 西山洋 2021.5.3

一辺約 70m の方形に近い台形状に堀と土塁をめぐらした単純な形の館跡である。土塁は 4 か所で切れているが、西側の切れ目の北側土塁に横矢穴 a が備わっていることからここが本来の虎口と思われる。他の 3 か所は後世の改変であろう。

築城時期や城主に関する詳細は不明である。戦国末期の土岐氏の家臣名簿(「石引家文書」、「諸岡武男氏所蔵文書」など)に上長は登場しないことや、昭和期には伝承が絶えていること(阿見町史編さん委員会 1983)などから、中世も前期の館跡と考えられる。(西山)

しもこいけじょうあと
0818 下小池城跡 阿見町小池 現況:山林、公園、工場敷地

地図 71

阿見町小池の南東部にあり、北側は台地続き、南側は乙戸川の作る低地、西側と東側は乙戸川から入り込む谷津に挟まれた比高 25m の舌状台地南端部に位置する。乙戸川に沿って 1 km ほどの距離を隔てて、西に上小池城、東に福田城が並ぶ。



曲輪 I は乙戸川へ突き出す台地南端部に作られ、北へ向かって曲輪 II、曲輪 III と並ぶ梯郭式配置である。曲輪 I 周囲の堀土塁の残りは良く、東側に相模矢穴 a、北東隅に楕円形横矢穴(出隙)b、西側に二重堀 c、南西隅に搦手口 d を認める。曲輪 II を囲む堀土塁は一部埋没しているがほぼ全体が残り、北側の中央部に内柵形を伴う虎口 e がある。発掘調査で谷津 C の麓に馬洗池が確認されたが、現在は埋没している。西側台地上の平坦地は外郭 IV と思われる。その東側辺縁には横矢穴のある二重土塁 g に挟まれた堀底道が南北に走っている。

築城時期や城主は不明だが、技巧的要素を多用した縄張りから、戦国期に岡見氏との境目を厳重に警戒する目的で、江戸崎土岐氏が構築したと考えられる。(西山)

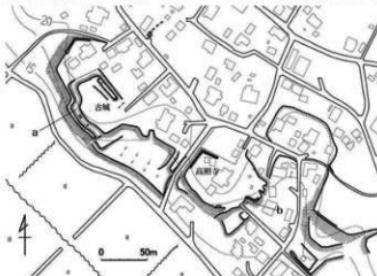
下小池城跡縦張図 西山洋 2005.10.06 (『改次』より転載)

0819 福田城跡 阿見町福田 現況：山林、畠地、宅地

地図 71

福田城は、福田工業団地の南西約1km、小野川の支流乙戸川左岸の標高約24mの台地辺縁部にある。主郭と思われる字古城の周辺を除くと、遺構の残りは良いとは言えない。

字古城の周囲には、東、北、西に横堀が巡り、特に西側の堀は外側の土塁と共に明瞭な横矢が備わり、堀底には敵の痕跡も認められる。また、東側の高照寺の東参道に対して北側台地上から横矢bが掛けられ、その辺縁部にはわずかな高さになつてはいるが土塁の痕跡も認められる。北側の集落内にも堀が巡っていたようだが、現在は民家や舗装道路となり隠滅している。



福田城跡縄張図 西山洋 2021.12.28

城の歴史については詳細不明ながら、城主についての手がかりとして、木田余城主信太氏と同紋の福田左京亮の名があり（「関東幕注文」）、あるいは岡見一族の福田豊後左衛門との解釈もある（「岡見系図」）。一方、東隣の久野にある觀音寺の棟札から、天正5年（1577）時点の領主は土岐越前守であることがわかり、この時期は、福田城も土岐氏の支配下に入っていたと思われる。（西山）

0821 篠崎館跡 阿見町吉原 現況：山林、宅地、寺社境内地

地図 71

吉原山西光寺の東に接し、県道34号線（いぶきの丘大通り）を挟んであみプレミアム・アウトレットの西側、桂川を望む標高約25mの台地先端部に位置する。

西光寺本堂の東側に南北方向約30mの土塁aが残る。そこから30mほど南東側の竹林の中に、台地辺縁に平行して低い土塁bが20mほど残る。南側の台地斜面の一段低いところには約100mに渡り腰郭Aが設けられている。全体として遺構の残りが乏しい上に、県道工事によって台地先端部が120mほど削られたため核心部についての情報も失われている。明治初め、現在の吉原の一部に堀之内と称する村が存在したが、本館の北西約1.3km（堂山交差点の南西約180m）にある



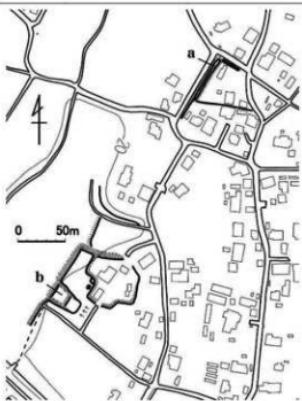
篠崎館跡縄張図 西山洋 2019.12.31

神田土塁（一部残存）を縮めることで、周囲の谷津を堀として、本館の乗る広大な台地を島状に独立させられることに関連する地名と思われる。また、北側に隣接する篠崎遺跡からは馬の歯や骨が見つかり、付近に牧があった可能性が指摘されている。

築城時期や城主についての詳細は不明であるが、「土岐氏旧臣人數注文」（「石引家文書」）に現れる江戸崎新山六人等の一人篠崎出雲と関係があるのかもしれない。（西山）

0822 三数館跡 阿見町竹来 現況：山林、宅地

地図 64



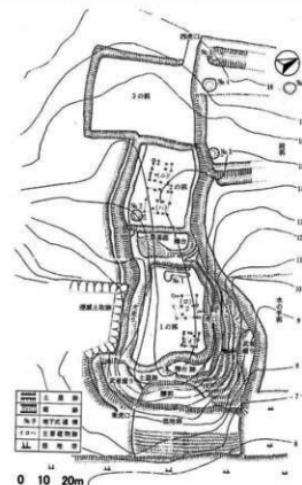
三数館跡縄張図 西山洋 2022.3.1

三数館跡は、阿弥神社社殿の南南西約430mの清明川左岸の標高約25mの台地上に位置し、竹来の集落の中心部にある。

集落内の公道に沿って、西側に約50m、北側に約30mの土塁が残っている。特に西側の土塁aは道との比高は2m以上ある。曲輪内には20年ほど前には寿光稻荷が祀られていたが、現在は所在不明である。ここから約280m南西側にある城主伝承の残る吉田家の、水田を望む裏山に船着場跡とも思われる地形bが残存している。ただ、その外に明瞭な城館遺構は認められない。

城主や築城時期は不明であるが、戦国末期の土岐氏臣の中に、竹来村在住として、吉田久左衛門、松本八兵衛（「石引家文書」）、吉田因幡（「諸國武男氏所藏文書」）などの名が見える。（西山）

0826 御茶園館跡 美浦村木原 現況：山林、工場敷地 別称：御茶園遺跡 地図 65



御茶園館跡縄張図 大竹房雄（大竹房雄 1994 より転載）

霞ヶ浦の南岸、木原城（0829）から約1km東南東方向の標高約27mの台地斜面で、霞ヶ浦から深く入り込んだ大型の谷津に面して構築されていた。殿様の茶畠伝承のある地域での工場建設に先立って行われた発掘調査で発見されたが、その後の土取りで完全に隠滅している。

木原城は、南東側の大きな舌状台地と谷津からの侵入に対する防衛線として巨大な二重堀を配備しているが、それに加えて谷津の入り口両側には根火山砦（K098）と大須賀山砦（0833）、中央部両側には本館と廣徳寺城（0827）、最も奥まったところには木原館（0828）を配置し、霞ヶ浦からの敵の侵入を厳重に監視・防衛している。

築城時期や城主等は不明だが、遺物調査から南北朝期に存在した可能性が指摘されている。しかし、鉛玉の発見などがあることから、戦国期に再度取り立てられ、江戸崎土岐氏、木原近藤氏などによって整備されたことも考えられる。（西山）

0827 こうとうくじょうあと 美浦村郷中 現況：宅地、寺社境内地
廣徳寺城跡 別称：木原門前遺跡 地図 65

霞ヶ浦から南へ入り込む大型の谷津を望む標高約 27m の台地上に位置する。南西側約 350m には木原館（0828）があり、谷津を挟んだ北側約 300m には御茶園館（完全隠滅）（0826）があった主な遺構は無住の寺院廣徳寺の境内と台地縁に残っている。1998 年時点では、本堂裏の墓地への侵入路の両側に左右 3 本ずつの土塁とその間に 2 本ずつの堀が娘違いに配置されているのを確認でき、複雑な折れ虎口だったことが想像された。

しかし近年、進入路の拡幅や墓地の造成で土塁の一部が削られ、また空堀内に倒木や廃棄物が投棄されているため遺構の確認は難しくなっている。

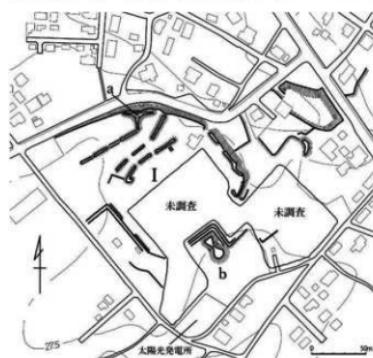
文書記録がないため、築城時期や城主などについての詳細は不明だが、廣徳寺は「天正 11 年創立、永巖寺第 15 代 棟庵全梁 開山」とされる（佐々木草格編 1983）。また、「木原館には近藤氏の二代目あたりの殿様が入居していた」の言い伝えが残っているとされ（大竹房雄 1994）、木原城や木原館と何らかの関係があった可能性を考えられる。（西山）

0828 きはらやかたあと 美浦村郷中 現況：山林、畠地、宅地 別称：楯縫館 地図 65

木原城（0829）の南東約 1.3km、霞ヶ浦南岸の標高約 27.5m の台地に深く入り込んだ大型の谷津の最も奥まった場所に位置する。周囲には、北東約 400m の信太庄一の宮楯縫神社の他、古墳群、廣徳寺、西光寺、摩訶陀院（廃寺）などがあり、古くから地域の中心地であったと思われる。

土塁で囲まれた曲輪 I の内部は整地されており、北側には櫓台 a を伴った三重の土塁が配置されている。南側には前方後円墳 b があり、物見台に転用された可能性がある。個人の宅地だが長年放置されていたため現在は凄まじい藪になっている。

築城時期や城主については不明だが、「木原館には近藤氏の二代目あたりの殿様が入居していた」なる言い伝えが近隣の廣徳寺に残るという（大竹房雄 1994）。また、木原城城主近藤氏の菩提寺永巖寺の寺伝には、永正元年（1504）に近藤氏は神越之城へ入り、翌年、神越を木原へ改めたとする記述がある。神越之城は本館である可能性も考えられる。（西山）

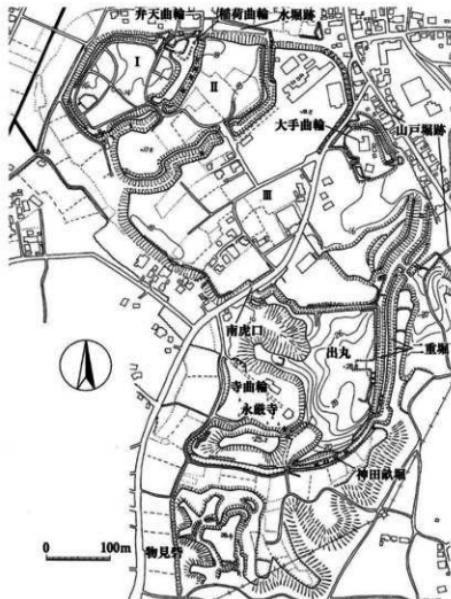


木原館跡縄張図 西山洋 2022.1.30

0829 木原城跡 現況：山林、畠地、宅地、公共施設地 別称：城山 地図 65

木原城跡のある舌状台地先端部は、かつて布佐沼と呼ばれた湿地帯に囲まれた防御性に富んだ要害の地で、古墳時代以前の濠跡も検出されている。城の成立が分かる史料に乏しいが、今から430年ほど前の16世紀後半、すなわち戦国時代の後期に、現在の形に整備されたと考えられる。範囲は東西700m、南北1000m、面積およそ30haという広大な城域を持ち、茨城県内でも有数の巨大城郭で、広い郭と雄大な堀・土塁が特徴的である。

構造は、I曲輪(本丸)・II曲輪(二の丸)・III曲輪(三の丸)・大手曲輪・寺曲輪・出丸・弁天曲輪・物見砦などで構成され、台地続きの南東側を巨大な二重堀で守っている。I曲輪は全周を土塁で囲まれ、とくに南東側の土塁は曲輪といつても良いほど巨大で、一段高まった北端は稻荷曲輪と呼ばれ、詰曲輪と考えられている。大手曲輪は四方を土塁で囲まれ東側斜面中段に犬走りがある。寺曲輪には木原城主近藤氏の菩提寺と伝えられる永巣寺があり、境内南側土塁斜面に近藤氏所縁の苔むした墓石・供養塔が數基並ぶ。物見砦は、木原城よりも古い時代の砦といわれるが詳細不明である。山戸堀と二重堀は城の東側から南東部の台地続きを守る総延長約500mの長大な防御線を構成する。特筆すべきは二重堀でこれを見すには木原城を語り得ない見応えのある遺構



木原城跡縄張図 西山洋 2006.1.24 (『改茨』より転載)

である。山戸堀は大手曲輪の東側を守る巨大な堀だったが、国道125号線工事や宅地化で現在は細い排水路に姿を変えている。また二重堀はJR山戸丁バス停付近で山戸堀から分岐して南へ向かい寺曲輪の東側へ達している。

城主は近藤氏と言われるが、その勢力に不相応なほどの大規模な城郭で、当時の政治情勢と勢力分布を踏まえると、全国統一を目前にした豊臣軍が迫りつつある時期、関東を死守したい小田原北条氏が、南進を図る佐竹軍との決戦に備えて、近藤氏のほか地元で力のあった江戸崎土岐氏などに命じて整備させた霞ヶ浦南岸の中核的な大兵力駐屯基地と見るのが妥当であろう。ただ、豊臣軍の圧倒的な兵力の前に、江戸崎城同様に木原城も戦わず開城したものと考えられる。(西山)

0830 舟子城跡 美浦村舟子 現況：山林、宅地ほか 別称：城ノ内遺跡 地図 65

霞ヶ浦南岸の稲敷台地北縁部、清明川河口の東側に位置する標高約 20m の丘陵に存在する。現在は、南側へ突出した 4 つの舌状台地が北側で連結する東西約 900m、南北約 500m の独立した地形だが、古くは西側の台地と連続していたと考えられる。台地東端に海源寺があり、東側の木原城（0829）と約 700m の距離で対応している。

城域は、4 つの舌状台地と台地北側下の舟子集落で構成される。明晰な城郭遺構が確認されているのは東から数えて 2 番目の台地であるが、近年の開発ではぼ隱滅している。わずかに台地の北側斜面に横矢のかかった登城路 a や土塁 b が残っている。また、国道 125 号線沿いの水路 c は外堀に相当する舟子堀の跡である。集落内には水路の痕跡の他、細く見通しの効かない屈曲した道が張り巡らされ、古屋、古屋下、御城橋、戸張、舟子堀、宿前、宿尻、舟戸などの城郭関連地名が残っている。

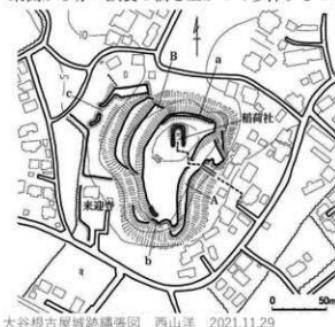
観応年間に小田氏勢力が築城したとする文書が地元旧家に残るというが詳細不明である。海源寺本尊薬師如来坐像の台座に、大旦那土岐原源治郎とする明応 10 年（1501）の墨書きがあり、この頃には江戸崎土岐氏の支配になっていたと推測される。（西山）

0831 大谷根古屋城跡 美浦村大谷 現況：山林 地図 72

大谷根古屋城跡は、高橋川左岸の標高約 24m の舌状台地先端部に位置する。現在、独立した丘に見えるのは、台地基部を断ち切っていた堀切を住宅地造成などのためにさらに広く削ったためと思われる。

城跡は同心円的な構造になっている。最上段には三方を土塁に囲まれた稲荷社が祀られており、東側から赤い鉄製の橋を上がって参拝することができる。二段目の曲輪は北側辺縁部に土塁 a が残る。南西側辺縁部にもわずかに土塁 b を認め、ここは虎口と思われる。東側に南北に長い腰郭 A、北西側には二段構えの腰郭 B とその下に土塁と斜面を上るような横堀および虎口 c がある。横堀は途中で断ち切られているためその先の構造は不明であるが、横堀から腰郭へ上がる動線があったことも考えられる。

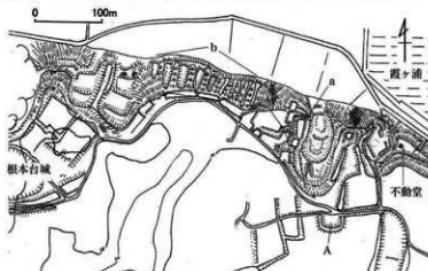
天文 25 年（1556）、常州大谷の秦治宗は、常州信太庄大槻那波多野刑部少輔を願主として一宮樋窓神社に大般若経を奉納している（『安得虎子』）。のことから、秦氏あるいは波多野氏と大谷根古屋城との関係が推測できる。（西山）



まがきふどうあと
0832 馬掛不動跡 現況:山林、寺社境内地 別称:馬掛城砦 地図 65

霞ヶ浦南岸の標高 25m の台地縁に構築され、現在の馬掛不動堂のある場所までを郭として取り込んでいた。道路や堤防の整備以前は、台地直下を白波が洗うほど湖面に接した地で、木原城(0829)から東側、大山に至る間の台地縁に構築された多数の城館群の中では最大かつ厳重な防衛施設である。また、これらの中で開発から逃れてほぼ完存している唯一の城館遺構もある。

不動堂へ上がる舗装道路は後年のものだが途中に樹形跡と思われる地形が残存する。ここから南側へ上がり台地上へ出て進路を西側へ取ると、樹形として機能したものと思われる大型の摺鉢



馬掛不動跡縄張図 大竹房雄 1993

郭 A の中に入る。そこから西隣の根本台城南東側虎口へと至る連絡路と思われる道が台地縁に沿って続いている。その他、ヘアピン形虎口 a、台地縁の断崖には連続する九本の大型竪土塁 b などが確認されている。

城主等不明だが、戦国後期に小田原北条氏、江戸崎土岐氏などによって整備された、木原城を中心とする防衛網の一つと考えられる。

(西山)

おんじょうあと
0837 御城跡 稲敷市高田 現況:水田、宅地ほか 別称:高田須城、御城遺跡 地図 72

小野川と小野川旧河道に挟まれた標高約 2m の低地で、稲敷警察署の東側約 280m 付近に位置する。周囲は宅地になっている。

小野川に架かる高田橋の北側約 160m の地点にある宅地は御城といわれ、その一部 A が東側の水田に向けて突出している。広さは 12m × 20m で周囲に土塁は認められないが、一帯では唯一標高 3m を越えている。斜面は切岸状で、周囲の水田 B は水堀の面影を止めている。現在の小野川



御城跡縄張図 西山洋 2021.4.18

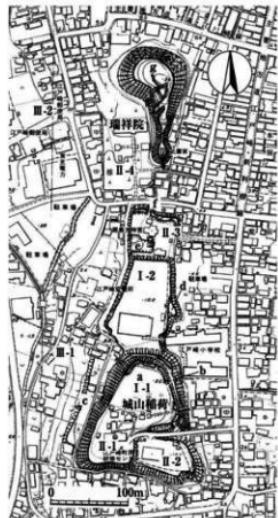
は昭和 40 年代に開削されたもので、戦国期には、周囲の低地を水によって防御する水城であったと思われる。周辺は宅地化されているため遺構は確認できない。

「白田文書」によれば、天正 18 年 (1590) 5 月 20 日、豊臣秀吉の小田原城攻めの別働部隊浅野長吉軍方の神角介が要害(江戸崎城本丸)へ乗り込み、城主土岐治綱を高田須へ排除したとあるが、治綱が移されたのはこの御城だと考えられる。(西山)

江戸崎は、北は霞ヶ浦、東から南は小野川および沼田川の作る沼沢地に囲まれた要害の地である。江戸崎城はその中心部にあり、小野川左岸の稲敷台地の一部が南へ向かって舌状に張り出した標高 25m の台地先端部に立地する。

稲敷市立江戸崎小学校の南側の台地先端部が本丸といわれる。かつては、公民館や研修センターなどが置かれていたが、現在は民家と畑になっている。曲輪周囲は土塁で囲まれていたと考えられるが、現状は東側から北側にかけてわずかに残存するだけである。民家北東側の畑の中の崖みに櫓が植えられているが、これは井戸跡といわれる。東側土塁下には犬走り、腰郭が認められる。本丸の北側、現在江戸崎小学校体育館と運動場がある場所には、本丸とほぼ同程度の標高の見晴らし山(別名桃山)が太平洋戦争の頃まで存在したが、ここが二の丸であろう。本丸と見晴らし山は木橋で連絡されていたと考えられる。そして、北側の鹿島神社のある郭とは堀によって区画されていた可能性がある。鹿島神社北側に残る土塁はかなり大きなものだが、これは、この郭が低地にあるためだろう。その北側の瑞洋院境内も曲輪と考えられる。このように江戸崎城は小野川の低湿地を天然の堀に見立てた直線連郭式構造の城郭である。さらに、北側の伊勢ノ台と呼ばれる高台(現不動院および江戸崎中学校)も城域と考えられる。

歴代城主土岐原氏は美濃の守護土岐氏の一族で、嘉慶元年(1387)頃、関東管領山上内杉氏の被官であった土岐原秀成が信太庄惣政所としてこの地へ入部してきた。築城は、室町時代初期の応永～永享の頃(1400 年代初期)と推定され、景秀一景成一治頼一治英一治綱 5 代の居城となった。



永正の頃(1500 年代初期)、小田氏との紛争や内紛によって力を失うが、その後勢力を盛り返し、美濃土岐氏の滅亡により土岐氏の惣領となつたためと思われるが、天文 12 年(1543)頃に姓を土岐原から土岐へ変えている。さらに、小田氏の衰退と入れ替わるように信太庄・東条庄における支配域を拡大し、稲敷地域一帯の広大な地を支配するようになった。戦国末期には小田原北条氏方に付き、「江戸崎城 龍かみね 木原 三ヶ所 千五百騎」(「毛利家文書」)の兵力を持って、佐竹氏・多賀谷氏などと対立した。戦国最末期、豊臣秀吉の小田原攻めの余波を受け、天正 18 年(1590)5 月 20 日、浅野長吉軍方の神角介が要害(本城)へ乗り込み、城主土岐治綱は江戸崎城を開城し高田須(現稲敷警察署付近)へ退去した(「白田文書」)。その後、上之島(稲敷市)へ移り住みその地で没したと伝えられる。土岐治綱退去の後、佐竹義宣の実弟芦名義広(盛重)が入城し城下町を整備するが、関ヶ原の役後の慶長 7 年(1602)、秋田転封となり、その後、青山忠俊、山岡景友、丹羽長重などが入封するが、元和 8 年(1622)に長重は棚倉へ移封となり、まもなく廢城となった(中山信名 1893 ほか)。(西山)

江戸崎城跡縄張図 西山洋 2005.12.29 (『改次』より転載)

江戸崎城の南西約3kmの、小野川の北岸、稲敷台地の南東端に近く、東以外の三方を沼沢地に囲まれた標高約28mの台地先端部に位置する。

遺構の保存状態は、西側部分の字根古屋は比較的良好であるが、それ以外は、寺社境内、集落などによる後世の改変が著しく、原型を確認できない場所も多い。根古屋の東側の字堀之内、荒地までが城域であろう。構造的には、少なくとも3つの曲輪からなる連郭式城郭で、戦国期に整備されたものと考えられる。曲輪Iと曲輪IIは幅約10mの堀A隔てられ、土橋aで連結されている。曲輪Iの南側に尾のように土塁が伸びた部分bがあるが、後世に宅地とするため曲輪Iの南側を大きく土取したものと思われる。曲輪IIの南西側、堀切に面したところに櫓台cがある。その東側には、台地の根小屋地区から上がってくる堅堀様の道dが付いている。曲輪IIの北側は深く幅の広い横堀Bで守られている。曲輪IIの東側には変形ではあるが馬出eがある。曲輪IIから馬出へ出る土橋には北側から強力な横矢fが掛けられている。馬出から細い土橋gを渡って北側へ出ると東側の東羅寺および羽賀神社境内付近まで広がるかなりの広さの空間hがある。後世の改変が著しく城郭の構造に乏しいが、土塁や仕切りの段差、櫓台らしき高まりがあり、曲輪IIIだったと思われる。台地の南東側も城域と考えられるが、ここも改変が著しい。曲輪Iと曲輪IIの南側斜面下は根小屋地区で現在も住宅が密集している。

築城主や時期は不明であるが、「白田文書」によれば、白田氏は信濃国の豪族滋野一族の海野庄（長野県東御市）を本拠とする海野氏の支流で、白田郷（長野県佐久市白田）を名字の地とし、嘉慶元（1387）年8月、白田直連が関東管領上杉憲定から信太庄布佐郷（美浦村）を宛行われたとある。ただ、その後いかなる経緯で羽賀へ移り、本城を居城にしたかは不明である。山内上杉氏の信太庄経営を担う先鋒として入部し、土岐氏、近藤氏、大越氏らとともに信太庄山内衆（信太庄契約中）と呼ばれた。その後の相互の力関係の中で、最終的に江戸崎土岐氏の重臣となった。戦国末期、最後の城主は白田左衛門尉で、天正18年（1590）5月、小田原北条氏に与した土岐氏が江戸崎城を開城するのと時を同じくして本城を開城し、白田氏は帰農の道を選んだ。白田氏は700年以上の永きに渡り家伝の「白田文書」を守ってきており、東国中世史解明のために多大な情報を提供している。（西山）

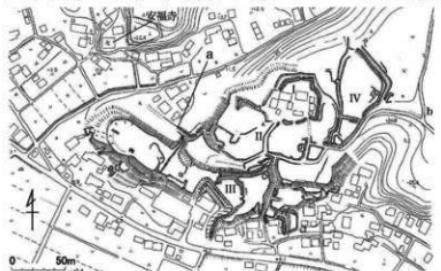


羽賀城跡縄張図 西山洋 2004.11.22 (『改茨』より転載)

0838 もりとじょうあと 森戸城跡 稲敷市下君山 現況：山林、宅地 別称：二条城、君山城 地図 72

小野川の北岸、稲敷台地の東南端部の標高約29mの台地上に位置する。北東約2kmに羽賀城、小野川を挟んだ南側約950mに東条氏の神向寺城が相対する。本城東側の下君山の台地は、信太郡比定地の一つで、本城の東側に北へ向かう直線官道の始点がある。

学校地、工場地などによる改変はあるが、連郭式と梯郭式を組み合わせた構造だったと想像される。区画Iが主郭で、東側から北側にかけての土塁の残りは良好である。西側から上がってく



森戸城跡縄張図 岡田武志 2022.3.25

る街道は、関所aを通り、郭IIと郭IIIで両側から監視されながら郭IVに沿って東側の台地基部bへ抜ける。本城は、街道監視と閉塞を目的とした城郭と考えられる。

築城時期や城主は不明だが、戦国末期の土岐氏臣の中に、君山村在住の小林左衛門の名が見える（「石引家文書」）。また、主郭には先祖に城主伝承を持つ小林姓を名乗る二軒の民家がある。（西山）

0839 とうじょうたかだじょうあと 東条高田城跡 稲敷市高田 現況：山林、宅地 地図 72

小野川河口に近い右岸、江戸崎の対岸、かつての東条庄側の標高約27mの台地上で、谷津を挟んで高田神社の東側に位置する。台地基部の南東側には大きな改変はなさそうである。



東条高田城跡縄張図 岡田武志 2022.3.11

北と南の2つの曲輪からなる。北の曲輪Iは約130m×70mで南北に長く、曲輪の北縁と南東角に土塁がある。北側の横堀aは西へ回ると帶郭Aとなり、その先の堅堀bを越えると幅約10mから20mの腰郭Bとなる。南東側にも50mに渡って横堀cがある。現在は、道路になっている堀切dを隔てた南の曲輪IIは約30m×80mの大きさで、南西側と南東側に小型の腰郭Cが備わる。西側にわずかに土塁が残る。

東条庄は、鎌倉時代には常陸大掾氏の一族東条氏の支配下にあったと思われるが、庶流の一つ東条高田氏の名は応永11年(1404)の「鹿島大使役記写」に見られる。築城時期や城主は不明であるが、南北朝時代の城郭は、現在の高田神社の場所にあり、本城は、戦国期に東条高田氏あるいは土岐氏によって築かれたのではないかと思われる。（西山）

0840 椎塚城跡 稲敷市椎塚 現況：山林、畠地、宅地

地図 72

椎塚城跡は、稲敷市立高田小学校の南南東約 850m、徳昌寺の南東側約 230m の標高約 28m の台地上に位置する。



椎塚城跡縄張図 西山洋 2020.1.6

土壘・堀の規模は小さいが、直線状の土壘が隨所に残り、2つないし3つの方形の曲輪を連郭式に配置した構造であった可能性が推察される。土壘の西側角に隅櫓と思われる高まりを認める。あまり技巧の感じられない方形を基本とした構造から、地元豪族の居館が元になっていいると思われる。

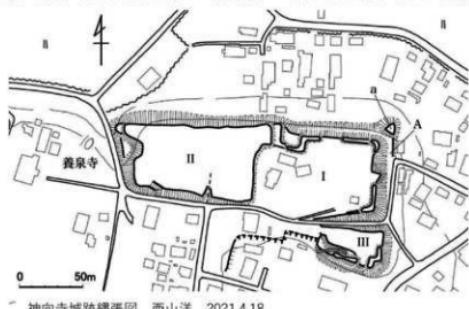
築城時期や城主についての詳細は不明だが、戦国末期の土岐氏臣の中に見える、椎塚村在住の秋山伯耆守（「諸岡武男氏所蔵文書」）に関係があるのかもしれない。（西山）

0841 神向寺城跡 稲敷市下根本 現況：山林、畠地、宅地 別称：谷津遺跡 地図 72

北は小野川、南は香取の海（現在は新利根川、利根川の作る水田地帯）に挟まれた、南北幅 600m ほどの細い台地の北側辺縁にあり、曲輪の標高は約 15m、西側に養泉寺が隣接する。

遺構は、東西約 200m、南北約 100m の範囲である。曲輪 I は民家となるが、台地縁には土壘がかなり残っている。また、東側斜面には帯郭 A があり、その北端には櫓台風の高まり a がある。一方、曲輪 II の周間に土壘がまったくないのは、庵城後に畠地となった際に崩されたのであろう。

また、民家の宅盤が若干掘り下げられているが曲輪の境を表しているかどうかはわからない。東西方向に通る道路を挟んで南東側に一部土壘を作った小型の曲輪 III があるが、馬出あるいは詰めの曲輪と思われる。

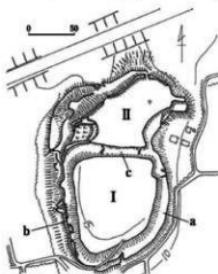


神向寺城跡縄張図 西山洋 2021.4.18

本城の乗る台地を西へ迫る
と土岐氏の勢力圏である龍ヶ崎へ至り、東へ迫ると東条氏の
二条城、東条城、神宮寺城、阿波崎城へと至る。北を見ると小
野川の対岸約 920m には森戸
城が対面している。これら城館
の配置から、本城は両勢力の境
目の城であると考えられる。
(西山)

0843 二条城跡 稲敷市伊佐津 現況：山林、畠地 別称：竹内城、伊佐津城 地図 72

小野川と新利根川に挟まれた伊佐津の台地上で、下太田工業団地の約 500m 西側、愛宕神社の約 300m 北側の南に突き出た台地先端部に位置する。県道 5 号線工事により北側台地との接続部の遺構は失われている。小野川の渡河地点に近く、東条庄の台地が南北に細くくびれる部分であるため、ここが分断されると東西方向の連絡に支障をきたす戦略上重要な場所である。



二条城跡縄張図 西山洋
2015.1.12 (『続茨』より転載)

南北に連郭式に並んだ二つの曲輪が残存している。主郭と思われる曲輪 I の東側は幅 10m の帯郭 a、西側は幅 5m の横堀 b が取り巻いている。a、b はそれぞれ曲輪 I の北側で曲輪 I と II を隔てる堀切へ連続する。この堀切は、広いところで幅 20m ほどあるが、中央部へ近づくに従って埋められて浅くなり、現在では二つの郭をつなぐ土橋 c になっている。曲輪 I の内部は平坦で 2002 年頃までは果樹園だったが現在は放棄され荒れている。

城主金剛寺光壽は、天文 11(1542)年、土岐治頼との戦いに敗れ、城から追放され翌年没したとされる（円福寺に残る位牌、新利根村史編纂委員会 1983）。市指定文化財である円福寺山門は、改修されてはいるが城主光壽が二条城裏門を移築したものと伝えられる。（西山）

0844 東条城跡 稲敷市下太田 現況：山林、太陽光発電所、墓地 別称：太田城 地図 72

圏央道稲敷東 IC の約 2.4km 西側の標高約 27m の台地上に位置する。戦後、主郭部は、学校地、工場地として使われたため大きく改変され、現在は太陽光パネルが設置されている。

曲輪 II は、西側からの登城路 a に横矢をかけ、張り出し b はその北側を通り曲輪 I へ入る道に横矢をかけていたと思われる（1947 年撮影の空中写真による）。曲輪 I 内部には見るべきものはないが、北側に腰郭や横堀の一部 c が残る。かつて、北西側を二重に横堀と土塁が取り巻いていた様だが、下段は土取りで失われ手がかりは無い。曲輪 I 北東側に幅約 10m の堀切 d があり、横堀 c と連絡している。堀切の東側は、二股に分かれ豊堀 e となる。東北端の土塁 f は、集落の東側を守る総構え的な防壁であろう。南西側の島状の丘陵は、元は連続していたのかもしれない。



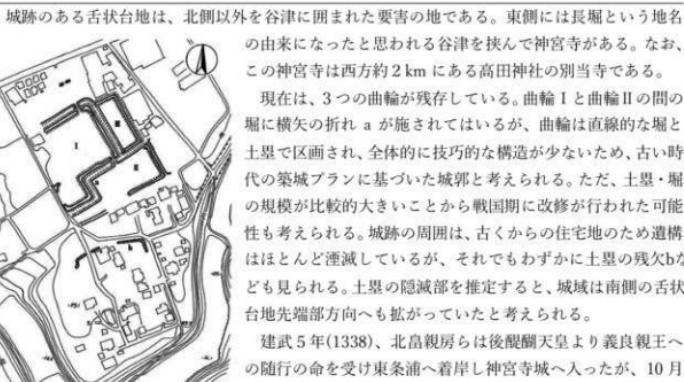
東条城跡縄張図 西山洋 2021.5.24

築城時期や城主は不明だが、治承 4 年（1180）、頼朝の攻撃に対応する佐竹氏の与力の中に東条五郎貞幹の名が見え（早川厚一・弓削繁・山下宏明編著 1980）、正嘉元年（1257）の鹿島大使役は東条兵部尉忠幹が勤めている（「鹿島大使役記写」）。南北朝時代、東条氏は南朝方を支援したが、北朝方に敗北した（「烟田文書」）。戦国時代になり力を増した江戸崎土岐氏の家臣となった際に、本城は土岐氏の支城になったと思われる。（西山）

0845 神宮寺城跡

稲敷市神宮寺 現況：山林、畠地、宅地

地図 72

神宮寺城跡縄張図 西山洋 2005.9.19
（『改元』より転載）

城跡のある舌状台地は、北側以外を谷津に囲まれた要害の地である。東側には長堀という地名の由来になったと思われる谷津を挟んで神宮寺がある。なお、この神宮寺は西方約2kmにある高田神社の別当寺である。

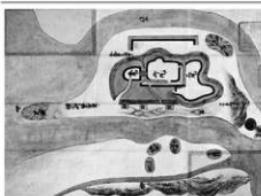
現在は、3つの曲輪が残存している。曲輪Iと曲輪IIの間に堀に横矢の折れaが施されているが、曲輪は直線的な堀と土塁で区画され、全体的に技巧的な構造が少ないので、古い時代の築城プランに基づいた城郭と考えられる。ただ、土塁・堀の規模が比較的大きいことから戦国期に改修が行われた可能性も考えられる。城跡の周囲は、古くからの住宅地のため遺構はほとんど湮滅しているが、それでもわずかに土塁の残欠bなども見られる。土塁の隠密部を推定すると、城域は南側の舌状台地先端部方向へも拡がっていたと考えられる。

建武5年(1338)、北畠親房らは後醍醐天皇より義良親王への隨行の命を受け東条浦へ着岸し神宮寺城へ入ったが、10月5日に足利軍の攻撃を受け、わずか10日足らずで阿波崎城へ逃れた。ほどなく、阿波崎城も陥落し（「畠田時幹軍忠状写」）、小田治久を頼って小田へと移った。（西山）

0846 浮島城跡

稲敷市浮島 現況：山林、畠地ほか 別称：岡ノ内城

地図 73



浮島（浅野文庫所蔵「諸国古城之図」）



浮島城本丸跡縄張図 西山洋 2022.1.10

浮島は、「常陸國風土記」信太郡の条に、「四面絶海にして、山と野交錯れり」とあるが、現在は干拓され陸続きになっている。浮島の台地の内、西端の姫宮神社から東端の秋葉神社の範囲が城域と思われる。標高はおよそ24mである。

浮島古城図（浅野文庫所蔵「諸国古城之図」）に描かれる本丸と二ノ丸を仕切る堀切は、現在、台地上部分は埋められているが、南側斜面で堅堀aから横堀へつながり、北側の堅堀bも残存している。二ノ丸は全域が畠地となって遺構は確認できない。三ノ丸に相当する秋葉神社の鳥居付近に堀があったという地元の古老の話を2003年に聞き取っていたが、2022年時点ではその場所を確認できない。

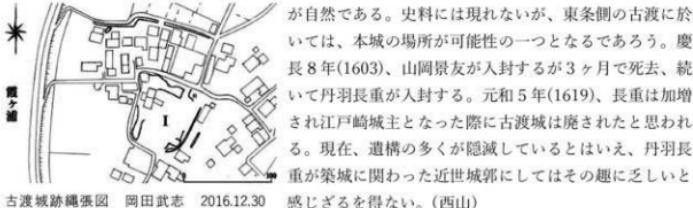
歴史については不確かで、承平年間に武藏權守興世王が築き、中世に浮島太郎安廣が修築し代々守ったが、天正年間に佐竹氏に滅ぼされた（中山信名1893ほか）他、治承4年(1180)に以仁王令旨が常陸國浮島の志田三郎義広へ届けられた（水原一校注1979）などの説も流布しているが、いずれも物語の城を出ない。（西山）

ふつとじょうあと
0847 古渡城跡 稲敷市古渡 現況：山林ほか 別称：古谷城、小谷城、藏前城 地図72

古渡城は、つくば市小野崎付近を水源とする小野川が、霞ヶ浦に注ぎ込む河口部右岸の低地に造られた平城である。

およそ 80m 四方の曲輪 I に、わずかに土壠と堀の痕跡が認められ、北西角は櫓台を思わせる様にやや高く突出している。ここから西へ伸びる直線道が湖畔に達する場所に「舟入」伝承を裏付ける様なエンマが戦後も残っていたが、護岸工事で隠滅した。曲輪 I を取り囲むように下位の曲輪が存在したと思われるが、塹や水路、道の曲がり方などから痕跡を偲ぶのみである。

古渡の地は、中世においては「海夫注文」にふつとのつした(信太)、ふつとのつとうう(東条)として現れ、近世に至っても「霞ヶ浦四十八津」の南津頭として、常に地域の政治・経済の拠点であり続けた。このことから、両古渡には港湾を管理・支配する拠点的施設があったと考えるのが自然である。史料には現れないが、東条側の古渡に於



古渡城跡縄張図 岡田武志 2016.12.30

(『続夷』より転載)

ふつとひがしじょうあと
0857 古渡東城跡 稲敷市古渡 現況：山林、寺社境内地

地図 72

小野川河口の右岸で、古渡城の東側約 450m にある熊野神社(峯熊野權現)及びその後背台地に存在した。近年の大規模な土取りによって東側半分以上は詳細不明のまま失われている。西側残存部分最高所の標高は約 27m である。

南側集落内の須賀神社北側から熊野神社への参道を辿ると、右手に谷津へ突き出た標高 10m ほどの櫓台風の高まり a がある。その左手奥の中段に熊野神社がある。北側の集落から上がる道 b もあるが、ローム質のため雨天時には登坂困難を感じられる急坂である。社殿北側の大きな谷を臨む U 字状の台地 A 上には平場はほとんどない。その東側 B は、荒地のため調査不可能だが、土

取りで完全に隠滅していると思われる。

古渡は霞ヶ浦の経済拠点の一つであり、かつ土岐水軍の出撃拠点でもある要衝の地で、小野川河口を監視するために、信太庄側の古渡に櫓の台城(835)、東条庄側の古渡に本城が配置されていたとを考えたい。永禄 11 年(1568)に土岐治英、天正 15 年(1587)には土岐治綱が熊野神社の社殿を再建している(茨城県立歴史館史料学芸部2017)のは、土岐氏がこの地を重要視していた証であろう。慶長 8 年(1603)に古渡へ入封した丹羽長重が元和 5 年(1619)に江戸崎城(0834)へ移るまでの間、近世城郭へと改修・整備したのは本城だった可能性も考えられよう。(西山)

古渡東城跡縄張図 西山洋 2022.2.14



阿波崎城跡は、周囲四方を香取の海（現在の霞ヶ浦、新利根川、利根川）に囲まれた、東条庄の最も東端の標高約28mの台地に位置している。現在、城址のほとんどがゴルフ場になっているため遺構の大部分は隠滅している。この台地上にはいわゆる阿波崎城の他、大日城、殿山城などが構築され、台地全体を城塞化したいわば阿波崎城館群といえる砦配置になっていたことが発掘調査から明らかになっている。台地辺縁の各所に城館を配置しているのは、香取の海全方位の死角を無くすためと思われる。各城館の築城時期や城館群としての整備時期は不明のため、南北朝の戦いに登場する時に阿波崎城がどの範囲まで広がっていたかは想像の域を出ない。

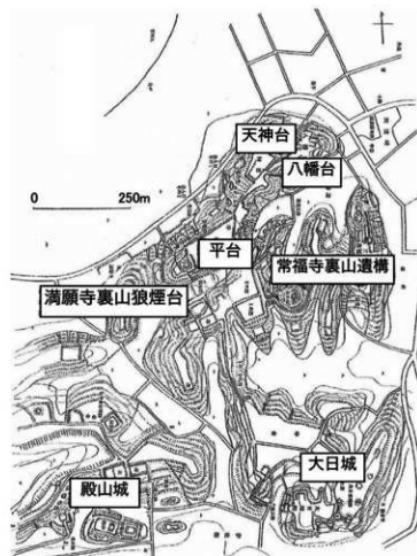
○阿波崎城：城址碑が立ち公園整備されている台地北端部は天神台と言われ、現在公園になっているのは阿波崎城の面積約3%、城館群の1.6%ほどである。天神台の東側に八幡台、谷津を挟んだ南側に常福寺裏山遺構、その西側に平台といわれる広い曲輪群および満願寺裏山の狼煙台などが配置されていた。おそらく平台が阿波崎城の中枢部分と思われるが全て隠滅している。

○大日城（0853）：稲敷市立あずま北小学校の後背台地の南縁部に位置する。6つの古墳を土塁で繋いた特徴的な構造が確認されている。2001年時点では大日古墳群3号および4号古墳を繋ぐ土塁およびそれらの周辺の土塁は現存していたが、2022年現在の状況は不明である。

○殿山城（0854）：あずま北小学校の西側約480mに位置するが、北側はゴルフ場造成によって隠

滅し、幸うじて南側斜面は残存しているが、最高所にゴルフ場フェンスの鉄柱が林立しているため遺構の残存状況は不明である。木原城城主近藤氏の菩提寺永嚴寺寺伝には、元は伊佐部にいたが居城が焼失したため神越の城へ移り木原と改めたとある。殿山城は伊佐部の居城推定地の一つである。

南北朝時代初期、北畠顯家を失った南朝方の北畠親房らは、建武5年（1338）9月、後醍醐天皇より態勢立て直しの命を受け東国を目指した。途中暴風雨に遭い親房は東条浦へ着岸し、9月下旬、東条氏の庇護を受けて神宮寺城（0845）へ入った。しかし、足利軍の猛攻撃を受けた神宮寺城はわずか10日足らずで落城したため、親房らは阿波崎城へ逃れたが、足利軍の執拗な追撃に阿波崎城はさらに短期日の内に陥落し（「畠田文書」）、小田治久を頼り小田の地へと敗走した。（西山）



阿波崎城跡縄張図 大竹房雄（稲敷郡東村教育委員会 1989
より転載し遺構名加筆）

K070 ほか 街道閉塞堀切・土塁群 稲敷地域 現況：山林 別称：戦国土塁 地図 71

城館の乗る台地の付け根(基部)を掘り切って台地全体を島状に独立させる防護方法は、いずれの地域においても考慮されている築城の基本といえる。特に、侵食谷が発達した標高約30m~40mの台地に囲まれる霞ヶ浦周辺地域では、最も一般的な防護方法である。共通する形態の特徴は、谷津頭と谷津頭を最短距離で結んで掘り切り、両端は堅堀となって谷津田の低地へ落ち込んでいることである。例えば、手野大堀(土浦市)、柴崎大堀、谷田部大堀(つくば市)、上条外堀い、大木戸土塁、島津二重堀、神田土塁(阿見町)、遠山城周辺の3堀切(牛久市)の他、鹿行地域にも多数点在している(石崎 2011、2012)。

一方、稲敷の台地上には、それらとは趣の異なる占地の堀切・土塁が、群の様相を呈して構築されている。江戸崎市街地から西へ向かう旧街道(馬の背道)に直行させて、街道の遮断を目的にしたと思われる堀切・土塁が数kmの間隔で連続して配置されている。これらが『阿見町史』でいうところの「戦国土塁」である。多くは直線状の堀と土塁であるが、中には桟形や馬出を備えた雀久保土塁、横矢を掛けた美浦境土塁、歎を伴った大形割目土塁あるいは二重堀になっている吉原二重堀土塁、沼田二重堀土塁、内堀土塁など、形態に多様性も見られる。特に、江戸崎城(0834)、木原城(0829)およびその他の支城に至る街道を閉塞し防護するためと思われるものは、稲敷市内に5本、阿見町内に11本、美浦村内に6本、牛久市内に1本と高密度に配置されている。

これら堀切・土塁群をいつ誰が構築したかに関する記録はないが、この一帯に勢力を広げていた江戸崎土岐氏が関与したと考えるのが自然であろう。戦国時代の後期、土岐氏の支配地域は、北に霞ヶ浦、東と南には香取の海といった沼沢地を控えて比較的安全ではあったが、西方は台地続きのためこの方面から佐竹氏とその同盟軍多賀谷氏が侵攻してくることが懸念された。土岐氏は、永禄5年(1562)に木原城、同11年に龍ヶ崎城(0777)を、西方防衛の両翼として改築し、広大な稲敷の台地をいくつかの支城と堀切・土塁群で面的に防衛する戦略を展開したと見られる。しかし、天正18年(1590)、想定をはるかに越える豊臣軍の江戸崎侵攻に対しては、防護力を発揮できなかつたと思われる。なお、これらの遺構は村の境界、猪土手、野馬土手、馬の放牧場だという説もあるが、仮にそのように使われたにしろ戦国時代に造られた構造物を近世以降に再利用したと考えても不自然ではないであろう。(西山)



稲敷地域の街道閉塞堀切・土塁群分布図 西山洋 2022.6.28